

を張籍が韓退之に話し居ることを讀者が看取し難きを恐る。故に最後に「張籍云」の三字を加へて讀者に注意せしなり。

〔備考〕名家の評一二を左に録す。

沈確士曰、辯許遠無降賊之理、全用議論。後於老人言補南雲乞師、全用敘事。末從張籍口中述于嵩、述張巡軼事。拉雜錯綜、史筆中之變體也。爭光日月、氣薄雲霄。文至此可云不朽。

賴山陽曰、敘議夾雜、而風神益遒。不學史遷、而得史遷神髓。恨不借此筆、作一部唐史。

練習應用

後之論者或有以我楠公比唐張巡者。巡戴全盛之唐室、拒狂胡之偏師。有二顏爲之先、有許遠爲之助。而不過下遮蔽江淮、守城致死。楠公則以寡兵據孤城、以北條氏百萬衆、而不能如之何。其勢之難易、功之大小、豈可同日而語也。

四五 李杜韓柳

作者

〔那珂通世〕盛岡の人、史學に精通す。東京女子師範學校長、東京高等師範學校教授に歴任す、又、帝國大學講師となり、文學博士の稱號を受けた。明治四十一年歿す。

解義

〔王維〕字は摩詰、詩を善くし、兼て畫に工なり。南宗派の祖なり。時人謂ふ、詩中に畫あり、畫中に詩ありと。開元中、進士第一に擢でらる。累遷して尙書右丞に至る。

〔孟浩然〕少くして氣節を好み、喜んで人の患難に當る。最も五言詩に工なり。年四十二、京都に遊ぶ。張九齡・王維と忘形の交をなす。一日、王維私に浩然を迎へて内署に入れ、風雅を商較す。適、玄宗臨幸す。浩然錯愕して床下に匿る。維乃ち答ふるに實を以てす。帝喜んで曰く、朕其の人を聞

き、未だ其の人を見ずと。詔して近作の詩を誦せしむ。不才明主棄、多病故人疎の句に至り、帝曰く、朕未だ嘗て棄てず、奈何ぞ我を誣ふると、因て放還す。張九齡荊州を鎮するに及び、署して從事となす、集三卷あり。

〔長安〕今の陝西省西安府治にして、唐の都なり。

〔待制集賢院〕集賢院は經籍を刊輯することを掌る。凡そ圖書の遺逸、賢才の隱滞は乃ち旨を承けて以て之を求む。

謀慮の時に施すべく、著述の世に行ふべきものは、其の學術を考へて以聞す。凡そ旨を承け、文章を撰集し、經籍を按理す。待制集賢院は同院に出仕し、制旨を待つて文章を草する職なり。

〔右拾遺〕中書省の官屬にして、天子の闕を補ひ、遺を拾ふの職なり。供奉諷諫を掌り、大事は廷議し、小は則ち封事を奉る。官等は從八品上。

〔秦州〕今の甘肅省の南境なり。

【劍南】今の四川省の大半なり。

【嚴武】玄宗に從ひ、蜀に入る。後、劍南節度使を経、入りて京官となる。再び出で、成都尹となり。吐蕃を破りて功あり。最も杜甫と相善かりき。

【江湖】江は大江、湖は洞庭・太湖等にして、都に遠き處なり。

【衡山】古昔、支那四嶽の一にして、今の湖南省衡州府衡山縣の西にあり。

【曠放不檢】磊落不羈にして、言行を慎み飾るが如きことなきなり。

【高而不切】俗氣離れて高尚なれども、煩悶切蹙、彼の屈原の如きことなきなり。

【數當寇亂】安史の亂のために、數、苦しみしをいふ。

【挺節無汗】忠節を守りて、賊に降らざりしをいふ。

【傷時橈弱】當時の士氣の懦弱なるを哀しみしなり。橈は撓なり、又、弱なり。

【逸才】衆人に超絶せる才。

【超世之心】世俗を超越せる心にして、名利の念等なきをいふ。

ふ。

【學士賀知章】集賢院學士賀知章なり。少うして文詞を以て名を知らる。又、草隸を善くし、張旭と相善し。玄宗の時禮部侍郎となり。集賢院學士を加へられ、又皇太子侍讀に充てらる。後、病に因て道士となり、郷里に還り、本郷の宅を捨て觀となす。

【謫仙人】仙界より謫せられて、此の世に生れ來れる人の意。

【供奉翰林】唐の玄宗の時、中書省、事務繁劇にして中書舍人のみに制誥を掌らしめては、滯滯の弊多きより、文學の士を選び、翰林供奉と稱し、集賢院學士と共に、制誥を分掌せしめ、後改めて翰林學士と稱す。供奉は出仕といふが如し。

【得罪】肅宗の時、永王璘、江陵に都督たり。李白を徵して僚佐となす。璘亂を謀り、兵敗る。白坐して夜郎に流さる。

【夜郎】今の貴州遵義府近傍。

【客死江南】江南は江蘇安徽の地方なり。客死は他郷にて死するなり。撫言に謂ふ、李白采石江中に遊ぶ。因て酔うて水中に入り、月を捉へんとして死すと。

【僞偉佚宕】なみすぐれたるをいふ。僞は異なり。偉は奇なり、又大なり。佚は緩なり。宕は過なり。穀梁傳、文公十一年に、長翟弟兄三人佚宕中國。

【不假彫琢之工】文飾を加ふるが如き小細工をせざること。即ち思想をありのままのまゝにのべて、裝飾的技巧を加へざるなり。雕は彫刻、琢は玉を磨くことにて、文字に手を加へて美しくする意なり。

【古風近體】古風は古體の詩、所謂古詩にして、近體は律詩、及び絶句なり。古詩の體裁は、既に言へるが如く、句數に制限なく、意趣の轉換する毎に、別種の韻字を押すを得べく、自由に長短句を交錯するを得べく、平仄を諧ふるを要せず。近體には五七言律あり、五言排律あり、五七言絶句あり。此等は最も聲律を重んずるが故に、平仄を諧へざるべからず。又一首中に數種の韻字を用ふるが如きこととはなきなり。次の課の二首は何れも近體に屬す。

【蔚然】盛なる貌。第三十一課に解せり。

【綜覈百家】百家の文を總て讀破し、其の思想文體を驗考すること。綜は總なり、覈は事實を檢考して明白にするなり。

【鏘然】盛なる貌。第三十一課に解せり。

【綜覈百家】百家の文を總て讀破し、其の思想文體を驗考すること。綜は總なり、覈は事實を檢考して明白にするなり。

り。

【鏘而化之】諸子百家の文體を融合消化して、自ら一家の體を成すをいふ。

【刊陳刻僞】刊は切なり、刻は削なり。陳は陳腐の陳にして、故きなり。僞は眞ならざるなり。唐以前に盛に行はれし六朝文學、即ち四六駢儷體は、陳腐にして、變化なく、虚飾に流れて、眞實なし。故に韓公これを剪除排斥せしなり。

【粹然一出於正】文飾的不純の質を交へず、總て眞情を露出するをいふ。粹然は純一なる貌。

【混洋自恣】廣大深奥なる思想を、四六文の如き小規矩に拘泥することなく、自在に發表するをいふ。混は水の深廣なる貌、洋は廣大なり。

【一洗八代之陋習】東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋の八代の間は、學者皆駢儷文に醉溺し、徒に纖麗を事として、實質なく、恰も造花を見るが如く、些の生氣なし。一定の形式に拘束せらるるを以て、千篇一律、更に新機軸を出す能はず。之を八代の衰といふ。韓文公出でて、其の陋習を一洗せり。

【追蹤於周漢】 周漢時代の文は、一定の形式に束縛せらるることなく、諸子百家各其の器に従ひ、辭章を成せり。之を古文といふ。韓文公、古文を唱道し、遂に唐の文章をして周漢の後を承けしめたり。

【柳宗元】 字は子厚、河東の人なり。韓文公と同じく、古文の復興に與つて力あり。嘗て柳州の刺史となる。故に世、柳州ともいふ。著す所、柳河東集四十七卷あり。

【順宗】 徳宗の長子なり。太子たりしとき、寛仁にして學藝を好み、師傅を禮重す。風疾あり、音を失ふ。在位僅に八月、位を皇太子に傳ふ。

【幸臣】 寵臣なり。

【王叔文】 順宗の時、翰林學士となる。帝、事毎に先づ翰林に下して、叔文をして可否せしめ、然る後、中書に宣す。宗元等其の謀議に參す。

【用事】 政事をきりもりすること。

【陸質】 憲宗太子たりし時、侍讀たり。既にして太子位に即くや、質病甚だし。帝ために臨問して、禮を加ふ。卒するに及び、門人等私に諡して文通先生といふ。著す所の書甚

だ多く、世に行はる。

【劉禹錫】 字は夢得、貞元中、柳宗元と同時に進士に擢でられ、博學宏詞科に中り、累遷して集賢殿學士となる。王叔文事を用ひ、引きて禁中に入れ、之と圖議し、言従はれざるなし。叔文敗るるに及び、連州刺史に貶せらる。晩年、檢校禮部尙書を加へらる。最も詩を能くす。白居易推して詩豪となす。其の著、劉賓客集三十卷、外集十卷あり。

【憲宗】 順宗の長子なり。剛明果斷、能く李絳・裴度等を用ひ、卒に吳元濟を擒にして淮西を平け、唐の威令復振ふに幾し。晩年、皇甫鎛等を信任し、此より政非なり。又、金丹を服し、躁怒すること多し。遂に内侍陳弘志等に弑せらる。

【貶竄】 官をさけて遠地にやること。

【宗元由是廢黜】 永州司馬に貶せらる。此の際、山水に遊びて作りし記事文の、世に流傳するもの多し。永州は今の湖南省に屬す。

【湮厄感鬱】 湮厄は窮厄なり。貶黜に遭ひしをいふ。感鬱は胸中にこもれる不平不満なり。

【寓諸文】 文中に含蓄せしむるなり。

【韋應物】 出で、は縣令・刺史となり、入つては郎となる。性高潔、鮮食寡欲、居るところ香を焚き、地を掃ひて坐す。其の詩を爲る、建安以還に馳驟し、各風韻を得たり。世人、王・孟・韋・柳と併稱するは、其の調頗る相似たるを以てなり。

【白居易】 字は樂天、自ら醉吟先生と號し。又香山居士と稱す。九歳にして聲律を諳識し、敏悟人に絶す。貞元中、進士に擢んでられ、翰林學士・左拾遺に至る。事を言ふを以て、江州司馬に貶せらる。後、刑部尙書を以て致仕す。著す所、白氏長慶集七十一卷あり。

【樂府】 古詩の一體にして、もと官廳の名より起れり。漢の武帝の時、樂に上せて謠ふべき適當の歌辭なきより、樂府を置き、文人を集めて、詩賦歌謠を作らしむ。哀帝の時に至りて罷む。後世、其の調に倣ふものを樂府といふ。されど漢代のものとは其の趣を異にし、樂にのぼせて謠ふべきものにあらず。これを新樂府と稱し、漢代のものを古樂府といふ。

【杜牧】 第五課に解せり。

【李商隱】 字は義山、玉溪子と號す。開成中、進士に擧げらる。累遷して檢校工部員外郎に至る。尤も律詩に長ず。其の著す所の雜纂は、我が邦人にも愛讀せらる。

【寄託深遠】 中に寓せる意味の深長なるをいふ。

【傷三緜麗】 繁縟纖麗にして、細工に過ぐるなり。

摘要

唐代詩文の代表的人物を知らしめんとす。

練習應用

文章經國之大業、不朽之盛事。年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。

四六 春 望

解 義

【國破山河在】 安史の亂のために、國家の城市民屋等が破壊せられ、唯山河のみが舊のままに残存せるをいふ。

【城春草木深】 城市は春まさに酣なれども、人民多く流離せるゆゑ、物淋しくして、草木のみ深く生茂せり。

【感時花濺淚】 時勢の衰微せるに感じて、花の美なるを見ても、樂しき情は起らず、却つて哀愁の情を催して、涙を流す、となり。

【恨別鳥驚心】 家人と離れ居りて、逢ふことの難きを悲みて、鳥の聲を聞きても喜ばしからず、戦時の物騒がしき音が耳に残り居るゆゑ、またそれかと、却つて心を驚かすとなり。

【烽火連三月】 警報の烽火(フ)は三月も打續きて、心を安んずる暇なし、となり。

【家書抵三萬金】 戦時中にて、道路の交通も至難なれば、家郷よりの安否を報ずる手紙は萬金にも値する程、貴く思はる、となり。

【白頭搔更短】 憂愁に堪へずして、始終かきむしるゆゑ、唯さへ短き白髪が、一層短くなりしとなり。

【渾欲不勝簪】 簪は髪を結びて、之をとむるために挿すものなるが、かく髪が短くなりて、辛うじて結ぶ程ゆゑ、簪をさしても、髪がほつれて、保たぬ程なりとの意。

【備考】

本首は五言律にして、所謂新體に屬す。韻は十二侵の深・心・金・簪を踏めり。

本詩は戦時に於ける春の光景のすさまじさと、其の裏に於ける自己の境遇の悲惨とを抒へたるものなり。蓋し敵に擒はれし間の長安城に於ける作ならん。

摘 要

前課に因みて本詩を掲げ、安史の亂の凄慘と、杜甫の苦節とを思はしめんとす。

詩 話 (練習)

讀 法

古人爲詩、貴乎意在言外、使人思而得之。故言之者無罪、聞之者足以戒。近世詩人、惟杜子美最得詩人之體。如國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心、山河在、明無餘物矣。草木深、明無人矣。花鳥平時可娛之物、見之而泣、聞之而恐、則時可知矣。他皆類此。不可不編舉。(司馬溫公、續詩話)

解 義

【意在言外】 思想が形に見はれたる文字の外にある意にして、眞意は文字の奥に深く潛み居るをいふ。所謂、含蓄と稱するものなり。

【思而得之】 其の詩を熟讀玩味して、其の思想の眞致を知得するをいふ。

【言之者無罪】 當事者を譏るが如き言は文字に見はれずして、深く中に藏するものゆゑ、作者は罪に問はるるが如き憂なしとなり。此の句は次の句と共に毛詩の序文にあり。

【聞之者足以戒】 これを讀むもの、深く之を味へば、國家の衰亂を悲しむ内には、かかる時勢を作りたる賊を惡むの意を寓することを知るゆゑ、戒とするに足る、となり。

【山河在明無餘物】 「山河在」の三字にて、城壁舍屋等の破壊して、復前日のおもかけなきことを示せり。

【草木深明無人】 「草木深」の三字にて、人が或は死するか、又は他に逃れて、草木に手を加ふるものもなきを示せり。

【時可知】 時代が平時と異なるを知るべし。

【他皆類此】 杜甫の詩は他の作も皆これに類す、となり。

四七 送秘書晁監還日本

解義

【秘書晁監】 秘書監晁衡、即ち阿部仲麻呂をいふ。仲麻呂性聰敏、讀書を好む。年十六選ばれて遣唐留學生となる。姓名を易へて晁衡といふ。唐に仕へて秘書監に累遷す。孝謙帝の勝寶中、藤原清河唐に至る。玄宗仲麻呂に命じて接伴せしむ。清河還るに及び、仲麻呂共に還らんと欲す。玄宗因て命じて使となす。王維・包佶等皆贈るに詩を以てす。海上風に遇ひ、安南に漂泊す。李白以爲へらく漂没すと。詩を作りて之を哭す。其の詩に曰く、

日本晁卿辭帝都 征帆一片繞蓬壺

明月不歸沈碧海 白雲愁色滿蒼梧

後清河と復唐に至る。肅宗左散騎常侍・安南都護に擢んづ。光仁帝の寶龜元年唐に卒す。年七十。仲麻呂唐に在ること五十餘年、身榮貴と雖も、歸るを思つて已まず。言郷國に

及べば、未だ嘗て悽惻せずんばならず。嘗て月を望み、和歌を作りて曰く、

あまの原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

後世傳へて絶唱となす。

【積水不可極】 海の限りなく廣く遠きをいふ。積水は海なり。

【安知滄海東】 海洋際涯なし、何ぞ海東に國ありとは思はんや、となり。

【九州何處遠】 天地の間、中國の外に、赤縣・神州といふが如き九國ありといふ。其中、何れの地か最も遠き。意ふに日本國最も遠からんとなり。この九州は支那の九州にあらず、又日本の九州にもあらず。支那の古説に、支那の外に九箇の州あり、是等が合して世界は成れりとせり。

【萬里若乘空】 茫茫たる萬里の波上を舟にて行くは、恰も

空中を行くが如くにて、前途に果して陸ありや否やも、測り難しとなり。

【向國惟看日】 故國の方を見渡せば、惟東より出づる日を見るのみにて、何物もなし、其の日の出づる方向を目あてとして行くのみ、となり。

【歸帆但信風】 船は唯風のまにまに、或は右に漂ひ、或は左に流れ、風のなきたる時、僅に東に方向を取るのみ。かくせざれば忽ち覆没の禍に遭ふ。

【鼉身映天黑魚眼射波紅】 鼉は大龜なり。この二句は海中の動物を想像したるなり。唐詩選註に、二句謂水族怪詭、洋中險坎、可懼也。思念至此、故人戀々。

【郷國扶桑外】 朝衡の郷國は、扶桑の外なる孤島にあり。となり。遠隔の地の意。山海經に、大荒之中、暘谷、上有扶桑木。云々。淮南子註に、暘谷、日所出也。文獻通考に、扶桑國者在東漢國東二萬餘里。地在中國之東。其上多扶桑木。故以爲名。云々。十州記に、扶桑在碧海中。樹長數千丈、一千餘圍、兩々同根相依倚。故名扶桑。とあり。我が日本を扶桑といふも是等の意味より出づ。

【主人孤島中】 歸りたる上は、主人はこれまでの友にも逢はれず、孤島の中にさびしく暮すならんとなり。

【別離方異域音信若爲通】 一旦別れて國を異にする上は、如何んぞ音信を通ずることを得んや、今日が永久の訣別なりとの意。

【備考】 本詩は五言排律にして、亦新體に屬す。排律は、始の二句と、終の二句とを除くの外、中間は皆聯句なるを要す。句數は制限なし。韻字は終始同韻を用ふるものとす。本詩の韻字は、一東の韻なる、東、空、風、紅、中、通なり。平仄の約束あること、絶句及び律詩に同じ。

摘要

前課に縁ある王維の詩にして、且我が邦に關係あるものを掲ぐ。

四八 送溫處士赴河陽軍序

解義

【伯樂】 伯樂は秦の穆公の時の人、姓は孫、名は陽、善く馬を相す。天上に伯樂星あり、天馬を主典す。人、孫陽の馬を識るを見、因て之を號して伯樂といふ。戰國策に、楚客謂春申君曰、昔者馱驥駕鹽車、上吳坂、遷延負輓而不進、見伯樂仰而鳴之。知其伯樂知己也。云々。

【冀北】 冀州の北部なり。冀州は今の直隸・山西兩省の地をいふ。冀北は馬の産地なり。左傳昭公四年に、冀之北土、馬之所生。左氏會箋に、冀北出良馬、故良馬因謂之驥。

【多於天下】 天下の中にて、最も多き意、即ち天下の中の何處よりも多きなり。

【解之者】 伯樂云々といひし人なり。夫冀北云々の疑問に遇ひしゆゑ、之を解釋するなり。本文の首節は自問自答なれども、假に人を設けて、問答せしめしなり。

【東都】 洛陽にして、今の河南省河南府なり。

【士大夫】 人物といふが如し。士及び大夫を連ねたる語にして、民の上に立つ官吏、又は之に相當する力あるものなり。【恃才能云云】 自己の才能に自信あるが爲に、自重して、容易に官途に就かざるをいふ。史記、老子傳に、老子曰、良賈深藏若虛。

【洛之北涯】 洛水の北岸の意。

【石生】 名は洪、明經に擧げられ、黃州の録事參軍となる。後辭して東都に還り、十餘年間出です。烏重胤河陽を鎮するや、書幣を以て之を迎ふ。生は先生の意なり。文章軌範補注に、生即先生、古人或單稱先、或稱生。

【溫生】 名は道、書を嗜み、氣節あり。一時、壽州の刺史張建封に従ふ。德宗その才を愛し、諫官たらしめんとせしが果さず。乃ち去て東都に隱る。烏重胤奏して之を幕府に置く。

【大夫烏公以鉄鉞鎮河陽】 御史大夫烏重胤が河陽軍の節度使となるをいふ。

御史大夫は御史臺の長官にして、官吏の糾察を掌る。烏重胤は當時御史大夫の官にして、節度使の職を奉じたるなり。前にもいへるが如く、官は品等・俸祿の標準を示したるものにして、其の職を行ふにあらず。故に烏重胤の實職は節度使なり。

烏重胤は憲宗の元和五年、河陽軍節度使となる。賢を求めて之を用ふ。舊唐書、烏重胤傳に、重胤自行間、及爲長帥、赤心奉上、能與下同甘苦。所至立功、未嘗矜伐。而善待賓僚、禮分同至。當時名士咸願依之。云云。鉄は斧、鉞はマサカリなり。軍令に違ふものを刑戮する具にして、將軍の持するものなり。節度使は地方を鎮する軍職ゆゑ、以斧鉞鎮、といふ。河陽は今の河南省懷慶府孟縣なり。軍は鎮府、即ち鎮臺なり。河陽節度使は河陽三城・懷州・衛州を管せり。

【以石生爲才】 石生の才あるを見込みたるなり。
【以禮爲羅】 禮を厚うして招聘する意。羅は鳥雀を捕ふる

網なり。人才を收用するを鳥雀を網するに譬ふるなり。

【致之幕下】 幕府に招致するなり。

【拔其尤】 其の中のすぐれたるものを引抜くなり。

【居守・河南尹】 鄭餘慶をいふ。舊唐書、憲宗紀に元和三年以河南尹鄭餘慶爲東都留守。とあり。河南尹は河南道の長官にして、東都留守は洛陽鎮撫の武職なり。鄭餘慶はこ

の兩職を兼ねたるなり。留守は居守に同じ。

【百司之執事】 多くの官署の役人をいふ。

【吾輩二縣之大夫】 二縣は河南縣・洛陽縣なり。退之、時に河南の令たり。大夫は行政官の意。

【政有所不通】 政事が民に都合よく行はれずして、苦情等の起るをいふ。

【爰所諮而處焉】 二人去りし故、諮詢して適當の處置をなすに由なしとなり。

【巷處】 市井に處るをいふ。市井は民間といふに同じ。

【小子後生】 年少後進の人なり。

【於何考德而問業】 誰を標準として、德行を進め、學業を問はんとなり。

【禮於其廬】 其の家を訪問して、敬意を表するなり。
 【南面而聽天下】 天子となりて、天下の政を聽くなり。
 【託重而恃力】 天下の重任を委託して、其の力に信賴するなり。

【求内外無治不可得】 中央地方ともに治まらざることを希望すとも、不可能なり。よき將相を任用すれば、天下は否でも應でも治まらざるを得ず。

【糜於此】 今の官職に引留めらるる意。

【資二生以待老】 二生を頼りとして、老に至るまで、公私ともに其の力を借らんと期し居たりとなり。

【介然於懷】 心に不満なる意。されど眞の不满にはあらず、却て満足せること文意によりて知るべし。

【前所稱】 將爲天子云云を指す。

【後所稱】 爲有力者奪之云云を指す。

【致私怨於盡取】 人才を盡く引抜かれて私情として怨み居ることを烏公に傳達せられたしとなり。されど眞の私怨にあこらず、喜悅の意、紙面に満てり。

【留守相公】 鄭餘慶なり。中書侍郎・同中書門下平章事とな

る。故に相公といふ。されど、これは官にして實職は留守なること、既に言へる所にて知るべし。

【四韻】 四個の韻を踏める詩なり。蓋し五言律ならん。

【推其意】 詩の意を推演するなり。

摘要

一 韓退之の文章を味はしめ、且自得する所あらしめんして掲ぐ。

二 本文の結構

第一段 昔伯樂が良馬を選抜せしことを陳べて後段の豫備とす。

第二段 烏公が温生の才を知りて、之を拔擢せしことを陳ぶ。

第三段 温生去りて東都に人なきを恨む、これ最も送別の體を得たるものなり。

第四段 人才の登庸せられたるを天下のために祝し、且前段の意を總括して結ぶ。

【備考】 名家の評を左に録す。

謝疊山曰、文有氣力、有光燄、頓挫豪宕、讀之快人意。可發人才思。

金聖嘆曰、前惡空、以冀北馬空一起、中惡空、拈出無數嗟怨、後又惡空、結以自己嗟怨。俱是惡空文字。

賴山陽曰、送石處士序、既盡言。至送温處士、無所復可言。乃惡空、取一喻翻弄。成文字者、熟此訣、無不可言之題也。

四九 送楊少尹序

解義

【疏廣受二子】 疏廣・疏受の二人なり。廣字は仲翁、春秋に明なり。漢の宣帝の時、太子太傅となる。兄の子受、少傅となる。在官五年、廣、受到謂つて曰く、官成り名立ちて去らずんば、恐らくは後悔あらんと。乃ち上疏して骸骨を乞ふ。帝これ許し、黄金二十斤を賜ふ。太子五十斤を贈る。公卿大夫送るもの車數百兩。觀るもの之を賢とす。歸りし日、金を散じて諸故舊に與へ、郷の父老を召して歡飲し、田宅を治めず。或人子孫の計を爲さんことを勸む。廣曰く、賢にして財多ければ、則ち其の志を損し、愚にして財多ければ、則ち其の過を益す。且夫れ富は衆の怨なり。吾其の過を益して怨を生ずるを欲せずと。受字は公子、賢良を以て擧げられ、太子少傅となる。禮を好みて恭謹、敏にして辭あり。廣と同じく辭して歸る。共に壽を以て終る。

【供張】 宴會を催すために、諸物を準備し、幕を張りなどすること。

【祖道】 送別なり。漢書の注に、祖は行を送るの祭にて、因て饗宴するなり、とあり。詩經、大雅烝民篇に、仲山甫出祖、四牡業業。

【漢史】 班固の漢書をいふ。

【赫赫】 明著なるをいふ。

【若前日事】 僅か數日前の事の如く思はる、となり。

【國子司業】 京師の大學校を國子監といひ、其の長官を國子祭酒、次官を國子司業といふ。

【楊君巨源】 字は景山、巨源は其の名なり。

【以能詩訓後進】 詩經に明なるを以て、これを學生に教へしなり。巨源は作詩をも善くせり。

【古今人不相及云云】 世人が常に今人は古人に及ばず、といへるが、今楊巨源が隱退したるは、其の意正に二疏と相同

じ。然らば一口に今人古人に如かずとは言ひ難しとの意。

【太史氏】 朝廷の記録を掌る官なり。

【張大其事】 送別會の狀況を立派に書くなり。

【不落莫否】 其の記事が貧弱にして、人目を惹くに足らざるや否や、なり。

【畫與不畫固不論】 畫かすとも、別に人物が下るわけにもあらざれば、畫くと畫かざるとは、固より問題にあらずとなり。

【有愛而惜之者】 之を愛惜する所あり、の意。

【爲其都少尹云云】 楊巨源は今の山西省蒲州の人にして、河東府に屬せり。致仕して歸るや、朝廷以て河東の少尹となし、職務を領せず、歲祿を給して以て其の身を終ふ。故に其の都とは巨源の郷なる河東府をいふなり。少尹は次官にして、長官を尹とす。

【爲歌詩以勸之】 送別の歌詩を作りて、以て其の行を壯にするなり。

【屬而和之】 丞相の歌詩に次ぎて、和韻す、となり。和韻とは先唱者の韻字を用ひて作るをいふ。

【古今人不同未可知】 古の人でありしことにて、今日の人になきことあり。古人になかりしことにて、今人にあることあり、即ち送者の多少、贈詩の有無等、同じからざるべけれど、是等を以て優劣を判じ難し、となり。

【中世無所於歸】 古代は士大夫が致仕すれば、家に歸りて郷大夫・郷先生となるが如き制ありしかども、中古（漢代以後）以後は役所を以て家の如く心得、更に退隱後の計をなさず。故に官を退けば、歸るべき家なし、となり。

【始冠舉於其郷】 二十歳になりて、始めて冠禮を行ひ、成人となり、郷試とて、州縣に於ける豫備試験を受けて及第し、地方官より推舉せられて郷貢進士となるなり。

【歌鹿鳴而來】 州縣より推舉せらるる時、長吏宴を設けて之を饗し、鹿鳴の詩を歌ふ。之を鹿鳴之宴といふ。それより京師に來りて、中央政府の試験を受くるなり。鹿鳴の詩とは、詩經、小雅鹿鳴篇に、呦々鹿鳴、食野之芩、我有嘉賓、鼓瑟鼓琴、云云。是なり。もと嘉賓を燕する詩なり。因て此の詩を歌ふ。

【先人】 亡父をいふ。

【不_レ去_二其郷_一】 老に至れば、故郷を忘れずして歸るをいふ。
 【古之所謂郷先生】 古代に郷先生といへるものあり、「所謂」とはそれを指す。當時郷に郷學あり、致仕して郷にある大夫を取りて太師とし、致仕の士を少師となし、名づけて郷先生といふ。儀禮に以_レ贊具_二於郷大夫・郷先生_一。
 【祭_二於社_一】 社は我が國の鎮守の社ともいふべきものなり。古へ郷先生歿すれば、其の社に祀り置きしなり。社は土を祭る宮にして、一郷にもあり、一國にもあり。

摘要

- 一 前課と同じ旨趣によりて、本文を載す。
- 二 本文の結構。
 - 第一段 古人の例を舉げて、本題に入るの前提とす。
 - 第二段 楊少尹の精神の古人と相似たるをいふ。
 - 第三段 隱退の時の狀況の異同は言ふに足らざることを陳ぶ。
 - 第四段 家に歸りて、晩年を送るを嘆美す。

五〇 師 說

解 義

【學者】 學問を爲す者の意にて、學問に秀でたる者の意にあらず。
 【必有_レ師】 七十子の徒が孔子に學び、孟子が子思の門人に學びたるが如きをいふ。呂氏春秋に、神農師_ニ悉諸_一、黃帝師_ニ大撓_一、(中略) 吳王闔閭師_ニ伍子胥_一、文之儀、越王勾踐師_ニ范蠡_一、大夫種。此十聖人・六賢者、未_レ有_二不_レ尊_レ師者_一也。
 【傳_レ道授_レ業解_レ惑】 古文眞寶注に、道者致知、格物、誠意、正心、齊家、治國、平天下之道、業者六經、禮樂、文學之業、惑者胸中有_二疑惑_一而未_レ開明_一也。
 【人非_二生而知_レ之者_一】 人は生れたるままにて、教を受けずしては、事物の道理を知るものにあらず、となり。論語、述而篇に、子曰、我非_二生而知_レ之者_一、好_レ古、敏以求_レ之者也。
 【庸知_二其年之先_レ後_一、生於吾_レ乎_一】 何ぞ吾より先に生れたる

と、後に生れたるを問はんや、かかることは吾が關知する所にあらず、となり。

【道之所_レ存師之所_レ存也】 道を知る人ならば、尊卑老少を問はず、吾が師とすべき者なり、との意。

【師道之不_レ傳也久矣】 師に就きて學ぶといふ古法が中絶して、傳らざること久し、となり。

【欲_二人之無_二疑惑_一也難矣】 今の世の人々に疑惑不明のことがなきを希望するも、むつかしきことなり。何となれば、師を求めざればなり。

【出_レ人也遠矣】 常人よりも、遠く傑出するなり。
 【去_二聖人_一也亦遠矣】 聖人に遠く及ばざるなり。

【聖益聖愚益愚】 聖人は師に就きて學びしゆゑ、益、高く見え、愚人は師に學ばざるゆゑ、益、低くなりて、其懸隔次第に甚だしくなる。

【其皆出_二於此_一乎】 師に就くと、就かざるとに由るをいふ。

【習其句讀】 其の讀法、即ち形式を練習するをいふ。

【句讀之不知惑之不解或師焉或不焉】 句讀の知らざるものをば師に従はしめ、疑の解けざる自身は師に就かず。

【小學而大遺】 句讀の如き小なることをば、童子を責め立てて學ばせ、道を知り、惑を解くが如き大事をば、抛棄して學ばんとせす。

【吾未見其明也】 吾はかくの如きものをば、事理に明なるものとは思はざるなり。

【巫醫樂師】 ミコ(またイチコ) や、醫者や、音樂師なり。巫は古代醫を兼ねたれば、巫醫を單に醫者の意にも用ふ。

【百工】 種々の工匠技藝者なり。

【道相似也】 其の知る所の道も吾と相似て、格別すぐれたりとも見えず、となり。

【位卑則足羞】 師たる人の位卑ければ、これに就きて學ぶは、外聞に係はる。となり。

【官盛則近諛】 師たる人の官高ければ、之に従つて學ぶは、媚を呈して、利を釣るが如くに見ゆ。となり。

【君子不齒】 巫醫以下のものは、上流君子の齒せざる、賤し

き職業なり。となり。

【其智乃反不能及】 巫醫百工は知らざることをば師に就きて學ぶを知らず、士大夫は之を知らず。是れ其の智慮却つて彼等に及ばざるなり。

【聖人無常師】 聖人には一定の師なく、それらの道に達せるものをば皆師とす、となり。論語、子張篇に、公孫朝問於子貢曰、仲尼焉學。子貢曰、文武之道未墜於地、在。人。賢者識其大者、不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。夫子焉不學。而亦何常師之有。

【鄭子其師襄老聃】 左傳、昭公十七年に、鄭子來朝。公與之宴。昭子問曰、少皞氏、鳥名官、何故也。鄭子曰、吾祖也。我知之。仲尼聞之、見於鄭子而學之。既而告人曰、吾聞之、天子失官、學在四夷。猶信。とあり。鄭は少昊氏の後裔の封せられし國、子は爵名なり。家語、觀周篇に、孔子謂南宮敬叔曰、吾聞、老聃博古、知今、通禮樂之原、明道德之歸。則吾師也。今將往矣。與俱至周、問禮于老聃、訪樂于襄弘。注に、弘周大夫とあり。史記、孔子世家に、孔子學鼓琴于師襄子。案隱に、家語師

襄曰、吾雖以擊磬爲官、然能於瑟。

【鄭子之徒其賢不及孔子】 鄭子・襄弘等は其の賢なること孔子に及ばず。然れども、一藝に於ては孔子に優る所あるゆゑ、孔子は己の賢を挾まずして、これ等に問ひたりとの意。

【三人行必有我師焉】 孔子の語にして、論語、述而篇にあり。我と他の二人と三人にて事を行ふに、一人のなす所是にして、他の一人の爲す所非ならば、我は其の非を避けて、其の是に就く。然らば、此の二人は即ち我が師なり、との意。何晏曰く、言我三人行、本無賢愚、擇善從之、不善改之。故無常師也。朱熹曰く、三人同行、其一我也、彼二人者、一善、一惡、則我從其善而改其惡焉。是二人者皆我師也。

【故弟子不必不如師】 孔子の言の如く、善者も不善者も皆吾が師となるものゆゑ、弟子が師に劣るものとは限らず、孔子の鄭子の徒に於けるが如き是なり。

【聞道有先後云々】 要するに、如何なるものを師とすべきかといへば、道を知ること、我より先なると、後なるとの

別あり。藝術學業に専門的研究あり。我は其の先なる人、専門的なる人を師とし學ばんのみ。年齒、卑尊の如何は、問ふ所にあらず。となり。

【如是而已】 これだけのことにて、別にむづかしき理窟も何もあるにあらず、となり。

【古文】 六朝文學に對して、秦漢以前の文學をいふ。六朝は魏・晉・宋・齊・梁・陳なり。

【六藝】 禮・樂・射・御・書・數なり。又、六經の意にも用ふ。即ち、易・詩・書・禮・樂・春秋なり。

【經傳】 琅琊代醉記卷九に、聖人、制作曰經、賢者著述曰傳。

【不拘於時】 人々皆師に就くを恥づる時世なるにも頓着せず、の意。

【行古道】 師に就きて學ぶといふ古法に従ふをいふ。

摘要

- 一 前課と同じく韓文に親しましめ、且師に就くの要を知らしめんとす。
- 二 本文の結構

第一段 師の必要

第二段 師の資格

第三段 聖愚の懸隔甚だしき所以

第四段 童子には學ばせ、己は學ばざるの愚

第五段 士大夫の智の巫醫樂師等に及ばざること

第六段 師を選ぶの法

第七段 李蟠の心掛を稱す

〔備考〕名家の評を左に録す

洪容齋曰、柳子厚答韋中立書云、今之世不聞有師。獨韓愈不顧流俗、犯笑侮、收召後學、作師說、因抗顏爲師。愈以是得狂名。又報嚴厚與書曰、僕才能勇敢、不如韓退之。故不爲人師。人之所見有同異、無以韓責我。然觀退之師說云、弟子不必不如師、師不必賢于弟子。其言非好爲人師者也。學者不歸于厚而歸于退之。故子厚有此說耳。此篇文字如常山之蛇、救首救尾、若隱若見、令人難識。長野豐山曰、篇中多用兩扇文法。猶軍有左右翼、及其戰鬪、救首救尾、常山之蛇勢、奇正互出、絕妙好辭。(兩扇法は又雙關法ともいふ。相對的の句法なり。)

五一 左遷至藍關示姪孫湘

解義

【左遷】 秩位を貶し、遠地に謫せらるるをいふ。唐の憲宗使を遣し、鳳翔府に往き、佛骨を迎へて禁中に入れしむ。時に韓愈刑部侍郎たりしが、上表して極諫し、憲宗の震怒に遭ひ、潮州に貶せられしこと、既に言へり。本詩は其の途中、藍關に於ての作なり。此の時の上表文は唐宋八家文に載せたり。

【藍關】 藍田關にして、今の陝西省藍田縣の東南にあり。藍田の山は美玉を出すを以て名あり。

【姪孫湘】 兄弟の孫をいふ。韓湘字は北渚、進士に第し、官、大理寺丞に至る。青瑣高議に、湘字清夫、愈姪、落魄不羈、自云能開頃刻花。嘗於愈前聚土覆盆。良久現碧花二朶。葉間有小金字云、雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前。愈不曉詩意。湘曰、事久可驗。後愈貶潮陽、中

途遇雪。湘忽冒雪而來、曰、憶花上句乎、乃今日之事也。とあり。隨園隨筆には、湘乃會昌三年進士、非好道者。其好道者別是一族子。とあり。韓湘の事は列仙傳などにも載せたり。

【一封朝奏一馬不前】 朝に佛骨を迎ふるを論ずる表を宮中に奉りたるに、逆鱗に逢ひて、夕には八千里も遠き潮州に貶謫せらるる身となれり、となり。九重天は宮中を天に喩へたるなり。天は九重即ち九層より成れり、といふ。潮州は今の廣東省潮州府、八千里は凡そ我が八百里。

【爲聖明一惜殘年】 我が心中は天子の爲に弊害を除かんと欲する赤誠のみ、何ぞ老朽の身を以て老先短き餘生を惜まんや、生死などは眼中になし、となり。

【雲橫秦嶺一馬不前】 雲は秦嶺に横たはりて、我が家は何方なるかも分らず、雪は藍關を取圍みて、吾が乗れる馬までも前に進ず、故郷を思ふに似たり、となり。秦嶺は南山

にして、長安府城の南にあり。

【知汝遠來一瘴江邊】 汝が遠くここまで送り來れるは、定めて深意あるを知れり。料るに永別の積りなるべし。潮州は空氣の惡しき處なれば、彼地に往かば、再び生きては還られじ、汝は我骨を瘴氣深き水の邊に拾うて、跡の始末をしてくれ、との意。瘴氣は疾病を誘發する惡氣なり。

摘要

前課に關聯して、韓公の詩を掲げ、其の風格を想像せしめ併せて吟誦の資に供す。

備考

本詩は七言律にして、新體に屬す。韻字は一先の天・千・年・前・邊を用ひたり。

太平記、無禮講の條に、韓湘に關する説話あり。固より荒唐の言なれども、文學的方面より見て興あれば、左に録す。

此の韓昌黎と申すは、晩唐の季に出て、文才優長の人なりけり。詩は杜子美・李太白に肩を雙べ、文章は漢魏晉宋の間に傑出せり。

昌黎が猶子韓湘といふものあり。是は文字も嗜まず、詩篇にも携はらず、只道士の術を學びて、無爲を業とし、無事を事とす。或時昌黎、韓湘に向つて申しけるは、汝天地の中に化生して、仁義

の外に遺遺す。是れ君子の恥づる所、小人の專とする所也。我常に汝が爲に是を悲むこと切なり。と教訓しければ、韓湘大にあざ笑ひて、仁義は大道の廢れたる處に出て、學校は大偽の起る時に盛也。我れ無爲の境に優遊して、是非の外に自得す。されば、眞宰の臂を掣いて、壺中に天地を藏し、造化の工を奪うて、橘裏に山川を峙つ。却つて悲むらくは、公の只古人の糟粕を甘なつて空しく一生を區々の中に誤ることを、と答へければ、昌黎重ねて曰く、汝が所言我未信、今則造化の工を奪ふことを得てんや、と問ふに、韓湘答ふることなくして、前に置きたる瑠璃の盆を打覆せて、聽て引仰向けたるを見れば、忽に碧玉の牡丹の花の嬋娟たる一枝あり。昌黎驚いて是を見るに、花中に金字に書ける一聯の句あり。雲橫秦嶺、家何在、雪擁藍關、馬不前、云云。昌黎不思議の思を成して、是を讀みて一唱三嘆するに、句の優美遠長なる體、製のみありて、其の趣向落着の所を難知。手に取りて是を見んとすれば、忽然として消失せぬ。是よりしてこそ、韓湘仙術の道を得たりとは、天下の人に知られられ。其の後、昌黎佛法を破りて、儒教を貴むべき由、奏狀を奉りける筈に依りて、潮州へ流さる。日暮馬泥んで前途程遠し。遙に故郷の方を顧れば、秦嶺に雲横たはつて、來つらん方も不覺、悼んで萬仞の嶮に登らんとすれば、藍關に雪滿ちて、行くべき末の路もなし。進退歩を失ひて、頭を回らす處に、何くより來れるともなく、韓湘勃然として傍にあり。昌黎悦んで馬より下り、韓湘が袖を引いて、涙の中に申しけるは、先年碧玉の花の中に見えたりし一聯の句は、汝、我に預め左遷の愁を告知せるなり。今又汝爰に來れり。料り知りぬ、我

遂に謫居に愁死して、歸ることを得じと。再會期無くして、遠別今にあり、豈悲しみに堪へんやとて、前の一聯に、句を續けて、八句一首と成して、韓湘に與ふ。韓湘此の詩を袖に入れて、泣々東西に別れけり。誠なる哉、痴人面前に不説夢と云ふ事を、云云。

五二 漁翁

解義

【漁翁夜傍西巖宿】 一漁翁あり、湘水の西岸に舟を泊めて其の巖下に一夜をあかせりとなり。幽閑の狀、想見すべし。
 【曉汲清湘燃楚竹】 明ければ、清き湘流の水を汲みて、飲料に供し、楚の地の竹を焚きて、物を煮焼せり、となり。
 楚は湖北・湖南の地方なり。ここは湘水の濱ゆるゑ、湖南省に屬す。一説に、楚竹は柴と竹となり。

【煙消日出不見人】 やがて、あたりのもやも消え、日も現はれ出でたるが、漁船は既に去りて、人影も見えず、となり。
 【欸乃一聲山水綠】 遙かに遠くより舟歌の聲が漏れ聞ゆるのみにて、漁翁の姿は復見るべからず、目に入るは周圍の山水の綠のみとなり。清爽の氣、眼前に髣髴たり。

欸乃の音に就ては、或はアイダイと讀むべしといひ、或は

アイナイと讀むべし、といひ、諸説あり。康熙字典に、欸乃、湖中節歌聲、唐元結有欸乃曲。從依亥切。或音襖者非。とあり、されど、三體詩注に、欸乃、楚地人讀爲襖。とあり。又、漁陰叢話に、元次山集、欸乃曲注、欸音襖、乃音靄、棹船之聲。洪駒父詩話謂、欸音襖、乃音靄、反其音、是不看次山集而妄爲之說耳。とあり。且つ我が邦にては、古くよりアウアイと讀み來りたれば、之に従ふが可ならん。

【回看天際下中流】 自分は晴れ渡りたる天上の見ゆる限りを見廻しながら、舟にて湘水の中流を下るとなり。

【巖上無心雲相逐】 江岸の巖上には無心の雲がつきつきに出でて、あとを逐ひつつ流れゆくとなり。雲が中心もなくふわりふわりと、空中を浮遊するさまは、之を人に譬へば、何のささはる心もなきに似たり。故に無心といへり。陶淵明の歸去來辭に、雲無心以出岫。の句あり。秋葉桂園の

詩に、

入雲不見雲 出雲乃見雲

問雲雲不答 雲亦不知雲

これ能く無心の狀を寫したるものといふべし。

摘要

韓退之と相並びて、文章と共に詩を善くしたる柳子厚の作を一例として掲げ、同時に山水の自然美を歌へる妙趣を知らしめんとす。

〔備考〕

本詩は六句より成りて、古風に屬す。韻字は一屋の韻なる宿・竹・逐と二沃の韻なる綠とを押し。屋・沃は通韻なり。
 津阪孝綽の絶句類選に、原本有回看天際下中流、巖上無心雲相逐二句。東坡謂、刪去則餘情不盡。良然。故後人選本、皆節入絶句とあり。但、絶句に仄韻を押しことは極めて稀なれば、變體に屬すべきものなり。

五三 始得西山宴遊記

解義

【僇人】 僇は戮に同じ。罪人の意なり。子厚、王叔文の事に坐し、永州司馬に貶せらる。故にいふ。

【是州】 今の湖南省永州府。

【惴々】 惴は恐る、貌、恐懼謹慎するをいふ。

【漫々】 閑游の貌。ぶらぶらと歩くこと。

【廻溪】 迂回せる溪。

【披草】 草を伐り開きて、座を設くること。

【意有所極云々】 心に充分満足する所あれば、臥しても、之と同趣の事を夢みるなり。

【皆我有也】 山の眺望を以て我が有となすも、之を咎むるものなし。最も自由にして、高尚なる所有物なり。蘇東坡の赤壁賦に江上之清風與山間之明月、耳得之而爲聲、目遭之而成色、取之無禁、用之不竭、といへると同意。

【西山】 永州府城の西にあり。

【怪特】 他にすぐれて、めづらしきをいふ。

【法華西亭】 法華寺の西にある風流なる小建築物なり。法華寺は永州府城の東にあり。子厚會て法華寺新作西亭記の文あり。

【湘江】 水源、廣西省に發し、永州に至り、瀟湘といふ。衆流を會して、遂に洞庭に入る。

【染溪】 永州府城の西南にあり。一に冉溪といふ。

【榛莽】 榛は樹木の亂生せるなり。莽は草のきたなく生ひ茂れるなり。

【茅茨】 ちがやの茂れるをいふ。

【攀援】 草や木にとりすがること。援は引き持つなり。

【箕踞】 兩足を伸べて坐し、其の形箕の如きをいふ。

【衽席】 敷物のこと。衽はシトネと訓す。臥席なり。

【呀然注然若垤若穴】 チョンボリと高きこと蟻塚の如く、く

ぼめること穴の如し、となり。呀は山の高き貌、注は水の低き貌、垤は蟻塚なり。西山の高きより眺むれば、他の高き山は蟻塚の如く、低き谷は穴の如く小さく見ゆる意。

【尺寸千里攢蹙累積云々】 千里も廣き風景を、尺寸の間に縮め集め、積み重ねて、一望の中に入り、一も遁げ隠る、こゝと能はず。となり。

【縈青繚白外與天際】 青山を纏ひ、白水を繞らし、外は遙に天と相接す。となり。

【四望如一】 何處も視線が地平線上に達するゆゑ、四面皆同じく見ゆるなり。

【悠悠乎與灑氣俱云々】 氣が廣々として大空と交り、其のはてが分らず、となり。我が氣分は無形のものなれば、廣しと思へば、限りなく廣く思はれて、大空と共に際涯なきやうに感ずるなり。

【洋洋乎與造物者游云々】 前の句と異辭同義なり。心が廣々として、彼の大自然、即ち宇宙と交遊して、局限せらるる所なし、となり。

【頽然】 酔ひて、體がぐつたりとなる貌。

【蒼然暮色自遠而至】 灰色の夕暮の色は、遠方より始めて、次第に近づき来るなり。

【至無所見而猶不欲歸】 何も見えざるやうになりても、猶歸りたしとは思はぬなり。

【心凝形釋與萬化冥合】 景色に見惚れて、心は其の方に凝り固まり、吾が形體を打忘れて、知らず識らず山水と融合一致するなり。

【吾鸛之未始游】 鸛の游は、未だ眞の游といふに足らず。となり。

【元和】 唐の憲宗の年號なり。其の四年は、皇紀一四六九年平城天皇の御代に當る。

摘要

一 柳子厚永州に謫せられて、心を山水の間に放にし、其の遊記は後世の模範として激賞せらる。其の一例として、本文を掲ぐ。

二 本文の結構

第一段 永州の諸山水を探りて、意に適せるもの多きを陳

ぶ。

第二段 更に西山を得て、其の樂みの極りなきを陳ぶ。

〔備考〕

柳子厚の遊記は何れも愛誦せらるれども、就中永州八記は最も稱せらる。本文は其の第一記にして、他の七記は皆源を此に發す。名家の評一二を左に録す。
林西仲云、全在「始得」二字「着筆」。語々指畫如畫。千載而下讀之、如置身於其際「非」得「遊中三昧、不能道」復字。
沈確士云、從「始得」字「着意」、人皆知之。蒼勁秀削一歸「元化」。人巧既盡、渾然天工矣。此篇領「起後諸小記」。

練習應用

讀「未」會見「之書、歷」未「會到」之山水、如「獲」至寶「嘗」異味「一段奇怪難」以語「人也」。(明、謝在杭)

五四 種樹郭橐駝傳

解義

【種樹】 植木師なり。

【郭橐駝】 郭は姓、橐駝は名。綽名を其のまま名に用ひしこと、本文を讀めば明なり。橐駝は駱駝なり。背肉隆起して橐に似たり。因りて此の名あり。

【隆然伏行】 背をむつくりと高くして、俯行するなり。

【觀游】 樹木を庭園などに植ゑて、觀賞するなり。

【賣果】 菓樹を植ゑて、其の菓實を賣るなり。

【爭迎取「養視」】 争ひて橐駝を其の家に迎へ、植木の世話をなさしむるなり。

【移徙】 他の地に植ゑ代ふるなり。

【碩茂】 大いに茂ること。

【蕃】 株の殖え廣がること。

【窺伺傲慕】 橐駝の仕方を伺ひ見て、其の眞似をすること。

慕は一本慕に作る。

【橐駝非「能使」木壽且孳】 余は別に木の壽命を延ばし、且繁殖せしむる祕法を知るにあらず、となり。

【順「木之天」以致「其性」】 木の自然に順つて、其の本性を遂げしむるなり。

【其本欲「舒」】 其の根幹は展びんことを望む。

【其培欲「平」】 其の根に土や肥料をかくることは、不同なく、平均ならんことを望む。

【其土欲「故」】 其の土は舊のま、ならんことを欲す。木を移植する時に、故土を多く附着するは、之が爲なり。

【其築欲「密」】 其の周圍を築き固むることは、周密ならんことを欲す。斯くせざれば、傾覆の恐あり。

【既然已】 既に斯くなし終れば、の意。即ち木の天性の欲するままにして、植ゑ終るをいふ。

【勿「動勿」慮去不「復顧」】 余は其の木をゆすぶつて見ることを

もなく、生枯を心配することもなく、木の傍を去つて、もう振り向きもせず、となり。

【其蒔也若子其置也若棄】 其の植うるときは、吾が子を世話するが如く、親切にし、植ゑたる後は、棄つるが如くして、顧みざるなり。

【其天者全而其性得】 某の天性を完全に遂げ得るなり。

【不抑耗其實】 其の本質を抑へ、へらさぬこと。

【根拳】 拳は屈曲なり。根をかがめて、伸びぬ様にするをいふ。

【若不過焉則不及】 肥料の過ぐるは宜しからず。若し過ぎざるものがあるかと思へば、そは餘りに少くして養となすに足らず。兎角、中庸を得ざるなり。

【苟有能反是者】 もし能く是に反して、植ゑ方を誤らざるものあれば、の意。

【愛之太恩】 之を愛し過ぐるなり。

【觀其疎密】 其の土に密接せりや否やを見るなり。

【木之性日以離】 木の暢茂せんとする性が日に離れて、枯れかかるなり。

【吾又何能爲哉】 吾何ぞ別に良法あらんや、となり。

【官理】 民治といふが如し。理は治なり。

【理非吾業也】 國家人民を治むることは、吾が職業にあらず。となり。

【官命促爾耕一遂而雞豚】 余は汝等の耕耘を催促し、汝等の植付を急がしめ、汝等の收穫を督促すべき官命を帯びて來れり。故に時機を失はぬやう、早く汝等の絲を繰れ、早く汝等の機を織れ、汝等の子供を大切に養育せよ、汝等の雞豚の生育を十分にせよと、役人が申渡すなり。

【鳴鼓而聚之擊木而召之】 訓示のため、太鼓を鳴し、又は板木の如きものを撃ちて、人民を呼び集むるなり。

【吾小人一不得暇】 吾々小民は食事をも中止して、役人を取待つ丈にても、容易ならざるゆゑ、猶其上他の事をする暇なし、となり。小人は小民の意。飧養は朝夕の食事をいふ。朝には養といひ、夕には飧といふ。

【何以蕃吾生而安吾性耶】 如何ぞ自己の生産を増殖して、安樂なる生活を遂ぐるを得んや。

【與吾業者其亦有類乎】 吾が業とする植木の法と政治と

は似たる所あらんか、となり。

【嘻】 感歎するなり。

【官戒】 官吏の教訓なり。

摘要

柳子厚の文を味はしむると共に、諷刺の適切なるを知らしめんとなす。

【備考】 名家の評一二を左に録す。

蔣楚暉云、借議論叙事、略無痕瑕。兼以詳確明快。即不謂規諷世道、作正經文字、尙得爲山家種樹方。

沈確士云、此爲勸民而不得其道者言。若戕虐其民、如根拳土易一流、固不待言也。柳子主意、蓋在蓋公治齊一邊。

苛政猛於虎 (豫習)

解義

【泰山】今の山東省泰安府の北になり。支那四嶽の一なり。

(重出)

【式而聽之】式は軾と同じ。車前の横木にして、車上にて敬禮する時などは、これに憑るものなり。ここは孔子が怪みて、身を前めて横木に倚りしなり。

【子路】孔子の門人なり。姓は仲、名は由、子路は其の字なり。又季路ともいふ。性勇を好み、過を聞くを喜び、親に事へて孝なり。嘗て親の爲に百里米を負ふ。政事の才あり。衛に仕へ、内難の爲に死す。

【子之哭也】子は婦人を指す。

【壹似】壹は「全く」、又は「甚だ」の意。

【吾舅】舅はシウトと訓す。吾が夫の父なり。

【何爲不_レ去也】何故に、この土地を去りて、安全の地に住ま

ざるか、となり。

【小子識_レ之】小子よ、心にとめおけ、となり。小子は弟子を呼びていふ。將來の心得のために、この事を記憶し置け、との意。

【無_レ苛政】虎の害はあれども、官吏が人民に親切にして、苛刻なる政治なければ、去るに忍びず、となり。

【苛政猛_レ於虎】虎の害は恐ろしけれど、日々にあるものにあらず。苛政の害に至りては、朝夕苦しめられて、いつも安き心なし。これ其の害、虎よりも甚だしき所以なり。

摘要

苛政猛於虎の典故を知らしめ、後課の豫備となさんとす。

五五 捕蛇者説

解義

【黒質而白章】黒き體質の上に白き模様あるなり。

【觸_ニ草木_ニ盡死】草木に觸るれば、草木は蛇の毒のために盡く枯死するなり。

【得_レ而腊_レ之】捕獲して、之を乾肉にするなり。

【以_レ爲_レ餌】それを藥餌とするなり。

【瘻】頸の腫物なり。
【死肌】疾のために、局部の筋肉の感覺を失ひたるものをいふ。

【三蟲】三尸蟲ともいふ。道家の説に本づきたるものにして人の陰事を天に訴へ、人を天死せしむるものなりといふ。柳宗元の罵_ニ尸蟲_ニ文の序に、道士言、人皆有_ニ尸蟲_三、處_ニ腹中_ニ、伺_ニ人隱微_ニ、輒_レ籍_レ記_レ、日庚申、幸_ニ其人_ニ之昏醉_ニ、出_レ讒_ニ于帝_ニ、以求_レ饗_レ。以_レ是、人多_レ謫_ニ過_ニ、嫉_レ癘_ニ天死_レ。

【太醫】天子の侍醫なり。

【賦_ニ其二】毎年二尾づつ賦課して、上納せしむるなり。

【當_ニ其租入_ニ】毎年納むべき租税に代用するなり。

【花_レ事者】係りの役人なり。

【復_ニ若賦_ニ】汝の租税をもと通りにせん、となり。

【久已病矣】捕蛇を業とせずして、農事に従ひ居たらんには、疾くより、苦しみ病み居りしならんとなり。

【鄉隣之生日蹙】近隣の人人は、日増に生活に苦しむ。

【殫_ニ其地之出_ニ】其の地より出づる産物を盡く租税として、徴し上げらるるなり。

【竭_ニ其廬_ニ之入_ニ】其の家の収入、即ち五穀畜産等を残らず、官に巻き上げらるるなり。

【號呼而轉徙】生活難のために、泣き叫びて、他に移轉するなり。

【頓_レ踣】疲れ仆る。

【呼_レ嘘毒癘_二】 悪しき空氣を呼吸するなり、嘘は息を吹くことなり。毒癘は疾疫を起す惡氣なり。

【相藉】 重なり合ふ意。

【悍吏】 嚴急なる酷吏をいふ。

【叫囂】 やかましく怒鳴り散らすこと。

【蹶突】 つきあたりて、凶暴なるをいふ。

【譁然而駭者雖_レ鷄狗_二不_レ得_レ寧_一】 がやくくと駭き噪ぐ者は人のみならず、雞狗までも、落付き居る能はずとなり。

【視_レ其缶_二】 蛇を入れ置く壺を視るなり。

【弛然而臥】 安心して、ゆつくりと寝ぬるなり。

【時而獻】 上納の時季に至りて獻するなり。

【甘_レ食其土之有_二】 蛇を獻するものは租税を免ぜらるるゆゑ、其の産物をうまく食ふことを得るなり。

【熙熙】 和らぎ樂しむ貌。

【且且有_レ是_二】 日々悍吏のために、死を犯すが如き苦しみあるをいふ。

【賦歛】 租税をいふ。賦は賦課なり。歛はヲサムと訓す。徴收する意。

【俟_レ夫觀_レ人風_二者得_レ焉_一】 彼の民情を視察する上官が、之を知得して、悍吏暴横の弊を除かんことを待つ、となり。

摘要

前課と同じく、柳文を知らしめ、殊に諷刺の剴切なるに注意せしめんとす。

五六 送薛存義之任序

解義

【俎】 マナイタと訓す。肉を載する臺なり。

【觴】 サカヅキと訓す。詩經、周南卷耳篇の疏に、一升曰_レ爵、二升曰_レ觶、三升曰_レ解、四升曰_レ角、五升曰_レ散、總名曰_レ爵、其實曰_レ觴、とあり。されば觴は杯に酒を充てたるをいふなり。升は凡そ我邦の合と見るべし。

【江之澚】 江は湘江をいふ。

【吏_三於土_二者】、地方の官吏の意。

【民之役非_レ以役_レ民而已_レ也】 民に上たるの職は、民を使役するのみが、其の職掌にあらず、換言すれば、如何に民を使役するも可なりと思ふは誤れり、となり。

【食_三於土_二者】 其の土地に生活するものなり。

【什_一】 十分の一の意にして、収入の十につき、其の一を租税に出すなり。公羊傳、宣公十五年に、古者什_一而藉_二、什

一者天下之中正也。とあり。

【使_レ司_レ平_レ於我_二也】 人民に對して、公平にして偏頗なき處置をなすことを司らしむるなり。

【受_レ其直_二】 其の報酬、即ち祿を受くるなり。

【豈惟_レ忘_レ之_二又從而盜_レ之_一】 ただ其の職務を忘るのみならず、又それと共に税を重くして、不法の徴收をなす。これ民の物を盜むなり。「豈惟」に對して、「忘」を「怠ルノミナランヤ」と讀むことに注意。

【向使_レ備_レ一_レ夫_二於家_一】 もし、一夫を家に備ひたりと假定せんに、の意。「向」は「假に」といふが如し。

【天下多_レ類_レ此_二】 官吏も其の一なり。
【而民_一何_レ哉】 官吏が民の物を盜むに對し、民が其の官吏を怒り、又は黜罰せざるは何故ぞ。

【勢_レ不同_二】 一夫と官吏とは勢異なればなり。一夫は備主に使役せらるる位地にあり、官吏は備主たる人民を使役する位

地にあり。故に勢同じからず、といふ。

【勢不_レ同而理同】 一夫と官吏とは勢同じからざれども、何れも儲主の物を盗むは非なり、といふ道理には二様なきなり。

【如_二吾民_一何】 かかる官吏の下にある人民は、迷惑至極なり、との意。

【有_レ達_二於理_一者】 民の物を盗むは非なりといふ道理の分るものなり。

【蚤作而夜思】 朝は早く起きて職務を執り、夜は夜半までも民治上の事を考ふるなり。

【無_レ懷_レ詐暴_レ憎】 薛存義の行爲に對して、詐謀なりと思ひ、又は憎惡の念を増すことなし、となり。

【吾賤且辱】 吾は官位も卑く、且左遷せられて、此の地に來り居るなり、との意。永州の司馬として來り居るをいふ。

【不_レ得_レ與_二考績幽明_一之說】 官吏の在官年數と成績とを調べ、功なきものを下げ、功あるものを上ぐるが如き評議に關與するを得ず、となり。即ち薛存義が功あるを知りても之を陞任せしむる權能なきなり。考績幽明は、書經の三載考績、三考黜陟幽明、より出でたる語なり。支那上代の

法、三年の終りに、一回官吏の成績を調べ、これを一考とし、三考、即ち九年にして黜陟を行ふものとす。幽は暗にして成績の顯はれざるもの、明は顯著なるものなり。

摘要

送序の傑出したる例として、之を擧ぐ。

解義

五七 香爐峰下新卜山居艸堂初成

【香爐峰】 廬山の一峯にして、今の江西省南康府にあり。其の形、圓聳、常に雲氣を出す。其の下、瀑布あり。李白の日照_二金鏤_一生_二紫煙_一。遙看瀑布掛_二長川_一。飛流直下_二三千尺_一。疑是銀河落_二九天_一。此の詩よく其の實景を悉せり。

【日高眠足猶慵_レ起】 日は高く上り、睡眠も充分なれども、猶起きんことを欲せざるなり。慵は「モノウシ」と訓す。

【小閣重_レ衾不_レ怕_レ寒】 樓上、夜着を重ね被て臥せるゆゑ、寒氣を意とせず、となり。

【遺愛寺鐘_一撥_レ簾看】 遺愛寺は香爐峯の北にある寺なり。遺愛寺の鐘の聲をば枕を傾けて數へつつ、朝の時刻を知り、香爐峯の雪をば家人に簾を上げさせて、臥しながら看るとなり。此の一聯は、古來我が菅公の都府樓_二纒看_一瓦色_二觀音寺_一只聽_二鐘聲_一と、並稱せらる、有名の句なり。又、清少納

言がこの句に因みて、后宮の簾を掲げしことは、人のよく知る所なり。

【匡廬便是逃_レ名地】 匡廬は廬山の異名なり、廬山は世間より我が名を指して毀譽褒貶せらるる煩を避けて、閑棲するに適當なる地なり、との意。

【司馬仍爲_二送_レ老官_一】 憲宗、元和の初め、樂天朝廷にありて左拾遺たり。奏凡そ十餘たび上り、論執強硬なりしかば、出されて江州の司馬となる。江州は今の江西省南康府の地なり。州の長官は刺史にして、次官は長史、第三等官を司馬とす。句意は、司馬の官は老餘の身を送るに適當なる官なり、となり。

【心泰云々】 心身共に安泰にして、終身居るに適する處なり。獨り長安のみが故郷ならず。己は此處を故郷と思ふ、となり。

摘要

古來我が國に著名なるを以て本詩を掲ぐ。
〔備考〕本詩は七言律にして、所謂新體に屬す。律は已に陳べたる如く、中間の四句は對句を用ふ。其中、前二句を前聯といひ、後二句を後聯といふ。本詩の韻字は、十四寒の韻なる、寒、看、官、安を用ふ。第一句は踏落しにして、韻を押さず。

五八 歸去來辭

解義

【辭】古詩の變體にして、稍文章味を帯びたるものなり。されど、元來歌ふべき性質のものゆゑ、處々に押韻せり。古文眞寶注に、休齋云、詩變而爲騷、騷變而爲辭。皆可歌。辭則兼詩騷之聲、而尤簡遠焉者。云々。

【五柳先生】古文眞寶註に、陶淵明潯陽柴桑人也。宅邊有五柳樹。因號五柳先生。後爲彭澤令。去家百里。云々。

【自況】自己を説明するなり。

【彭澤令】彭澤は縣名、江州に屬す。今の江西省、九江府、湖江縣なり。令は縣の長官なり。

【督郵】郡守の下に屬する官なり。事文類聚に、歷代沿革、後漢有郡主簿官。晉爲督郵。皆、太守自辟。掌總錄衆曹文簿、舉彈善惡。云々。

【吏曰、當束帶見之】淵明の屬官なる縣吏曰く、禮裝して督

郵に見ゆべしと。郡は縣を監督するものゆゑ、かく注意を與へしなり。

【五斗米】文獻通考に、令官俸一日五斗。とあり。凡そ我が五升。

【印綬】事物起原に、七雄之時、臣下璽、始稱曰印。史記、蘇秦佩六國相印、是也。又人臣賜印之始云。漢自三公而下、有金銀銅三等。云々。事文類聚に、綬長一丈二尺、法二十二月。闊三尺、法天地人。

【歸去來兮】歸り去らんの意、來は語助なり。古文眞寶註に按、先哲以來、字說爲語助。而韻書未見得爲語助者。史記、孟嘗君傳云、馮驩謂曰、長鋏歸來乎、食無魚。長鋏歸來乎、出無輿。長鋏歸來乎、無以爲家。此、來字爲語助詞者也。

【田園將蕪】故郷の田園は定めし荒れつらん、となり。

【既自以心爲形役】これまでは、名利心のために、形軀を

使役したるが、今日は、はや心を形軀のために使役せらるるものと覺悟せりとなり。即ち餓うれば食ひ、寒ければ着倦めば庭園を逍遙するが如きは、皆形軀の要求を心に感じてすることにて、是れ所謂心を以て形の役となすなり。即ち無我の状態なり。

【何惆悵而獨悲】 此の期に及び、官職などに未練を残して、くよくよと悲しむ必要なしとなり。文選注には、呂延濟曰、思求於祿。故形屈而驅役。此我自爲。何所惆悵而獨爲悲。とあり。

【悟已往之不諫】 既往の事の止むべからざることを悟り、將來の事は注意せば、過たずともすむことを知りたり、となり。古文眞寶注に、悟已往之事亦不可諫。而方來之事尚可追止。謂雖爲官。今將歸去。是來者可追也。とあり。論語、微子篇に、楚狂接輿、歌曰、往者不可諫、來者猶可追。

【寔迷途云々】 實に是までは途に迷ひて横道に入りたるが如し。されど迷ひ入りてより、まだ遠からざれば、引返して正路を踏むこと難からず、となり。文章軌範註に、如人行

迷失道途。尚猶以爲未遠。可早回也。謂休官而歸。とあり。寔或は實に作り、途或は塗に作る。

【覺今是而昨非】 今日の考へはよくして、昨日までの考は間違なりしを悟るとなり。

【舟搖々云々】 舟がゆら／＼と軽く颯る。是は途中舟行にて歸るなり。搖々或は遙々に作る。

【問征夫以前路】 旅人に我が郷里なる柴桑までの路程を問ふなり。

【恨晨光之熹微】 晨光は日光なり。熹微は光の微弱なるなり。道遠くして、日の將に暮れんとするを悲しむなり。文章軌範註に、此喻晉之將亡之兆。

【乃瞻衡宇云々】 以下は家に至るをいふ。衡宇は衡門と屋宇なり。衡門は「カブキモン」にして、木を横に渡して門となすなり。字彙に、屋四垂爲宇。釋名に、宇、羽也。如鳥羽翼自覆蔽也。

【僮僕】 師古曰く、僮者婢女之總稱也。韻會に、僮、奴也。徐曰く、僮、即罪人之子供給使者也。又云く、僕、給使者也。古者、有罪者不入於刑、則役之。

【三徑就荒云々】 庭園の三筋の小道は荒れて分らぬやうになりたれど、前に愛したる松と菊とは、今尙残れりとなり。

徑は逕に同じ。文章軌範註に、言其家故景昔、蔣詒幽居、開三逕。潛亦似之。言三逕已就荒蕪、惟松菊耳。とあり。聯珠詩格に、三徑は松徑・竹徑・菊徑なり、といへり。されど拘泥すべからず。蔣詒は王莽の時の人、仕へずして幽居す。

【引壺觴】 酒壺と酒盃とを引きよするなり。

【吟庭柯以怡顔】 柯は樹枝なり。其の枝柯相掩覆し、以て樂しむべし。故に之を悦ぶなり。

【倚南窗以寄傲】 寄傲は意を縦にするなり。句解註に、徙倚南窗下、以寄傲世之情。

【審容膝之易安】 閑居の氣樂にして、膝を容るべき小屋の快きことを知悉せり。となり。古文眞寶註に、韓詩外傳云、楚莊王聘北郭先生。曰臣有箕帚之婦。願入計之。即謂婦、楚欲以我爲相。如何。婦曰、結駟、列騎、所不安不。過容膝。食前方丈。所不甘。過一肉之味。而殉楚國之憂。可乎。於是、遂不應聘。言審思此事、則所須非

廣。容膝亦可安也。

【園日涉以成趣】 園中を毎日散歩するに従ひ、益々趣味の豊なるを覺ゆとなり。

【策扶老以流憩】 杖をつきて、ぶら／＼歩き、處々にて息ふ。文章軌範註に、策、杖以扶老衰、周流而憩息也。

【時矯首而遊觀】 時々首を上げて四方を見廻すなり。

【雲無心以出岫】 雲は無心の姿にて山の穴より湧き出づ。

文章軌範註に、言雲自然之氣、無心意、以出于山岫之中。自喻心不營事自爲縱逸也。爾雅に云く、山有穴曰岫。

【鳥倦飛而知還】 これ、以心爲形役の状態なり。文章軌範註に、言鳥書飛而暮還故林。亦猶人日出而作、日入而息也。

【景翳々以將入】 翳々は明ならざる貌。夕陽が微弱なる光明を放ちて入らんとするをいふ。

【無孤松而盤桓】 周易本義に、盤桓、難進之貌とあり。孤松の堅貞なるを賞し、愛撫幾度か回顧して、去り難きなり。

【請息交以絕遊】 世間との交遊、即ち交際を絶たん、とな

り。

【世與我而相遺】 社會は我を忘れ、我は社會を遺れ、全く關係なきものとなりとなり。

【復駕言兮焉求】 「言」は「コ、ニ」とよむ。意味なし。昨非を悟りたる今日、焉んぞ復車馬を驅り、四方に奔走して、名利を求むることをせんやとなり。

【親戚之情話】 親戚の真心のこもりたる話。孔穎達曰く、親指族内、戚指族外。書敍指南に云く、至誠之談曰情話。句解に云く、但欲會親戚故舊、喜悅以說真情之語。

【樂琴書】 彈琴と讀書とを樂しむ。晉書に、淵明不解音律、而畜無絃琴一張。每酒適、撫而和之曰、但識琴中趣、何勞絃上聲。

【農人告余以春及】 農人が、はや春になりぬと告げ來れり、となり。

【將有事于西疇】 農人より、春の季節となりたるを聞きたれば、己も西の畑に出で、耕作せんとするなり。前書音義に、美田曰疇。國語註に、一井爲疇。

【或命巾車云々】 或は車の掃除を命じて、綺麗にし、或は

孤舟に棹を加へて、水を渡るとき用の用意するなり。段玉裁曰く、巾飾也。以巾拂拭而用之也。呂延濟曰く、巾飾也。言裝飾其車、或舉棹於孤舟、將游行也。

【既窈窕云々】 窈窕たる壑を尋ね、崎嶇たる邱を歷るの意。窈窕は奥深きこと。崎嶇は嶮峻なり。文章軌範註に、窈窕深長貌、壑澗水也。謂行舟以尋之也。崎嶇險也。駕車以涉之也。古文眞寶註に、按本、窈窕字出于詩經周南也。注云、幽閑之意。

【木欣欣云々】 木は悦ばしき様子にて芽を出しかけ、泉は氷解けたれば、流れ始む、となり。文章軌範註に、欣欣生意貌、涓々泉流貌。

【善萬物之得時】 萬物の春に逢ひて、榮え始むるを見て喜ぶなり。

【感吾生之行休】 我が生命の次第にへりて、終には死するものなることに想到せり、となり。文章軌範註に、莊子曰、其生若浮、其死若休。張銑曰、休謂死也。言感吾人生行、將死也。

【已矣乎云々】 何事も思ひ止みなん。肉體の此の世に寄寓す

ること。今後復幾年ぞ。名利にあこがるとも何等の詮なしとなり。

【曷不委心任去留】 去留は死生なり。未練なる心を棄てて、我が身を自然の去留に任せ、之が爲に憂愁煩悶することなく、優遊自適、以て世を送るべしとなり。古文眞寶註に、劉良云、言何不委棄常俗之心、任性命去留也。

【胡爲乎皇々欲何之】 何ぞ離齷として、欲求する所あらんや。となり。孟子、滕文公下篇に、孔子三月無君則皇々如也。朱註云、皇々如、有求而弗得之意也。禮記、檀弓下篇に、皇々如有望而弗至。註に、皇々猶栖々也。

【帝鄉不可期】 仙郷は有りや無しやも分らざれば、そこに到りて長生するが如きことは期待すべからず、となり。帝郷は仙都なり。莊子、天地篇に、乘彼白雲、至于帝郷。云云。

【懷良辰以孤往】 この良日を樂しんで、獨り田園に往く。となり。李周翰曰く、懷、安也。孤、獨也。言安此良辰、獨往田園、以習其性也。

【植杖而耘耔】 李周翰曰く、植、杖謂挿、其所取執之杖於

田、以除田中之草也。耘耔、謂去草也。詩經、小雅、甫田篇に、或耘、或耔。註に、耘、除草也。耔、種本也。

【登東臯以舒嘯】 東臯は東方の小高き處なり。嘯は吟なり。古文眞寶註に、向日、東臯、營田之所也。春事起東。故云東也。臯、田也。

【聊乘化以歸盡】 聊は且なり。「トモカクモ」の意なり。乘化は我が身命を自然の變化に任するなり。歸盡は死なり。兎も角も身を自然に任せて、終には死する外なきなり、との意。

【樂夫天命復奚疑】 我が運命に満足して、何等の疑問をも挾まず、即ち、人を怨み、天を尤むるが如きことなきなり。

摘要

辭の例として、古來人口に膾炙せる本課を擧ぐ。

備考

一 辭は源を詩より發せしものなれば、詩の如く韻字を用ふ。歸去來辭は四節より成り、節毎に韻を換ふ。第一節には、五微の韻なる、歸、悲、非、衣、微と、四支の韻なる、追とを押す。四支、五微は通韻なり。第二節には、十三元の韻なる、奔、門、

存、樽と、十五刪の韻なる、顔、安、關、觀、還、桓とを押す。元、刪は通韻なり。第三節には、十一尤の韻なる游、求、憂、疇、舟、丘、流、休を押し。第四節には、四支の韻なる時、之、期、籽、詩、疑を押し。

二 参考のため、五柳先生傳を左に録す。

先生不知何許人。亦不詳其姓名。宅邊有五柳樹。因以爲號焉。閑靖少言。不慕榮利。好讀書。不求其解。每有得意會。便欣然忘食。性嗜酒。家貧不能常得。親舊知其如此。或置酒而招之。造飲輒盡。期在必醉。既醉而退。曾不吝情。去留。環堵蕭然。不蔽風日。短褐穿結。簞瓢屣空。晏如也。常著文章自娛。頗示己志。忘懷得失。以此自終。

贊曰、黔婁有言、不戚於貧賤、不汲於富貴。極其言、茲若人之儔乎。醋觴賦詩、以樂其志。無懷氏之民歟、葛天氏之民歟。

三 名家の評を左に録す。

歐陽修曰、兩晉無文章。幸獨有此篇耳。其詞義夷曠蕭散、雖楚聲、而無尤怨切蹙之病。

吳楚材曰、公罷彭澤令、歸賦此辭。高風逸調、晉宋罕有其比。蓋心無一累、萬象俱空、田園足樂。真有實地受用處。非深於道者不能。

五九 正氣歌

解義

【正氣歌】 文天祥、元に執へられ、燕京の獄中に在りて作りし所なり。之が序あり。以て其の作りし由來を知ることを得べし。其序左の如し。

予囚北庭、坐一土室。廣八尺、深可四尋。單扉低小、白間短窄、汗下而幽暗。當此夏日、諸氣萃然、雨潦四集、浮動床几、時則爲水氣。塗泥半朝、蒸溼歷瀾、時則爲土氣。乍晴暴熱、風道四塞、時則爲日氣。簷陰薪爨、助長炎虐、時則爲火氣。倉腐寄頓、陳々逼人、時則爲米氣。駢肩雜處、腥臊汗垢、時則爲人氣。或閭閻、或死屍、或腐鼠、惡氣雜出、時則爲穢氣。疊此數氣、當之者、鮮不爲厲。而予以孱弱、俯仰其間、于茲二年矣。嗟呼、是殆有養致然爾、亦安知所養何哉。孟子曰、養吾浩然之氣。彼氣有七、吾氣有一。以一敵七、吾何患焉。況浩然

者、乃天地之正氣也。作正氣歌一首。

【天地有正氣、雜然賦流形】 天地間には正氣といふものありて、雜然と入り交りたる萬物に配賦せりとなり。氣は萬物を造り、萬事を成す所の原動力となるものにして、正氣は其の純粹無垢なるものなり。流形は形を布くの意にして、形ある萬物をいふ。易經、乾の卦の象に雲行雨施、品物流形とあるに本づく。賦は配賦なり。

【下則爲河嶽、上則爲日星】 地にある河嶽も、天にある日星も、皆正氣の現れて成れるものなり、となり。河は黄河嶽は五嶽なり。一本に嶽を瀆に作る。瀆は四瀆にして、江・河・淮・濟の四水なり。

【於人曰浩然、沛乎塞蒼冥】 此の正氣の人に配賦せられたるを浩然といひて、天地間を蔽ひ塞ぐ程の盛大なるものととなり。無形的に洪大有力なるものなることを言ふ。浩然是浩然の氣なり。孟子、公孫丑上に、孟子曰、我善養吾

浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。曰、難言也。其爲氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞于天地之間。註に盛大流行之貌とあり。沛乎は盛大の貌。蒼冥は天なり。冥は冥に通ず。或は云く、蒼は天を謂ひ、冥は地を謂ふと。

【皇路當清夷含和吐明廷】正義の士は、大道行はれて天下太平なる時には、和氣を含みて、己の意見を朝廷の上に吐露するをいふ。皇路は大道なり。或は云く、皇路は君道なりと、清夷は清平なり。太平の義。明廷は公明なる朝廷の意なり。

【時窮節乃見一一垂丹青】窮厄せる時、乃ち國家の危急存亡の時に際すれば、正氣を有する人士の忠節は忽ち見れて、其の事蹟が皆史上に遺るとなり。丹青は圖畫なり。轉じて圖書又は歴史の意となる。或は云く、丹青は汗青の訛ならんと。

【在齊太史簡】齊の國に於ては、この正氣が太史の簡となりて現るとなり。齊の莊公、其の大夫崔杼の妻に通じ、數、崔氏に如く。周の靈王二十四子(春秋時代)菀子、齊に朝するや、莊公之を饗す。杼病と稱して事を視ず。莊公乃ち杼の家に

往いて、其の病を問ひ、遂に杼の妻を挑み逐ふ。妻避けて室に入り、杼と共に内より戸を閉ぢて出でず。莊公迷惑して將に出でんとす。杼の黨、宦者賈舉其の門を閉づ。莊公己むを得ず、牆を踰えて將に走り出でんとす。杼の徒射て公の股に中て、其の墜つるに乗じて、遂にこれを弑す。杼遂に莊公の弟景公を立て、身、右相となる。太史書して曰く、崔杼弑其君と。杼これを殺す。其の弟嗣いで書す。杼又これを殺す。死する者二人なり。其の弟又書す。即ちこれを含く。南史氏、太史氏盡く死せりと聞き、まさに書せんとし、簡を執りて往く。既に書せしと聞きて乃ち還る。

【在晉董狐筆】晉の靈公不君なり。其の卿、趙盾數、諫む。公之を患へ、鉅麀をして、盾を刺さしめんとす。麀晨に盾の家に往けば、寢門闢けり。盾盛服して將に朝せんとせしが、尙早きを以て坐して假寐せり。麀これを見て、退きて歎じて曰く、恭敬を忘れざるは民の主なり。忠臣を殺すも君命を棄つるも、等しく罪なりと。頭、樹に觸れて死す。周の匡王六年、晉侯、盾に酒を飲ましめ、甲を伏せて、之

を攻めしむ。其の右(盾の車)提彌明、扶けて以て下る。公其の葵を嗾す。明搏ちて之を殺し、闢ひ且出づ。明これに死す。初め盾、首山に敗し、桑蔭に息ひしとき、靈輒の餓うるを見て、之に食せしむ。既にして、輒、公の甲士となる。此に至り、戟を倒にして以て公の徒を禦ぎて、盾を免れしむ。盾遂に奔り、未だ晉境を出でざるに、盾の従兄弟の子穿、靈公を桃園に襲殺して盾を迎ふ。盾歸りて、更に君を立て、卿たること舊の如し。而て穿の罪を問はず。太史董狐書して曰く、趙盾其の君を弑すと。盾曰く、弑せしものは趙穿なり、我、罪なしと。太史曰く、子正卿たるに亡けて境を越えず、還りて賊を討たず、子にあらずして誰ぞと。盾これに服す。孔子曰く、董狐は古の良史なり、書法隠さずと。

【在秦張良椎】本書第七課に出づ。

【在漢蘇武節】卷三餘錄第十八に出づ。節は天子より賜はる信(シル)なり。

【爲嚴將軍頭】後漢、獻帝十九年(皇紀八七四年)劉備成都に入り、自ら益州の牧を領す。初め益州の牧劉璋、法正を遣

はして備に結ばしめ、以て張魯(當時漢中太守たり)を討たんとす。正、荊州に至り、陰に備に益州を取らんことを勸む。備自ら數萬人に將として西す。巴郡の太守嚴顏歎じて曰く、此れ所謂獨り窮山に坐し、虎を放つて自ら衛る者なりと。備、張飛・趙雲と兵を將る、流れに浜りて巴東に克ち、巴郡を破り、顔を生獲す。飛、顔を呵して曰く、大軍至るに、何を以て降らずして、敢て拒ぎ戦ひしと。顏答へて曰く、卿等無狀、我が州を侵奪す。我が州但、斷頭將軍あるのみ、降將軍あるなしと。飛怒り、左右をして牽去り頭を斫らしめんとす。顔、色變ぜずして曰く、頭を斫らんとせば、便ち頭を斫れ、何ぞ怒ることを爲さんと。飛、壯として之を釋し、引きて賓客と爲す。備進みて成都を圍む。璋降る。

【爲稽侍中血】晉の惠帝、永興元年(皇紀九六四年)成都王穎、鄴に鎮し、自立して皇太弟となり、僭侈日に甚だし。東海王越、帝を奉じて北征す。穎、石超を遣し、蕩陰に拒戦す。帝の頬三矢中る。百官侍衛皆散す。侍中嵇紹、朝服して輦に登り、身を以て帝を衛る。飛矢雨集す。兵人紹を引きて之を斫らんとす。帝曰く、忠臣なり。殺すこと勿れと

對へて曰く、太弟の令を奉じ、惟陛下一人を犯さざるのみと、遂に紹を殺す。血、帝の衣に濺ぐ。穎、帝を迎へて鄴に入る。左右帝の衣を洗はんと欲す。帝曰く、是れ替侍中の血なり、洗ふこと勿れと。

【爲張睢陽齒】 本書第四十三課に出づ。この正氣が睢陽城の守將張巡の齒となりて現はる、となり。

【爲顏常山舌】 本書第四十三課に出づ。

【或爲遼東帽】 清操厲冰雪】 後漢獻帝の時、公孫度遼東の太守となり、威海外に行はる。時に漢室衰へ、天下大に亂れしかば、士の亂を避くるもの多く之に歸す。北海の管寧亦往きて依る。寧字は幼安、鬚眉美なり。少時華歆と友たり。嘗て華歆と席を同じうして書を讀む。軒冕に乗りて門を過ぐるものあり。歆書を廢して之を觀る。寧席を割き、坐を分ちて曰く、子は吾が友にあらずと。嘗て歆と共に鋤菜す。地に金有るを見る。寧は鋤を揮つて顧みず、瓦石と異なるなし。歆は捉りて之を擲つ。人是を以て其優劣を知る。度、館を虚うして之を候つ。寧既に度を見、乃ち山谷に廬す。時に難を避くるもの多く郡南に居る。寧獨り北に居り、

還志なきを示す。後漸く來つて之に従ひ、旬月にして邑を成す。寧度を見る毎に、語唯經典のみ、世事に及ばず。山に還り専ら詩書を講じ、俎豆を習ひ、學者に非ざれば見ることなし。是に由て、度其の賢に安んじ、民其の德に化す。寧遼東に在ること二十七年。魏の文帝(曹丕)之を徵す。乃ち海に浮んで西歸す。以て太中大夫と爲す。受けず。明帝の初め、華歆太尉となる。歆位を寧に譲らんと請ふ。許さず。寧を以て光祿大夫となさんとし、青州に敕して、安車

吏從を給し、禮を以て發遣す。寧復た至らず。家貧にして常に皂帽衣裾を着くるのみ。皂帽は黑色の帽、衣裾は裾を附けたる衣にして、儒者の服装なり。年八十四にして卒す。清操冰雪より厲しとは其の節操を變ぜざりしをいふなり。

【或爲渡江楫】 慷慨吞胡羯】 東晉の祖逖の故事なり。晉の末葉、八王の亂に乗じて、夷狄中國に侵入し匈奴種なる劉聰、羯種なる石勒等中原を奪略し、洛陽・長安皆陷る。五胡の亂是なり。五胡とは匈奴・鮮卑・羯・氏・羌をいふ。是に於て元帝建康(京南)に即位す。是より後を東晉といふ。祖逖字は士雅、少より大志あり。嘗て劉琨と同寢す。中夜雞聲を

聞き、琨を蹴て起て曰く、此れ惡聲に非るなりと。因て起て舞ふ。元帝即位の前、逖南に渡り、兵を元帝に請ふ。元帝素より北伐の志なし。逖を以て豫州(河南)の刺史となし、兵千人を與へ、鎧仗を給せず。逖江を渡る時、中流にして楫を撃て誓つて曰く、祖逖中原を清むる能はずして、復濟らば、此の江の如きあらんと、辭色壯烈を極む。衆皆慨歎す。遂に進みて石勒の兵を走らし、中原を定めて仁政を布く。河より以南多く晉に歸したり。逖將士と甘苦を同じうす。農桑を勸課し、新附を撫納す。帝、戴淵を以て將軍となし、來つて諸軍事を都督せしむ。逖、己れ荆棘を剪り、河南の地を收む。而るに淵雍容として一旦來つて之を統ぶるを以て、意甚だ快々たり。又王敦が朝廷と隙を構へて、將に内難あらんとするを聞き、大功の遂げざるを知り感激して病を發して卒す。豫州の士女父母を喪するが如し。吞胡羯は夷狄を吞むの意にて、其意氣の盛なるを稱せしなり。

【或爲擊賊笏】 逆豎頭破裂】 唐の德宗の時李季烈(唐の叛臣)襄城(今の河南)に寇す。詔して涇・原(二州の名、今の甘肅省に屬す)等の道

兵を發して之を救はしむ。涇原の節度使姚令言、兵を將ゐて京師(長安)に過る。師を犒ふに、惟糲食菜飯なり。衆怒つて亂を作し、城に入る。上出奔す。亂兵太尉朱泚を奉じて主となす。司農卿段秀實泚を誅せんと謀る。克はず。泚衆を召して帝と稱せんと議す。秀實其の面に唾して大に罵りて曰く、狂賊、吾汝を斬ること萬段ならざるを恨む。豈汝の反に従はんやと。因て笏を以て泚を撃ち、其の額に中つ。濃血地に灑ぐ。泚一手に血を承け、一手に其衆を止めて曰く、義士なり、殺すこと勿れと。秀實既に死す。泚三品の禮を以て之を葬る。帝秀實死すと聞き、委用至らざるを恨み、涕泗すること久しかりき。逆豎とは朱泚を指すなり。

【是氣所磅礴】 凜烈萬古存】 以上は是の正氣の充ち溢れて、動作となりて發現せるものにして、其の功烈偉績凜然として天下萬世に傳はるとなり。磅礴は韻會に廣被也、又充塞也。莊子、逍遙遊篇に、將磅礴萬物一以爲一。韓愈の送廖道士序に、磅礴而鬱積。

の暇なしとなり。

【地維頼以立天柱頼以尊】 天地の大道も正氣に頼て立ち、且つ尊しとなり。史記、三皇紀に、天柱折、地維缺、女媧乃鍊五色石以補天云々。とあり。地維は地の周圍をしめくくりて崩れぬやうにする綱、天柱は天を支へて、落ちぬやうにする柱の意にて、天地を維持するものなり。

【三綱實繫命道義爲之根】 三綱も正氣に頼て維持せられ、道義も正氣を根原とすとなり。三綱とは君臣・父子・夫婦をいふ。禮記に、君爲臣之綱、父爲子之綱、夫爲婦之綱。

【嗟予遘陽九隸也實不力】 嗟呼吾は國家滅亡の厄運に遭遇したれども、自己の努力足らずして、之を救ふ能はずりし、となり。一説に、部下の力戦せずして、己の擒へられたるを責むる語とせり。陽九は厄運なり。文選、左思の吳都賦に、世際陽九。註に陽厄五、陰厄四、合爲九とあり。隸は臣隸なり。

【楚囚纓其冠傳車送窮北】 囚虜となりたれども、猶宋朝の冠を著け、驛傳の車にて、元の都燕京に送らるとなり。楚囚は支那春秋時代に、楚の鍾儀、晉の擒となるも、猶自

國の冠を用ひし故事なり。左傳、成公九年に、晉侯觀于軍府、見鍾儀問之曰、南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭人所獻楚囚也。纓は冠の紐を結ぶなり。傳車は驛傳(ツル)の馬車なり。窮北は極北に同じ。

【鼎鑊甘如飴求之不可得】 予は烹殺されんとする鼎の湯を甘き飴と同様に見做せり。斯ることは望みても容易に得る能はず。即ち怯懦にして、節操なき士の得難き所となり。漢書、刑法志に、秦大辟有鑿頭・抽脅・鑊烹之刑。顏師古の註に、鼎大而無足曰鑊、以鑊人也とあり。我國の釜の如し。

【陰房闕鬼火春院闕天黑】 陰房は陰氣なる室即ち牢獄なり。鬼火は人魂(カミ)と稱するものにして、燐火なり。淮南子に、人血爲燐、許慎云く、兵死之血爲鬼火、燐者鬼火也、と。闕は物淋しきなり。これまで、獄中にて、多くの人が死せしゆる、夜は其の人魂が光りて、物淋しとなり。春院は春の部屋にして、是も牢獄の意なり。闕は閉なり。春の陽氣なる節にも拘はらず、獄中は闇黒を以て閉さるとなり。

【牛驥同一皁鷄栖鳳凰食】 獄中にて、他の繫囚と同一に待

遇せらる、をいふ。驥は千里の馬なり。皁は馬槽即ち飼桶なり。鷄栖は鷄の時なり。鳳凰は靈鳥なり。遲き牛と駿馬と同一の桶に飼はれ、鷄の時鳳凰も共に食を與へらるとなり。

【一朝蒙霧露分作溝中瘠】 一たび獄に囚はれて、霧露の瘴氣を受くる身となりしより、遂には瘠せ衰へて死し、屍を溝中に棄てらるべきを覺悟せりとなり。説苑に、管仲死之、則不免爲溝中之瘠。顏師古云く、瘠、瘦病也。

【如此再暑寒百沴自辟易】 斯る處に二年を歴たれども、種々の惡氣は畏れて吾に近づかずとなり。再暑寒は二星霜といふが如し。沴は惡氣なり。辟易は驚き退く貌。

【哀哉沮洳場爲我安樂園】 斯る陰濕なる所に生活するとは、誠に哀しきこととなり。詩經、魏風、沮洳篇に、彼汾沮洳、註に、沮洳、水浸處、下濕地、とあり。安樂園は身の置き處の意なり。

【豈有他繆巧陰陽不能賊】 斯る所に居りて、病氣にも犯されざるは、他に妙術あるにもあらず、唯この正氣あるが爲めに、陰陽即ち寒暑の邪氣も吾身を害する能はずとなり。

繆巧は奇計妙策の意。漢書、韓安國傳に、意者、有它繆巧、可_レ以禽_レ之、則臣不知也。

【顧此秋々在仰視浮雲白】 思ふに吾は心安からず憂を抱きて此地にあり。時には頭を擧げて、白雲の浮べる遠き空を眺むとなり。故國を思ひ、母を懐ふ情の忘れ難きを述ぶ。秋々は詩經、衛風に、秋々不_レ寢。傳に、秋々猶_レ微々_レ也。錢氏云く、秋々小明、心有_レ所_レ存、不能忘_レ之貌。

【悠々我心憂蒼天曷有極】 我が心の憂は蒼天の窮りなきが如く、盡くることなしとなり。悠々は憂愁の貌。詩經小雅十月之交に、悠々我思、亦孔之瘳。註に、悠々憂也。

【哲人日已遠典刑在宿夕】 前に擧げたる明哲の人々は死して已に久しけれども、其の遺せる手本は明に存して、猶昨今の如く思はるとなり。典刑は則るべき法度なり。詩經、大雅に、雖無_レ老成人、尙有_レ典刑。宿昔は疇昔と同じ。前夕なり。

【風簷展書讀古道照顏色】 風の吹來る檐端にて書を開き讀めば、古道に適へる哲人の行爲、明に顔前に現るとなり。

摘要

正氣日月を貫き、千載の下讀者の志氣を奮起せしむる本課を掲げ、諷詠の料とす。

〔備考〕

一本歌は五言古風にして、四解より成る。第一解には九青(平)の韻なる形・星・溟・廷・青を押し、第二解には四質、六月、及び九屑(仄)の韻なる筆・節・血・舌・雪・烈・獨・裂を押す。質・月・屑は通韻なり。第三解には十三元(平)の韻なる存・論・尊・根を押す。第四解には十一陌及び十三職(仄)の韻なる力・北・得・黑・食・瘠・易・國・賊・自・極・昔・色を押す。陌・職は通韻なり。

二 我國にも正氣の歌を作れるもの多し。藤田東湖の作最も著はる。左に之を録して、参考に供す。

和文天祥正氣歌一並序

彪年八九歳、受文天祥正氣歌於先君子。先君子每誦之、引孟擊節、慷慨奮發、談說正氣之所、以塞於天地、必推本之於忠孝大節、然後止。距今三十餘年。凡古人詩文、少時所誦、十忘七八。至於天祥歌、則歷歷諸記、不遺一字。而先君子言容、宛然猶在心目。彪性善病。去歲從公駕而來也、方患感冒、力疾上途、及公獲罪、彪亦就禁錮。風雷雨室、溼邪交侵、非衣疏食、飢寒並至。其辛楚艱苦、常人所難堪。而宿痾頓愈、體氣頗佳。睇睨宇宙、叨與古人相期者、蓋資於天祥歌爲多。夫天祥值宋社之傾覆、身囚於胡虜、實臣子之至變。若彪

被幽、則特一時之奇禍。其事與跡、皆大不同。然古人有云、死生亦大矣。今彪之困阨既已若此。而人猶或不以憐於意。曰、何不速賜死。曰、何不早日自裁。彪之所出、入於死生間、亦復如此。而頑乎不變、自信愈厚者、未始不與天祥同也。嗚呼、彪之生死、固不足道。至於公之進退、則正氣之風伸、神州之汗降繫焉。豈特一時奇禍之云乎哉。天祥曰、浩然者天地之正氣也。余廣其說曰、正氣者、道義之所積、忠孝之所發。然彼所謂正氣者、秦・漢・唐・宋變易不一。我所謂正氣者、亙萬世而不變者也。極天地而不可易者也。因誦天祥歌、又和之、以自歌。歌曰、

天地正大氣、粹然鍾神州。秀爲不二嶽、絕巖聳千秋。注爲大瀛水、洋洋環八州。發爲萬桑櫻、衆芳難與儔。凝爲百鍊鐵、銳利可斷鏹。蓋臣皆熊羆、武夫盡好仇。神州誰君臨、萬古仰天鼻。皇風洽六合、明德侔太陽。不三世無汗隆、正氣時放光。乃參大連議、侃侃排罍壘。乃助明主斷、談談焚伽藍。中郎嘗用之、宗社磐石安。清丸嘗用之、妖僧肝膽寒。忽揮龍口劍、虜使頭足分。忽起四海颶、怒濤殲胡氣。志賀月明夜、陽爲風聲巡。或伴櫻井驛、遺訓何慙慙。或殉天目山、幽囚不忘君。或守伏見城、一身當萬軍。承平二百歲、斯氣常獲伸。然方其鬱屈、生四十七人。乃知人雖亡、英靈未嘗泯。長在天地間、凜然絃彝倫。孰能扶持之、卓立東海濱。忠誠尊皇室、孝敬事天神。修文與奮武、誓欲清胡塵。

一朝天步艱、邦君身先淪。頑鈍不知機、罪戾及孤臣。孤臣困葛藟、君冤向誰陳。孤子遠墳墓、何以報先親。荏苒二周星、唯有斯氣隨。嗟予雖萬死、豈忍與汝離。風伸付天地、生死復奚疑。生當雪君冤、復見張網維。死爲忠義鬼、極天護皇基。

〔注意〕

蓋臣。忠臣の意。詩經、大雅の疎に、蓋忠愛之篤、進退無己。好仇。好き相手の意。詩經、周南に、赴々武夫、公侯好仇。汚隆。盛衰といふに同じ。

乃參排罍壘。正氣が大連物部尾與の奏議に參與して正々堂々と佛教を排斥せり、となり。

乃助焚伽藍。正氣が欽明天皇の御英斷を助けて、悉く伽藍を火さしをいふ。

中郎磐石安。中臣鎌足が正氣を用ひて、宗廟社稷を安固ならしめたるをいふ。

清丸肝膽寒。和氣清麻呂の事蹟をいふ。

忽揮頭足分。北條時宗が元使を鎌倉龍口に斬りしをいふ。

忽起一城胡氣。颶風の爲に、元兵十萬を西海に塵にせしをいふ。

志賀一風聲巡。藤原師賢が滋賀の浦(琵琶湖畔)の明月の夜に、陽りて後醍醐帝の巡狩と稱して延暦寺に往き、其の隙に天皇をして笠置に幸したまはしめしをいふ。

芳野一帝子屯。村上義光が護良親王の難に代り、伴りて親王と稱して死し、親王をして吉野を逃れしめしをいふ。

或投一正憤憤。護良親王が奸惡を除かんとして、却て鎌倉の窟に投ぜられ、憂憤に堪へ給はざりしをいふ。

或殉一不忘君。武田氏の臣小宮山内膳、其の主勝頼の怒りに觸れ、幽閉せらるる中に、勝頼は天目山に立籠りしかば、寧ろ法を犯すも、君の難を坐視するに忍びずとて、天目山に駆け附け、殉死せしをいふ。

或守一當萬軍。徳川家康伏見の城に居りしとき、上杉景勝、石田三成と東西相策應し、會津の城に據りて叛けり。家康之を征せんとして、東に赴き、其の臣鳥居元忠をして、伏見城を守らしむ。

石田の大軍果して之を攻む。元忠戦死す。

誰能一東海濱。この正氣を維持して、東海の濱に卓立するものは誰ぞ。そは我が徳川齊昭公なり、との意。

誓欲一清胡塵。攘夷を實行せんとせしをいふ。

天步艱。時運の非なるをいふ。

邦君身先淪。徳川齊昭が幕府の嫌疑を受け、江戸駒込の藩邸に幽閉せられしをいふ。

罪戾及孤臣。東湖自身も連坐して、江戸小梅の藩邸に押込められしをいふ。

孤臣困葛藟。幽閉の身となりて、行動を束縛せられしをいふ。

六〇 卒業生會同引

作者

【鹽谷青山】 名は時敏、實山(宥陰の弟)の子、宥陰の猶子なり。漢學に通じ、文章を能くす。又劍道に長ず。長く第一高等學校教授たり。大正十四年歿す。著す所、青山文鈔等あり。

解義

【引】 序とほぼ相同じ。文體明辨には、序の如くにして、稍簡單のものなり、といへり。

【第一高等中學】 今日の第一高等學校の前身なり、豫科二年、本科二年ありき。高等學校と改稱せらるるに及び、この區別は撤廢せられたり。

【開筵】 宴會を開くなり。

【祝前途之榮】 將來の榮達を祈る、即ち幸先(サイサク)を祝ふなり。

【元服】 冠なり。元は首(カシ)なり。冠は頭に着くる服なるゆ

ゑ、しかいふ。青年が始めて大人の服する冠を着けて、成人となるの禮をいふ。儀禮、冠禮に、祝曰、令月吉日、始加元服、棄爾幼志、順爾成德。

【首服】 元服に同じ。

【責以成人之道】 成人たるの言動をなすやう要求するなり。成人は大人といふに同じ。オトナ(オトナ)の意。

【武弁】 武官の冠なり。因て武家をいふ。後漢書、輿服志に、武冠、一曰武弁大冠。諸武官冠之。又、文獻通考、職官門に、校尉在漢爲兵師要職。而後世則爲武弁所不齒之冗秩。

【武田信勝殉天目山之難】 信勝は勝頼の長子なり。小字は竹王丸、後、太郎と改む。勝頼勇を負みて兵を好み、織田・徳川・北條の三氏と相抗衡し、攻城野戰、多く敵兵を殺すと雖も、また數敗れて、遂に將士を喪ひ、内は士民多事を怨言し、外は益恨を深くし、仇敵日に増して、忠臣月に亡

ぶ。是に於て、三氏相連衡し、織田信長は兵士五萬を率ゐて木曾より來り、家康三萬五千を率ゐて駿河より進み、以て、南北夾撃し、北條氏政また大兵を率ゐて境上に次し、以て聲援をなす。是に於て、武田氏の臣屬或は降り、或は奔りて防禦すること能はず。乃ち退きて新府に入り、諸將を相會して敵銳を避けんことを議す。時に信勝年甫めて十六、自ら奮ひて曰く、我が祖先、國を建てしより世を歴ること二十八、年を経ること四百餘年、而るに今や衆畔き親離る。是れ我が天祿の盡くる所なり。避けて將に何くに往かんとするや。まさに城を枕にして自刃し、以て祖宗に殉すべきのみと。勝頼頭を垂れて默然たり。而して議遂に容れられず。父に従ひ、天目山に入る。勝頼事の急なるを見て、信勝に謂て曰く、汝重器を携へ、山路を歴て、武州より奥州に入り、宜しく再學を謀るべしと。信勝従はずして曰く、小子乃祖(信玄をいふ)の遺命を受け、立ちて家嫡たり。唯願ふ所は家聲を辱めざらんと欲するのみと。遂に與に自殺す。

【匆卒】 急遽の貌。「ニハカニ」又は「セハシク」の意。

【可_三以知其一斑】 冠禮を重んずるの一端を知るべし、となり。一斑は豹の皮の一部分の美を見て、全豹を見ざるの意にて、見る所の小なるをいふ。

【剔去】 剃刀にてそり取るなり。徳川時代、成人は皆前髪を剃れり。

【勳閥】 功勞ある家柄。

【閱歷】 賓客の經驗談なり。

【故事】 元服の古實沿革等をいふ。

【蠕蠕】 蠕はウゴメクと訓す。むくむくと動くこと。

【禮以爲之隔限】 元服の禮を設けて、少年と成人との限界を畫するなり。

【魯昭所以被譏於春秋】 魯の昭公が左氏春秋傳に於て譏られしは、長じて尙童心ありしが故なり、との意。左傳、魯襄公十三年に、於是昭公十九年矣、猶有童心。君子是以知其不能終也。

【百度】 種々の制度例規等をいふ。

【在國不見禮儀之俗】 國家に禮儀の習俗未だ成立せず、となり。

【簡慢】 簡單にして、不法なること。
【風俗壤亂職此之由】 風俗の亂るるは禮儀のなきことに、専ら原因す、となり。職は「モトトシテ」と訓む。專、又は本の意なり。

【負三州閭之望】 其の地方の人々より望を屬せらるること。州は土地の區劃上の稱呼にて、支邦の古昔には全土を九州又は十二州に分ちて呼びたることあり。周代には諸侯の統御上二百十國を一區としての稱にも用ひ、又民人の自治上、二千五百家を一區としての稱にも用ひらる。尙時代により、多少意味を異にせり。閭は周代にて二十五家の稱にして、里と同意なり。

【桑梓】 古は、墻下に桑と梓(アヅサ)とを栽るて、蠶食の用に供す。子孫よりいへば、其の父母の栽うる所なるを以て、故郷の義とす。文選、張衡の南都賦に、永世克孝、懷桑梓焉。真人南巡、覩舊里焉。(重出)

【羽翼始成】 鳥の羽翼成りて巢立するに喩ふ。

【不甚相遠】 多少の差はあれども、甚だしき相違はなし、との意。「不」が「甚」を打消せることに注意。

【水野忠善】 大監物と稱す。秀忠・家光・家綱の三將軍に歷仕し、參州岡崎に鎮し、五萬石を領す。性豪爽にして膽略あり。尾張大納言義直名古屋に封ぜらるるや、人或は其の異志あるを告ぐ。家光忠善に命じて實否を探らしむ。忠善人をして之を探らしむるに、詳かならず。忠善自ら近臣二人と名古屋に至りて、濠の深淺を測る。義直これを見て、人をして追はしむ。忠善測り了りて駿馬に騎して、岡崎に馳せ歸る。義直これを憾とす。忠義乃ち江戸に報じて曰く、義直毫も異志なきなりと。

【忠春】 忠善の嫡男なり。奏者番・寺社奉行・大阪城代等に歴任せり。元祿五年卒す。

【摺甲儀】 鎧着初(カビ)とて、武家にて、男子十四五歳に至り、始めて鎧を着くる祝の式なり。

【一耆老】 一人の老人。禮記、曲禮に、六十曰耆、指使。七十曰老而傳。

【結束】 裝束。支度。

【胡床】 アグラと訓す。腰を掛くる具なり。床机ともいふ。

【暨暨乎】 雄々しきさまをいふ。禮記、玉藻篇に、戎容暨暨。

註に、果毅也。

【經文緯武之將】 文武兼備の將をいふ。布帛の横絲と縦絲とによりて成れるが如く、兩者相待て完備するをいふ。

【耿光】 威光といふが如し。耿も光なり。書經、立政に、以觀文王耿光。

【其中未可保】 外貌は立派なれども、其の心中の剛強は、驗せざる内は保證し難し、となり。

【余儕】 余輩といふに同じ。

【何敢望於耆老】 何ぞ敢て耆老の待遇を望まんや、耆老の資格なし、となり。

【古訓一道】 古語一則といふが如し。

【祝規】 祝賀と訓戒となり。

【行三百里者半九十】 戰國秦策に、逸詩を引きて云く、行三百里者半九十、於是言末路之難と。人は倦怠し易し。故に百里の道を旅行するものは、九十里を行きたる時、僅に其半に達したるの積りにて、氣を弛むべからず。然らざ

れば、餘りの十里を果し難し。との意にして、事を爲すに始めの易くして終りの難きに喩ふ。

摘要

一 中學に於ける本教科最後の課として、將來に向つて、大に自重と希望と努力とを覺悟せしめんとして、之を載す。

二 本文の結構

第一段 古代冠禮を重んぜしこと。

第二段 近古も其の形の遺れること。

第三段 少年期と成年期との自覺を促すため、かかる儀式の必要なること。

第四段 明治維新後、諸種の儀禮の廢れしを嘆す。

第五段 卒業は冠禮に似て、卒業者は始めて成人の域に入りたること。

第六段 古人に倣ひて、卒業生を規す。

新選漢文教授參考卷五終

新選漢文卷五餘錄教授參考

目次

一 論語選

一	學而篇	一
二	爲政篇	四
三	八佾篇	六
四	里仁篇	八
五	公冶長篇	一
六	雍也篇	三
七	述而篇	五
八	泰伯篇	七

九	子罕篇	九
一〇	鄉黨篇	二
一一	先進篇	三
一二	顏淵篇	四
一三	子路篇	九
一四	憲問篇	三
一五	衛靈公篇	三
一六	季氏篇	四

一七 陽貨篇……………三六
一八 微子篇……………三七

一九 子張篇……………三六
二〇 堯日篇……………三六

二 孟子選

一 梁惠王篇……………四〇
二 公孫丑篇……………四〇
三 滕文公篇……………四〇
四 離婁篇……………五〇

五 萬章篇……………五〇
六 告子篇……………五七
七 盡心篇……………六〇

目次終

新選漢文卷五餘錄教授參考

一 論語選

一 學而篇

解題

【論語】二十篇より成る。孔子が其の門人及び時人に應答し又は弟子相與に言へる語を記したるなり。孔子歿後、門人これを論纂したる故に論語と名づく。編者及篇數等に就き、諸説あれども、略す。

解義

【有子曰其爲人—爲仁之本與】本は根本、即ち基礎の意。本立而道生は、基礎が成立すれば、仁即ち道德のこれより生

出して、あらゆる事に應用せらるるをいふ。朱注に、有子孔子弟子、名若、善事ニ父母ニ爲レ孝、善事ニ兄長ニ爲レ弟。犯レ上謂レ干ニ犯在レ上之人。鮮ハ少也。作レ亂則爲ニ悖逆争鬪之事。矣。此言ニ人能孝弟、則其心和順、少レ好レ犯レ上、必不レ好レ作レ亂也。務專レ力也。本猶レ根也。仁者愛之理、心之德也。爲レ仁猶レ曰レ行レ仁。與者疑辭、謙退不ニ敢實言ニ也。言君子凡事用ニ力於根本。根本既立則其道自生。若ニ上文所謂孝弟、乃是爲レ仁之本。學者務レ此、則仁道自レ此而生也。

【子曰君子—學則不固】ここに所謂君子とは、民の上に立つ上流の人をいふ。君子は身を莊重に持たざれば、威嚴なきゆゑ、我が言行も人に對して權威なし。又道を學べば、事理に闇き偏屈なるものとならずして、融通の利く人となる

との意。朱注に、重厚重、威、威嚴、固、固堅也。輕乎外、者必不能堅乎内。故不重厚則無威嚴、而所學亦不堅固也。人不忠信則事皆無實。爲惡則易、爲善則難。故學者必以是爲主焉。何晏論語集解に、孔安國曰、固、蔽也。一日、言人不能敦厚、既無威嚴、學又不堅固、識其義理也。安井息軒論語集說に、焦循曰、蔽之義爲闇。曲禮、朝而顧、君子謂之固。鄭氏注云、固、謂不達於禮。不達於禮、是爲蔽塞不通。此固所以爲蔽也。不學故不達於禮。學則達於禮。不固者、達於禮也。一日、二字、是何晏存異說。非亦孔安國注。

右の如く、學則不固には、二説あり。朱注に従へば、「學モ則チ固カラズ」とよみ、古注に従へば、「學ベバ則チ固ナラズ」とよむべきなり。本書は古注を採れり。

【子禽問於子貢一異乎人求之與】孔子の門人子禽、同門の子貢に問うて曰く、夫子(孔子を指す)は何れの國に至りても、必ず其の國の政治を聞き知ることを得るが、一體、夫子自ら求めて之を聞けるものなるか、或は先方より之を知らしむるものなるか。子貢曰く、夫子は温良恭謙讓の五つの徳

を具有するゆゑ、到る處の國君が其の政治を打明けて、其の意見を求むるを以て、其の政を聞くを得るなり。故に夫子の之を求むる法は、他人の自ら希望して求むる法とは異なるが如し、となり。是邦とは、しかと或る一國を指せるにはあらず、到る處の國々を「是」といへるなり。朱注に、子禽、姓陳、名亢、子貢姓端木、名賜、皆孔子弟子。或曰、亢子貢弟子。未知孰是。抑反語辭。温和厚也。良易直也。恭、莊敬也。儉、節制也。讓、謙遜也。五者夫子之盛徳光輝接於人者也。其諸語辭也。人、他人也。言夫子未嘗求之。但其徳容如是。故時君敬信、自以其政就而問之耳。非若他人必求之而後得也。聖人過化存神之妙、未易窺測。然即此而觀、則其徳盛禮恭、而不願乎外、亦可見矣。學者所當潛心而勉學也。○張敬夫曰、夫子至是邦、必聞其政。而未嘗有能委國而授之以政者。蓋見聖人之儀刑而樂告之者、秉彝好徳之良心也。而私欲害之。是以終不能用耳。

【子曰父在可謂孝矣】父が在世の間は、子たるものは己の意志を専行するを得ず、父の意に従つて行動するものな

れば、事業の上には其の人の善悪は見る能はざれども、其の言語態度等によりて、其の志想如何を知ることを得べし。父死すれば、獨立獨行するものなれば、其の施爲する事業を見て、其の人の善悪如何を知ることを得べし。然れども父の死後三年の間は、其の遺法を踏襲し、然る後、其の不便不利の點を改むるを孝といふべし、となり。朱註に、父在、子不得自專、而志則可知。父没然後、其行可見。故觀此、足以知其人之善惡。然又必能三年無改於父之道、乃見其孝。不然、則所行雖善、亦不得爲孝矣。

○尹氏曰、如其道、雖終身無改可也。如其非道、何待三年。然則三年無改者、孝子之心有所不忍故也。游氏曰、三年無改、亦謂在所當改而可未改者耳。

【子貢曰貧而無詔一好禮者也】子貢曰く、貧窮しても、人に媚びへつらひて、哀を求むるが如きことなく、富有の身となりても、人に高ぶるが如きことなく、よろしきか。孔子曰く、それも悪しからず。然れども、貧に居ても道を樂みて、心を煩はさず、富みても禮を好みて、身分を忘るるには如かず、となり。無詔、無驕は消極的にして、當然

のことなり。故に後者の積極的にして、善なるに如かず。朱註に、詔、卑屈也。驕、矜肆也。常人溺於貧富之中、而不見所以自守。故必有二者之病。無詔無驕、則知自守矣。而未能超乎貧富之外也。凡曰可者、僅可有而所未盡之辭也。樂則心廣體胖而忘其貧、好禮則安處善、樂循理、亦不自知其富矣。子貢貧殖。蓋先貧後富、而嘗用力於自守者。故以此爲問。而夫子答之如此。蓋許其所已能、而勉其所未至也。

【子貢曰詩云一其斯之謂與】詩の意は、骨角を治むるものは之を切りたる後、磋りみがきて綺麗にし、玉石を治むるものは、其の周圍を琢ちけつりて、後磨きみがきて光澤を發せしむるが如く、益、精粹にするをいふ。無詔、無驕は切と琢との如し、而るに樂と好禮とは磋と磨との如く、一層善美となる。子貢、孔子の言を聞きて悟る所あり。故に詩を引きて、其の意をのべしなり。朱註に、詩、衛風淇澳之篇、言治骨角者、既切之、而復磋之。治玉石者、既琢之而復磨之。治之已精而益求其精也。子貢自以無詔無驕爲至矣。聞夫子之言、又知義理之無窮。雖有得焉、

而未可遽自足也。故引此詩以明之。

【子曰賜也一知來者】賜よ、汝は始めて吾と詩を談するに足る。かく活用して、始めて詩に生命あり、效果ありといふべし。汝は事物の一端を聞けば、他の一端を知るものなりと、其の悟りの疾きをほめたるなり。朱註に、往者其所、已言者、來者其所、未言者〇愚按、此章問答、其深淺高下、固不待辨說而明矣。然不切則礙無所施、不琢則磨無所措、故學者雖不可安於小成而不求造道之極致、亦不可鶻於虛遠而不察切己之實病也。

二 爲政篇

解義

【十有五而志于學】學は今日の所謂初等教育を卒へたる後の學にして、大人となるの道なり。朱註に、古者十五而入大學。心之所之謂之志。此所謂學即大學之道也。志乎此、則念々在此、而爲之不厭矣。

【三十而立】立は獨立自治の意にして、他人の指導扶助を假

らざるをいふ。朱註に、有以自立、則守之固、而無所事志矣。

【四十而不惑】事物の判斷に迷ふことなく、正理正道に向つて進むなり。朱註に、於事物之所當然、皆無所疑、則知之明、而無所事守矣。

【五十而知天命】天命は自然的に到來する運命にして、人力の如何ともすべからざるものなり。朱註に、天命即天道之流行而賦於物者、乃事物所以當然之故也。知此、則知極其精、而不惑又不足言矣。

【六十而耳順】人の言を聴けば、直に心に了解し、耳に逆ふことなきをいふ。朱註に、聲入心通、無所違逆。知之之至、不思想而得也。

【七十而從心所欲不踰矩】道を行ふことが習慣となれるゆゑ、別に思慮することなく、思ふままに行動するも、それが法に外れることなし、となり。朱註に、從隨也。矩法度之器、所以爲方者也。隨其心之所欲、而自不超過於法度。安而行之、不勉而中也。〇程子曰、孔子生而知者也。言亦由學而至、所以勉進後人也。立能自立於斯道

也。不惑則無所疑矣。知天命窮理盡性也。耳順所聞皆通也。從心所欲不踰矩、則不勉而中矣。又曰、孔子自言其進德之序如此者、聖人未必然。但爲學者立法、使之盈科而後進、成章而後達耳。

【子夏問孝一曾是以爲孝乎】子夏、孔子に問ふ、如何にするを孝といふべきかと。孔子曰く、顔色を和らけて、父兄の心を安んぜしむること容易ならず。よろしく之に注意すべし。爲すべき事あれば、父兄に代りて、子弟其の勞に従事し、酒食の珍味を得たるとき、己を措きて、父兄に飲食せしむるが如き、ただ口體の養のみにては孝といふべからず、となり。ここにては孝弟を合せて一口に孝といへり。

弟子は子弟の意。朱註に、色難謂事親之際、惟色爲難也。食飯也。先生父兄也。饌飲食之也。曾猶嘗也。蓋孝子之有深愛者必有和氣。有和氣者必有愉色。有愉色者必有婉容。故事親之際、惟色爲難耳。服勞奉養、未足爲孝也。舊說、承順父母之色爲難。亦通。

【子曰君子周而不比小人比而不周】周は衆人に對し、普遍的にして、公平なること。比は偏頗的にして、私情を用ふ

ること。朱註に、周普遍也。比偏黨也。皆與人親厚之意。但周公而比私耳。〇君子小人所爲不同、如陰陽晝夜。每相反。然究其所分、則在公私之際、毫釐之差耳。故聖人於周比和同驕泰之屬、常對舉而互言之。欲學者察乎兩間、而審其取舍之幾也。

【子曰學而不思則罔思而不學則殆】物事の方法を學び習ふのみにて、其に就きて思考せざれば、事理に昏くして、盲動たるを免れず。又、思考するのみにて、方法を學び習はざれば、事に當りて、危疑の念に制せられ、心安からず。故に學と思と相俟つて、始めて眞知となり、安んじて事に當ることを得るものなり、との意。朱註に、不求諸心、故昏而無得。不習其事、故危而不安。〇程子曰、博學・審問・慎思・明辨・篤行、五者、廢其一非學也。

【子張學于子夏一祿在其中矣】門人、子張官祿を得る方法を問ふ。孔子曰く、多くの事物を聞き、其の内の疑はしきことをさし置き、注意して其の餘を言ふやうにすれば、人に其の言を尤めらるること少し。多くの事物を見て、不安なるものを闕き、慎みて其の餘を行へば、則ち後悔する

こと少し。言に尤少く、行に悔少ければ、祿は我より求めずとも、自ら来る、となり。朱注に、呂氏曰、疑者所未信、殆者所未安。程氏曰、尤罪自外至者也。悔理自内出者也。愚謂、多聞見者、學之博、闕疑殆者、擇之精、慎言行者、守之約。凡言在其中者、皆不求而自至之辭。言此以救子張之失而進之也。○程子曰、修天爵則人爵至。君子言行能謹、得祿之道也。子張學于祿。故告之以此、使下定其心而不爲利祿動。若顏閔、則無此問矣。或疑、如此亦有不得祿者。孔子蓋曰、耕也鋤在其中。惟理可爲者爲之而已矣。

【子曰人而無信一何以行之哉】 信は誠實なり。輓は輓の端の横木にして、牛の頸にあてて引かすもの、輓は輓端の上に曲りたる處にして、それに衡(やじ)を鈎け、馬の頸にあてて引かすものなり。輓輓なければ、車を行る能はざると同じく、人に信なければ、世を渡る能はず、となり。朱注に、大車謂平地任載之車。輓輓端横木。縛輓以駕牛者。小車謂田車。兵車。乘車。輓輓端上曲。鈎衡以駕馬者。車無此二者、則不可以行人而無信、亦猶是也。

三八 份篇

【林放問禮之本】 林放は姓名、魯の人なり。當時、禮の形式に趨りて、本義を失へるの疑あるを以て、この問を發せしなり。朱注に、林放魯人。見世之爲禮者、專事繁文、而疑其本之不在是也。故以爲問。

【子曰大哉問】 大は大切の意。朱注に、孔子以下時方逐末、而放獨有志於本、故大其問。蓋得其本、則禮之全體無不在其中矣。

【禮與其奢也一寧戚】 凡そ冠婚等の禮は、立派にして多く費用をかくるよりは、寧ろ儉約にして、入費を省くべし。喪禮は體裁を飾り修むるよりは、寧ろ哀痛の實を表せよ、となり。朱注に、易治也。孟子曰、易其田疇。在喪禮則節文習熟、而無哀痛慘怛之實者也。戚則一於哀、而文不足耳。禮貴得中。奢易則過於文。儉戚則不及而質。二者皆未合禮。然凡物之理、必先有質而後有文、則質乃禮之本也。

【定公問君使臣一以忠】 朱注に、定公魯君、名宋。二者皆

理之當然、各欲自盡而已。○呂氏曰、使臣不患其不忠、患禮之不不至。事君不患其無禮、患忠之不足。尹氏曰、君臣以義合者也。故君使臣以禮、則臣事君以忠。

【哀公問社於宰我一使民戰栗】 社は國に於て、祠を建てて土の靈を祭るものなり。そこには其の地味に適する木を植ゑて神主とす。魯の哀公、社に植うる木に就きて其の由來を孔子の門人宰我に問ふ。宰我对へて曰く、夏の代には松を植ゑ、殷の世には柏(類楡)を植ゑ、周の代には栗を植ゑたり。栗を植ゑるは、民をして社に對して戰栗せしむる意に取りたるなりと對ふ。栗は慄に通ず。古代罪人を社前に刑戮せしを以て、宰我は臆測を以て此の説をなししならん。朱注に、宰我孔子弟子、名予。三代之社不同者、古者立社各樹其土之所宜木、以爲主也。戰栗恐懼貌。宰我又言、周所以用栗之意如此。豈以古者戮人於社、故附會其說與。

【子問之曰一既往不咎】 孔子は之を聞きて、既に終りたることは其の過誤を説き諫めても間に合はず、とて、深く之

を責め、其の後を謹ましめんとせしなり。朱注に、違事謂事雖未成、而勢不能已者。孔子曰、宰我所對、非立社之本意。又啓時君殺伐之心。而其言已出、不可復救。故歷言此以深責之、欲使謹其後也。○尹氏曰、古者各以所宜木名其社。非取義於木也。宰我不知而妄對。故夫子責之。

【儀封人請見一爲木鐸】 孔子魯を去りて、衛の邑なる儀に至りしとき、其の邑長某見えんことを請うて曰く、賢人が此の地に至る毎に、余は未だ嘗て面接せざることあらず。願はくは、孔子にも見えたしと。門人乃ち取次ぎて孔子に見えしむ。某孔子に見え、出でて曰く、諸君(門人等)を指す、今孔子の位を失ひ、國を去れるを氣遣ふこと勿れ。天下の道徳廢れて、世の亂ること久し。まさに治平に復すべき時運に會せり。天は必ず、孔子をして位を得て、善政を施さしめ、天下の教導者とするならん、となり。一説に、木鐸を振りて衆を警むるが如く、天下を周流して、教を布かしむるなりと。これは孔子の人格に接して、此の人こそ世道の頹廢を挽回するならめと信じて言ひたるなり。朱注に、

儀衛邑。封人掌封疆之官。蓋賢而隱於下位者也。君子謂當時賢者。至此皆得見之。自言其平日不見絕於賢者。而求以自通也。見之。謂通使得見。喪謂失位去國。禮曰。喪欲速貧。是也。木鐸金口木舌。施政教時。所振以警衆者也。言亂極當治。天必將使夫子得位設教。不久失位也。封人一見夫子而遽以是稱之。其所得於觀感之間者深矣。或曰。木鐸所以徇于道路。言天使夫子失位周流四方。以行其教。如木鐸之徇于道路也。

四里仁篇

【子曰不仁者一知者利仁】 不道德者は久しく窮困の境遇に安んじ居ること能はずして、遂に悪しきことをなす。又安樂の位地に満足せずして、遂に驕奢淫逸に流る。ただ仁者は約と樂との位地如何に拘はらず、常に仁に安んじ、知者は仁を好むこと、利益を食るが如し、となり。朱注に、約窮困也。利猶食也。蓋深知篤好、而必欲得之也。不仁之人、失其本心。久約必濫。久樂必淫。惟仁者則安其仁、而

無適不然。知者則利於仁、而不易所守。蓋雖深淺之不同、然皆非外物所能奪矣。

【富與貴云々不去也】 富貴は人の欲する所なれども、富貴を得るの道を以てせず、即ち不仁にして得たる富貴には、君子は處らざるなり。貧賤は人の惡む所なれども、貧賤となるの道を以てせず、即ち仁にして得たる貧賤には、君子は命に安んじて、去らざるなり。物徂徠云く、得富貴之道、即仁也。得貧賤之道、即不仁也。不仁而得富貴、是不以其道也。仁而得貧賤、是不以其道也。朱注に、不以其道得之、謂不當得而得之。然、於富貴則不處、於貧賤則不去。君子之審富貴而安貧賤也如此。【君子去仁惡乎成名】 孔安國曰く、惡乎成名者、不得名成名爲君子。朱注に、言君子所以爲君子、以其仁也。若貪富貴而厭貧賤、則是自離其仁、而無君子之實矣。何所成其名乎。

【君子無終食之間違仁云々】 馬融曰く、造次急遽、顛沛偃仆、雖急遽偃仆不違仁。と。倉卒の場合、又は躓き仆れたる瞬間と雖も、仁を取失はざるをいふ。朱注に、終食

者一飯之頃、造次急遽、苟且之時、顛沛傾覆流離之際。蓋君子之不、去乎仁、如此。不但富貴貧賤取舍之間而已也。

【子曰我未見一加乎其身】 孔子曰く、今の世に於て、我未だ仁を好むものや、不仁を惡むものを見ず。若し仁を好むものあらば、誠に結構にて、これに過ぎたるよきものはなし。不仁を惡むものは必ず仁を爲して、其の身を不仁に汚さるることあらざるゆゑ、これ亦貴ぶべし。而るに我未だ之を見ず、となり。朱注に、夫子自言、未見好仁者、惡不仁者。蓋好仁者、眞知仁之可好、故天下之物無不以加之。惡不仁者、眞知不仁之可惡。故其所以爲仁者、必能絶去不仁之事、而不使少有及於其身。此皆成德之事、故難得而見之也。

【有能一日用一力不足者】 もし、能く一旦奮然として、力を仁に用ひば、必ず之を爲すことを得。力足らざるものはあらず。ただ之を爲すの心なきゆゑ、力を出さざるなり。朱注に、言好仁、惡不仁者、雖不可見、然或有其人果能一旦奮然用力於仁、則我又未見其力有不足者。蓋爲仁在己。欲之則是、而志之所至、氣必至焉。故仁雖難

能、而至之亦易也。

【蓋有之矣我未之見也】 或は多數の人の中には、力足らずして、爲す能はざるものもあらん。ただ我は未だかかる人を見ず。皆爲すを好まざる人のみなり、との意。朱注に、蓋疑辭。有之、謂有用力而力不足者。蓋、人之氣質不同。故疑、亦容或有此昏弱之甚、欲進而不能者。但我偶未之見耳。蓋不敢終以爲易、而又歎人之莫肯用力於仁也。○此章言仁之成德雖難、其人、然學者苟能實用其力、則亦無不可至之理。但用力而不至者、今亦未見其人焉。此夫子所以反覆而歎息之也。

【子曰不患無位一求爲可也】 高き位置に居らざることとを苦に思ふなかれ、其の位置に立ちても差支なき實力を養ふべし。我が才智人格の人に認知せられざるを患ふなかれ、人に知らるるだけの實質を備ふることを勉むべし。となり。朱注に、所以立、謂所以立乎其位者、可知、謂可以見知之實也。○程子曰、君子求其在己者而已矣。【子曰、參乎一曾子曰唯】 孔子、曾子に謂つて曰く、吾は唯一つの道にて終始一貫せりと。曾子は唯と應へたり。參は

曾子の名なり。朱注に、參乎者、呼曾子之名而告之。貫通也。唯者應之速而無疑者也。聖人之心、渾然一理、而泛應、曲當、用各不同。曾子於其用處、蓋已隨事精察而力行之。但未知其體之一爾。夫子知其真積力久、將有所得。是以呼而告之。曾子果能默契其指。即應之速而無疑也。

【子出―忠恕而已矣孔】子が其の座を立ちたる後に、門人、曾子に問うて曰く、道一とは如何なる意味ぞ。曾子曰く、夫子の道は忠恕の二字のみと。忠とは己の真心を盡すをいひ、恕とは我が身に引きくらべて人の身を察するをいふ。朱注に、盡己之謂忠、推己之謂恕。而已矣者、竭盡而無餘之辭也。夫子之一理、渾然而泛應曲當。譬則天地之至誠無息、而萬物各得其所也。自此之外、固無餘法。而亦無待於推矣。曾子有見於此、而難言之。故借學者、盡己推己之目、以著明之。欲人之易曉也。蓋至誠無息者、道之體也。萬殊之所以一也。萬物各得其所者、道之用也。一本之所以萬殊也。以此觀之、一以貫之之實可見矣。或曰、中心爲忠、如心爲恕。於義亦通。

【子曰君子喻於義小人喻於利】君子は義に目ざとくして、之を逸することなく、小人は利に目ざとくして、之を取逃すことなし、となり。朱注に、喻猶曉也。義者天理之所宜、利者人情之所欲。○程子曰、君子之於義、猶小人之於利也。惟其深喻、是以篤好。楊氏曰、君子有舍生而取義者。以利言之、則人之所欲無甚於生、所惡無甚於死。孰肯舍生而取義哉。其所喻者義而已。不知利之爲利故也。小人反之。

【子曰見賢思齊焉見不賢而內自省也】賢者を見ては、己もかくなりたしと思ひて自奮し、不賢者を見ては、己も之に類せる所なきかと反省して、戒慎するなり。朱注に、思齊者、冀己亦有是善、內自省者、恐己亦有是惡。○胡氏曰、見人之善惡不同、而無不反諸身者、則不徒羨人而甘自棄、不徒責人而忘自責矣。

【子曰事父母―勞而不怨】父母に過あれば、角立たず、おだやかに諫め、志の従はざるを見ては、敬心を起して反抗せず、父母より打擲等の苦痛を受くとも、怨むことなく、孝心を失はざるが、子の父母を諫むる道なり、との意。幾

はヤウヤクと訓す。朱注に、此章與内則之言相表裏。幾微也。微諫、所謂父母有過、下氣、怡色、柔聲以諫也。見志不從、又敬不違、所謂諫不入、起敬起孝、悅則復諫也。勞而不怨、所謂與其得罪於鄉黨州閭、寧熟諫、父母怒不悅、撻之流血、不敢疾怨、起敬起孝也。

【子曰父母在不遠遊―遊必有方】父母在世の間は遠地に往き、歳月を送りて、定省を闕くが如きことなく、他行には必ず行く先を告げて、父母に安心せしむべし、となり。朱注に、遠遊則去親遠、而爲日久、定省曠而音問疎。不惟己之思親不置、亦恐親之念我不忘也。遊必有方、如已告云之束、則不敢更適西。欲親必知己之所而在而無憂、召己則必至而無失也。范氏曰、子能以父母之心爲心、則孝矣。

【子曰父母之年―以懼】子たるものは父母の年を知らざるべからず。一方には其の長命を喜び、一方には其の老衰を懼るるなり。朱注に、知猶記憶也。常知父母之年、則既喜其壽、又懼其衰、而於愛日之誠、自有不能已者。

五 公冶長篇

【子貢曰我不欲―非爾所及也】子貢曰く、我は人の我に對して大風なるを快しとせず、我も亦人に對して大風にせざらんと欲すと。孔子曰く、それは汝の及ぶ所にあらず、汝の柄になきことなりと。朱注に、子貢言、我所不欲、人加之於我之事、我亦不欲、以此加之於人。此仁者之事、不待勉強。故夫子以爲非子貢所及。

【子貢問曰孔文子―謂之文也】子貢問うて曰く、衛の大夫孔圍をば、何故に文と諡せしか。孔子曰く、敏慧なれども學問を好み、位高けれども下に問ふことを恥ぢず、故に文といふなりと。朱注に、孔文子、衛大夫、名圍、凡性敏者、多不好學、位高者、多恥下問。故諡法有以勤學好問爲文者。蓋亦人之所難也。孔圍得諡爲文、以此而已。

【子謂子產―其使民也義】子謂子產は、孔子が子産を批評して謂へるなり。使民也義とは、人民に命令使役することとが道に叶ひ、無理のなきことなり。子産、名は公孫僑、孔子と同時の人、衛の大夫なり。善政を施ししを以て名あ

り。朱注に、子産、鄭大夫、公孫僑。恭謙遜也。敬謹恪也。惠愛利也。使民義如都鄙有章、上下有服、田有封洫、廬井有伍之類。○吳氏曰、數其事而責之者、其所善者多也。臧文仲、不仁者三、不知者三、是也。數其事而稱之者、猶有所未至也。子産有君子之道四焉、是也。今或以一言蓋一人、一事蓋一時、皆非也。

【子曰齊武子其愚不可及也】齊武子是有道の君に事へては知者として國事を執り、格別の氣概ありとも見えぬ。これ其の知には他人も及ぶべきなり。無道の君に事へては、危険を冒して國難を救ひ、而して能く卒に其の身を保ち、以て其の君を濟ひ、智巧の士の深く避けて爲さざる所を爲す。これ其の愚には及ぶべからざるなり。一説に、國治れば、出でて其の知を用ひ、國亂るれば、知を藏して愚なるが如きなりと。然れども、次の朱注の事實に據れば前説可なるが如し。朱注に、齊武子、衛大夫、名、僂。按春秋傳、武子仕衛、當文公成公之時。文公有道、而武子無事可見。此其知之可及也。成公無道、至於失國。而武子周旋其間、盡心竭力、不避艱險。凡其所處皆知巧之士所深

避而不肯爲者。而能卒保其身、以濟其君。此其愚之不可及也。○程子曰、邦無道、能沈晦以免患。故曰不可及也。亦有不當愚者。比干是也。

【顏淵季路侍無憾】顏淵と子路と孔子の側に侍したるとき、孔子曰く、汝等各の希望を陳べては如何と。子路曰く、願はくは好き馬車に乗り、輕暖なる皮衣を着、朋友と共に之を用ひて、使ひ破りても遺憾とすることなく、更に新調する身分となりたし、となり。朱注に、盡何不也。衣服之也。裘皮服。敝壞也。憾恨也。

【顏淵曰願無伐善無施勞】己の能事を誇ることなく、己の功勞を誇大的に風聽せざらんと欲す、となり。朱注に、伐、誇也。善、謂有能。施、亦張大之意。勞、謂有功。易曰、勞而不伐、是也。或曰、勞勞事也。勞事非己所欲。故亦不欲施之於人。亦通。

【子路曰願聞少者懷之】朱注に、老者養之以安。朋友與之以信。少者懷之以恩。一説、安之安我我也。信之信我也。懷之懷我也。亦通。○程子曰、夫子安仁。顏淵不違仁。子路求仁。又曰、子路顏淵孔子之志、皆與物共者

也。但有小大之差爾。又曰、子路勇於義者。觀其志豈可下以勢利拘之哉。亞於浴沂者也。顔子不自私己、故無伐善。知同於人。故無施勞。其志可謂大矣。然未免出於有意也。至於夫子、則如天地之化工付與萬物而已不勞焉。此聖人之所爲也。今夫羈勒以御馬、而不以制牛。人皆知羈勒之作在乎人。而不不知羈勒之生由於馬。聖人之化、亦猶是也。先觀二子之言、後觀聖人之言、分明天地氣象。凡看論語、非但欲理會文字、須要識得聖賢氣象。

六 雍也篇

【子曰孟之反不伐馬不進也】孔子曰く、魯の大夫孟之反は功に誇らざる人なり。或る時、魯軍敗走し、之反、殿となり、人より後れ歸る。まさに城門に入らんとするとき、わざと其の馬に鞭うつて曰く、余はことさらに後れたるにあらず、走らんとしても、この通り馬が進まぬゆゑ、己むを得ず、人より後れたるなりといへりと。敗軍の時、殿後となりて、他の味方を無事ならしむるを功とす。之反は殿

となりたるを馬の遅きに歸して、己の功とせざるなり。朱注に、孟之反魯大夫、名側。胡氏曰、反即莊周所稱孟子反者是也。伐、誇功也。奔、敗走也。軍後曰殿。策、鞭也。戰敗而還、以後爲功。反奔而殿。故以此言自揜其功也。事在哀公十一年。○謝氏曰、人能操無欲上上之心、則人欲日消、天理日明。而凡可以矜己誇人者皆無足道矣。然不知學者欲上上之心無時而忘也。若孟之反可以爲法矣。

【子游爲武城宰一偃之室也】子游は孔子の門人、姓名は言偃。武城は魯の邑、宰は其の長なり。子游武城の宰となりたる時、孔子問うて曰く、汝部下によき人を得たりやと。子游曰く、某の部下に澹臺滅明といふものありて、行くに徑路を通りたることなく、公事の外には某の家に来りしことなし、斯る人を得たり、と對へたり。朱注に、武城魯下邑。澹臺姓、滅明名、字子羽。徑路之小而捷者。公事如飲射讀法之類。不由徑、則動必以正、而無見小欲速之意。可知。非公事不見邑宰、則其有以自守、而無枉己徇人之私可見矣。○楊氏曰、爲政以人才爲先。故

孔子以得_レ人爲_レ問。如_レ滅明_一者、觀_レ其二事之小_一、而其正大之情可見矣。後世有_レ不由_レ徑者、人心以爲_レ迂。不_レ至_レ其室、人必以爲_レ簡。非_レ孔氏之徒、其孰能知而取_レ之。愚謂持_レ身以_レ滅明_一爲_レ法、則無_レ苟賤之羞。取_レ人以_レ子游_一爲_レ法、則無_レ邪媚之惑。

【子曰質勝_レ文_一然後君子】 實質が文飾に比して多過ぐれば、鄙野になり、文飾が實質よりも多ければ、虚榮的になる。

文と質と相調和して役にも立ち、見苦しくもあらぬが、君子といふものなり、との意。文とは禮式の如きをいふ。朱注に、野野人。言_レ鄙略_一也。史_レ掌_レ文書_一、多聞習_レ事。而誠或不足也。彬彬猶_レ斑斑。物相雜_レ而適均_一之貌。言_レ學者當_レ損有_レ餘、補_レ不足。至於_レ成德、則不_レ期_レ然而然矣。○楊氏曰、文質不_レ可_レ以_レ相勝。然質之勝_レ文、猶_レ言_レ甘_レ可_レ以_レ受_レ和、白_レ可_レ以_レ受_レ采也。文勝而至_レ於滅_レ質、則其本亡矣。雖_レ有_レ文、將_レ安施乎。然則與_レ其史也_一寧野。

【子曰知者樂_レ水_一仁者壽】 朱注に、樂、喜好也。知者達_レ於_レ事理_一而周流無滯。有_レ似_レ於_レ水。故樂_レ水。仁者安_レ於_レ義理_一而厚重不遷。有_レ似_レ於_レ山。故樂_レ山。動靜_レ以_レ體_レ言_一、樂壽

以_レ效言也。動而不_レ括。故樂。靜而有_レ常。故壽。○程子曰非_レ體_レ仁知_レ之深者、不_レ能_レ如_レ此形_一容_レ之。

【子貢曰如有_レ病_一諸】 子貢曰く、もし博く人民に惠澤を施して、衆人の難儀を濟ふことあらば、仁といふべきか。孔子曰く、此の如きは、何ぞ仁といふに止まらん、必ず聖人といふべし。堯舜すら、かくするに不十分なるを氣遣ひたり。汝はかくして仁を求めんとせば、愈難くして、愈難し。今少し手近なる處より仁を求むべし、となり。朱注に、博、廣也。仁、以_レ理言_一。通_レ乎_レ上下。聖、以_レ地言_一。則造_レ其極_一之名也。乎、疑而未定之辭。病、心有_レ所_レ不足也。言_レ此何止_レ於_レ仁。必也聖人能_レ之乎。則雖_レ堯舜之聖、其心猶有_レ所_レ不足_レ於_レ此也。以_レ是求_レ仁、愈難而愈遠矣。

【夫仁者己欲_レ立_一達人】 元來仁者は、おのれ立身せんと欲せば、この心を推して、人をも立て、おのれ榮達せんと欲せば、この心を及ぼして、人を達せしむ。これ仁者の心なり、との意。朱注に、以_レ己及_レ人、仁者之心也。於_レ此觀_レ之、可_レ以_レ見_レ天理之周流而無_レ間矣。狀_レ仁之體、莫_レ切_レ於_レ此。【能近取_レ譬_レ可_レ謂_レ仁_一之方也己】 能く近く比喩を吾が身に取

りて、人を推察するを仁の術といふべし、となり。朱注に、譬、喩也。方術也。近取_レ諸身_一、以_レ己所_レ欲_一、譬_レ之他人_一、知_レ其所欲亦猶_レ是也。然後推_レ其所欲_一以及_レ於_レ人_一、則恕之事、而仁之術也。於_レ此勉_レ焉、則有_レ以_レ勝_レ其人欲_レ之私_一、而全_レ其天理之公_一矣。○呂氏曰、子貢有_レ志_レ於_レ仁_一、徒事_レ高遠_一、未_レ知_レ其方_一。孔子教_レ以_レ於_レ己取_レ之_一、庶_レ近_レ而可_レ入_一。是乃爲_レ仁之方、雖_レ博施濟衆_一、亦由_レ此進。

七述 而 篇

【子曰默而識_レ之_一何有_レ於_レ我_一哉】 默而識_レ之は口に言はざれども、心に記得するなり。何有_レ於_レ我_一哉は、以上の三者、一も我に無しと自ら謙せるなり。朱注に、識、記也。默、識、謂_レ不言而存_レ諸心_一也。一説、識、知也。不言而心解也。前說近_レ是_一。何有_レ於_レ我_一、言_レ何者能有_レ於_レ我_一也。三者已非_レ聖人之極至_一、而猶不_レ敢當_一。則謙_レ而又謙_レ之辭也。

【子曰甚矣_レ不_レ復夢見_レ周公_一】 孔子曰く、吾が老衰せること甚しいかな、夢に周公を見ざるにこと久しくなりぬと。孔子壯年のとき、周公の道を行はん志あり。故に夢寐の間

にも周公を忘れざりしが、老いて、其の望も絶えてより、自ら周公を夢みずなりぬ。故にこの歎あり。朱注に、孔子盛時、志欲_レ行_レ周公之道_一。故夢寐之間、如_レ或_レ見_レ之_一。至_レ其老而不_レ能_レ行_一也、則無_レ復是心_一、而亦無_レ復是夢_一矣。故因_レ此而自歎_レ其衰之甚_一也。○程子曰、孔子盛時、寤寐常存_レ行_レ周公之道_一。及其老也、則志慮衰而不可_レ以_レ有_レ爲_レ矣。蓋存_レ道者、心無_レ老少之異_一。而行_レ道者、身老則衰也。

【子食_レ於_レ有_レ喪者之側_一不_レ歌】 孔子は喪中の者と共に食するときは、同情のあまり、食も旨からず。故に十分食はず。又死者を弔哭したる日には、更に歌ひ樂しむことなし。餘哀未だ去らざればなり。朱注に、臨_レ喪_一、不_レ能_レ甘_レ也。哭_レ謂_レ弔哭_一。一日之内、餘哀未_レ忘_一。自不能_レ歌也。○謝氏曰、學者於_レ此二者、可_レ見_レ聖人情性之正_一也。能識_レ聖人之情性_一、然後、可_レ以_レ學_レ道。

【子曰富而可_レ求_一從_レ吾所_レ好】 富といふものが、求めて可なるものならば、賤役と雖も、忍びて之を爲さん。されど、天命あり、強ひて求むべきものにあらず。故に吾は吾が好む所の道を樂まんとなり。執鞭は鞭を持ちて、貴人の先拂

をする賤役なり。朱注に、執鞭賤者之事。設言、富若可求、則雖身爲賤役以求之、亦所不辭。然有命焉。非求之可得也。則安於義理而已矣。何必徒取辱哉。○蘇氏曰、聖人未嘗有意於求富也。豈問其不可哉。爲此語者、特以明其決不可求爾。楊氏曰、君子非惡富貴而不求。以其在天、無可求之道也。

【子在齊一至於斯也】詔は舜の作りし樂にして、美を盡し善を盡せるものなり。孔子齊に居りしとき、詔を學ぶこと三月、肉の味の美なるにも氣附かざりき。かくて歎じて曰く、かくまでに此の樂がよく作られたりとは意はざりきと。朱注に、史記、三月上有學之二字。不知肉味、蓋心一於是而不及乎他也。曰、不意舜之作樂至於如此之美、則有以極其情文之備、而不覺其歎息之深也。蓋非聖人不足以及此。○范氏曰、詔盡美、又盡善。樂之無以加此也。故學之三月不知肉味、而歎美之如此。誠之至、感之深也。

【子曰聖人一得見君子者斯可矣】今の世に於て、聖人は到底見ることを得ざれば、君子を見ることを得ば、まづよろし

となり。朱注に、聖人神明不測之號、君子才德出衆之名。

【子曰善人一得見有恒者斯可矣】善人をば容易に見ることを得ざれば、心變りのせぬ恒久的人を見ることを得ば、まづ可なりとなり。朱注に、子曰字、疑衍文。恒常久之意。張子曰、有恒者、不貳其心、善人者志於仁而無惡。

【亡而爲有難乎有恒矣】おのれに無きものを有るが如くよそほひ、空虚なるを盈滿なるが如くし、不足なるを充分なるが如く見せかけて、以て人前を飾る。これ一般の人情なり。恒あることは難いかな、となり。朱注に、三者皆虚夸之事。凡若此者、必不能守其常也。○張敬夫曰、聖人君子以學言、善人有恒者以質言。愚謂有恒者之與聖人、高下固懸絕矣。然未有不自有恒而能至於聖者也。故章末申言有恒之義。其示人入德之門、可謂深切而著明矣。

【子疾病一丘之禱久矣】孔子の病重きとき、子路、神に平癒を禱らんと請ふ。孔子曰く、其の理ありや。子路曰く、あり。誅に、爾を上下の神祇に禱るといふ語ありと。孔子曰く、その事ならば、余は久しく禱り居るゆゑ、今更改めて

て禱るに及ばず、となり。禱は常人の過を悔い、善に遷りて、神助を請ふなり。孔子は已に過なく、且善なり。故に禱ること久しといへるなり。誅はシノビゴトと訓す。死者生前の行を述べて、哀しむ辭なり。朱注に、禱謂禱於鬼神。有諸問下有此理否。誅者哀死而述其行之辭也。上下謂天地。天曰神、地曰祇。禱者悔過遷善以祈神之佑也。無其理則不必祈。既曰有之、則聖人未嘗有過。無善可遷。其素行固已合於神明。故曰、丘之祈久矣。又士喪禮、疾病行禱五祀。蓋臣子迫切之至情、有不能自已者。初不請於病者、而後祈也。故孔子於子路、不直拒之。而但告以無所事祈之意。

八 泰伯篇

【會子有疾一其言也善】朱注に、孟敬子魯大夫、仲孫氏、名捷。問之者、問其疾也。言自言也。鳥畏死。故鳴哀。人窮反本。故言善。此會子之謙辭。欲敬子知其所言之善而識之也。

【君子所貴一有司存】君子が道德上貴ぶ所のもの三あり。其

の一は坐作進退(坐立進退)を穩當にして、粗暴放慢を避け、其

の二は顔色を正しくして、信實に近づき、其の三は、言語聲氣を整へて、鄙野背理を遠くすること是なり。籩豆の如き禮式の細事は、係り役あるゆゑ、其の者に任せて可なりとの意。籩は竹の豆、豆は木の豆にして、祭事に用ふる食器なり。朱注に、貴猶重也。容貌舉一身而言、暴粗厲也。慢、放肆也。信實也。正顔色而近信、則非色莊也。辭言語、氣聲氣也。鄙、凡陋也。倍、與背同。謂背理也。籩、竹豆、豆、木豆。言道雖無所不在、然君子所重者、在此三事而已。是皆脩身之要、爲政之本。學者所當操存省察而不可有造次顛沛之違者也。若夫籩豆之事、器數之末。道之全體、固無不該。然其分則有司之守、而非君子之所重矣。○程子曰、動容貌、舉一身而言也。周旋中禮、暴慢斯遠矣。正顔色、則不妄。斯近信矣。出辭氣、正由中出、斯遠鄙倍。三者正身而不外求。故曰、籩豆之事、則有司存。尹氏曰、養於中、則見於外。會子蓋以脩己爲爲政之本。若乃器用事物之細、則有司存焉。

【會子曰以能從事於斯】校は理非曲直を言ひ争ふなり。

友は蓋し顔淵を指ししならん。昔者とあれば、當時亡き人なること明なり。朱注に校計校也。友、馬氏以爲、顔淵是也。顔子之心、唯知義理之無窮、不見物我之有間。故能如此。○謝氏曰、不知有餘在己、不足在人。不_レ必得爲_レ在己、失爲_レ在人。非_レ幾_レ於無_レ我者、不_レ能也。

【子曰民可使_レ由_レ之不可_レ使_レ知之】民をば上の教命に信賴して、従はしむることを得れども、各人各戸に一一其の理を知らしむることは困難なれば、不可能のことなり。故にかくするには及ばず、との意。可は可能、不可は不可能の意なり。然るに後世、不可を禁止の意に取りて、「勿」と同一視し、秘密主義の政治を攻撃する材料として、不可_レ使_レ知之を引例するものあり、これ孔子を誣ふると共に、自家の無學を表白するものといふべし。不可_レを禁止の意に用ふるは後世のことにして、論語には斯るもの一ヶ所もなし、と知るべし。朱注に、民可使_レ之由_レ於是理之當然。而不_レ能_レ使_レ之知_レ其所_レ以_レ然_レ也○程子曰、聖人説_レ教、非_レ不欲_レ入_レ家喻_レ而_レ戶曉_レ也。然_レ不_レ能_レ使_レ之知_レ但_レ能_レ使_レ之由_レ之爾。若曰_レ聖人不_レ使_レ民知_レ則_レ是後世朝四暮三之術也。豈

聖人之心乎。

【子曰篤信_レ善_レ道】篤信は篤く學を信するなり。懷疑の念を以て學に向ひては、其の學は己の有とならず。朱注に、篤厚而力也。不_レ篤信、則_レ不_レ能_レ好_レ學。然篤信而不_レ好_レ學、則所_レ信、或非_レ其正。不_レ守_レ死、則_レ不_レ能_レ以_レ善_レ其道。然守_レ死而不_レ足_レ以_レ善_レ其道、則亦徒死而已。蓋守_レ死者、篤信之效。善_レ道者好_レ學之功。

【危邦不_レ入_レ無_レ道則隱】邦とは諸侯の國を指し、天下とは支那全體を指していふ。危邦は危急存亡に迫りたる邦、亂邦は危急には至らざるも、刑政紀綱紊れたる國なり。天下有道則見とは、天下に道德の重んぜられて、君子用ひられ、小人斥けらるる如き時は、出でて、官に仕へ、己の技倆抱負を顯すなり。無_レ道則隱とは、前と反對の場合には隱遁して、官に就かざるをよしとす、となり。朱注に、君子見_レ危授_レ命。則仕_レ危邦者、無_レ可_レ去_レ之義。在_レ外則不_レ入_レ可也。亂邦未_レ危、而刑政紀綱紊矣。故潔_レ其身而去_レ之。天下學_レ一世而言。無_レ道則隱_レ其身而不_レ見也。此惟篤信好_レ學、守_レ死善_レ道者能_レ之。

【邦有道_レ恥也】邦に道ある時は、士たるもの出でて仕へ、従つて富貴を得べし。かかる時に貧賤なるは、無能不徳にして、世に用ひられざるの徒なり。故に恥づべし。邦に道なき時に、官にありて富貴なるは、不義小人の徒なり。故に恥づべし。朱注に、世治而無_レ可_レ行之道、世亂而無_レ能_レ守_レ之節、碌碌庸人、不_レ足_レ以_レ爲_レ士矣。可_レ恥_レ之甚也○晁氏曰、有_レ學有_レ守_レ而去_レ就_レ之義潔、出處之分明。然後爲_レ君子之全徳也。

【子曰禹吾_レ無_レ間然_レ矣】孔子曰く、禹に就きては、吾一點の非難すべきものなし。己の飲食を粗末にして、祭祀を厚くし、以て祖考及び天に孝を盡し、己の衣服を悪くして、祭服に美を盡し、己の居處を卑くして、溝渠に力を盡し、以て水旱に備ふ。禹に就きては、實に間然する所なしと、なり。朱注に、間_レ隙_レ也。謂_レ指_レ其_レ罅_レ隙_レ而非_レ議_レ之也。菲薄也。致_レ孝鬼神、謂_レ享_レ祀_レ豐潔。衣服常服。蔽_レ蔽_レ膝也。以_レ韋_レ爲_レ之。冕冠也。皆祭服也。溝_レ洫_レ田_レ間_レ水_レ道。以_レ正_レ疆_レ界_レ備_レ旱_レ潦_レ者_レ也。或_レ豐_レ或_レ儉_レ、各適_レ其_レ宜_レ。所_レ以_レ無_レ罅_レ隙_レ之可_レ議也。故再言_レ以_レ深_レ美_レ之○楊氏曰、薄_レ於_レ自_レ奉_レ而_レ所_レ勤_レ者_レ民

之事、所_レ致_レ飾_レ者_レ宗廟朝廷之禮。所謂有_レ天下_レ而不_レ與也。夫何間然_レ之有。

九子罕篇

【子曰吾有_レ知_レ乎_レ叩_レ其_レ兩端_レ而_レ竭_レ焉】孔子曰く、吾は何も知れることなし、無知なる野人に問はれても、知らざること多し。唯我が知れる範圍に於て、其の本末始終を打開きて説き盡すのみと。朱注に、孔子謙言、己無_レ知識。但其告_レ人、雖_レ於_レ至_レ愚_レ、不_レ敢_レ不_レ盡_レ耳。叩_レ發_レ動也。兩端猶_レ言_レ兩頭。言_レ終始本末、上下精粗、無_レ所_レ不_レ盡○程子曰、聖人之教_レ人、俯就_レ之若_レ此、猶恐_レ衆人以爲_レ高遠_レ而不_レ親也。聖人之道、必降_レ而_レ自_レ卑_レ。不_レ如此、則人不_レ親。賢人之言、則引_レ而_レ自_レ高_レ。不_レ如此、則道不_レ尊。觀_レ於_レ孔子孟子、則可見矣。尹氏曰、聖人之言上下兼盡、即_レ其_レ近_レ衆人皆可_レ與_レ知_レ極_レ其_レ至_レ則雖_レ聖人亦無_レ以_レ加_レ焉。是之謂_レ兩端。如_レ答_レ樊遲之問_レ仁_レ知_レ兩端竭_レ盡_レ無_レ餘蘊_レ矣。若_レ夫語_レ上_レ而_レ遺_レ下、語_レ理而_レ遺_レ物、則豈聖人之言哉。

【顔淵喟然歎曰_レ忽焉在_レ後】顔淵、ああと嘆じて曰く、夫子

の道は高妙堅固にして、其の本體測り知るべからず。之を仰げば、いよく高くして及ぶべからず、之を鑽れば、いよいよ堅くして、入るべからず、前にあるかと思れば、忽ち後にありて、捕捉すべからずと。鑽は鑿にて穿る意なり。朱注に、喟歎聲。仰彌高、不可及。鑽彌高、不可入。在前に後、恍惚不可爲象。此顏淵深知夫子之道、無窮盡、無方體、而歎之也。

【夫子循々然以禮】 夫子は次第次第に我を引き進め、我が心を廣むるに知識を以てし、我が身をしめくくるに禮を以てして、教へ導かる、となり。朱注に、循循有次序貌。誘引進也。博文約禮教之序也。言夫子道雖高妙、而教人有序也。侯氏曰、博我以文、致知格物也。約我以禮、克己復禮也。程子曰、此顏子稱聖人最切當處、聖人教人、唯此二事而已。

【欲罷不能一末由也已】 其の樂しさ、悦はしさに、止めんとするも止むる能はず、夫子の誘導に乗じて、吾が才のあらん限りを盡し力めしに、捕捉し難き道が、吾が前に卓立するが如く見ゆ。しかし、之に従ひ行かんとすれども、遂

に及ぶ能はずと、孔子の道の高遠なるを歎美したるなり。

朱注に、卓立貌。末無也。此顏子自言其學之所至也。蓋悅之深而力之盡、所見益親、而又無所用其力也。吳氏曰、所謂卓爾亦在乎日用行事之間。非所謂窈冥昏默者。程子曰、到此地位工夫尤難。直是峻絕。又大段著力不得。楊氏曰、自可欲之謂善、充而至於大、力行之積也、大而化之、則非力行所及矣。此顏子所以不達一間也。○程子曰、此顏子所以爲深知孔子而善學之者也。胡氏曰、無上事而喟然歎。此顏子學既有得。故迷其先難之故、後得之由、而歸功於聖人也。高堅前後、語道體也。仰鑽瞻忽、未領其要也。惟夫子循循善誘。先博我以文、使下我知古今達事變。然後約我以禮、使我尊所聞行所見。如行者之赴家、食者之求飽。是以欲罷而不能。盡心盡力、不遑休廢。然後見夫子所立之卓然。雖欲從之、末由也已。是蓋不怠所從、必求至乎卓立之地也。抑斯歎也、其在請事斯語之後、三月不違之時乎。

【子貢曰有美玉一我待賈者也】 美玉は暗に孔子に喩ふ。賈

は價なり、待賈は相當の禮を以て我を聘するものあるを待つをいふ。朱注に、韞藏也。匱匱也。沽賣也。子貢以孔子有道不仕、故設此二端以問也。孔子言、固當賣之。但當待賈而不當求之耳。○范氏曰、君子未嘗不

欲仕也。又惡不由其道。士之待禮、猶玉之待賈也。若伊尹之耕於野、伯夷太公之居於海濱、世無成湯文王、則終焉而已。必不枉道以從人、銜玉而求售也。

【子在川上—不舍晝夜】 孔子、川のほとりに在り、水流を見て歎じて曰く、往くものは總て斯くの如くなるぞ、晝夜間斷なしと。人生も亦然り。よろしく之に法りて、自強息まざるべし。徒に光陰を費して、老後の悔を招くべからず。朱注に、天地之化、往者過、來者續、無一息之停。乃道體之本然也。然其可指而易見者、莫如川流。故於此發以示人。欲學者時時察省、而無毫髮之間斷也。○程子曰、此道體也。天運而不已、日往則月來、寒往則暑來。水流而不息、物生而不窮、皆與道爲一體、運乎晝夜、未嘗已也。是以君子法之、自強不息。及其至也、純亦不已焉。又曰、自漢以來、儒者皆不識此義。此見聖人之心、

純亦不已也。純亦不已、乃天德也。有天德、便可語王道。其要只在謹獨。愚按、自此至終篇、皆勉人進學不已之辭。

【子曰苗而不秀—不實者有矣夫】 穀には苗のときにいぢけて華を吐かざるものあり。華を持ちても、實る力なきものあり。人にも此の如きものあり。故に志あるものは努力せざるべからず、となり。朱注に、穀之始生曰苗。吐華曰秀。成穀曰實。蓋學而不至於成、有如此者。是以君子貴自勉也。

10 郷黨篇

【孔子於郷黨—似不能言者】 孔子は其の郷里に於ては人人に對し、温順謹直にして、物言ふことも出来ざるが如し、となり。朱注に、恂恂信實之貌。似不能言者、謙卑遜順、不以賢知先人也。郷黨父兄宗族之所在、故孔子居之、其容貌辭氣如此。

【其在宗廟朝廷—唯謹爾】 國の宗廟に於ける祭祀の時や、朝廷に於ける政事に就ては、滔滔と辯じて、澁滯すること

となし。ただ謹嚴にして、放慢の態なきのみ。朱注に、便便辯也。宗廟禮法之所在。朝廷政事之所出。言不可以不明辯。故必詳問而極言之。但謹而不放爾。○此一節、記孔子在郷黨宗廟朝廷、言貌之不同。

【厭焚一不問馬】朱注に、非不愛馬。然恐傷人之意多。故不暇問。蓋貴人賤畜。理當如此。

二 先進篇

【子曰從我於陳蔡者皆不及門也】孔子曰く、我に陳蔡の間に從つて艱難辛苦を嘗めしもの、今は或は死し、或は去りて、我が門に至らず、となり。孔子が陳蔡の野に厄せしことは卷四孔子略傳中にあり。朱注に、孔子嘗厄於陳蔡之間。弟子多從之者。此時皆不在門。故孔子思之。蓋不忘其相從於患難之中也。

【德行一子夏】これは記者の語なり。孔子が上の如く言ひたるに就きて、其の重なる從行者を擧げたるなり。朱注に、弟子因孔子之言、記此十人、而并目其所長、分爲四科。孔子教人、各因其材、於此可見。○程子曰、四科乃從夫子

於陳蔡者爾。門人之賢者固不止此。曾子傳道而不與焉。故知十哲世俗論也。

【顔淵死一誰爲】哭は死者を哀しみ、聲を放ちて泣くことにて、支那に於ける禮なり。慟は身をもがきて哀傷することにて、中庸を失せるなり。有慟乎は、哀傷の餘り、自らは知らざりしが、從者に注意せられて、「余は慟せしか」といひしなり。非夫人之爲慟而誰爲は、顔淵の如きものに對して慟せずば、他に慟すべき人なしと、中庸を失するも、場合によりては止むを得ざるをいふ。朱注に、慟、哀過也。有慟乎、哀傷之至、不自知也。夫人謂顔淵言其死可惜。哭之宜慟。非他人之比也。○胡氏曰、痛惜之至、施當其可。皆情性之正也

【子曰由之瑟一未入於室也】孔子曰く、由(子路)の瑟の如き不調和なる樂は、我が門にて鼓するに及ばずと。門人これを聞きて、子路を輕んず。孔子乃ち前言を釋明して曰く、由の瑟は、譬へば表座敷、乃ち客間には升りたれども、未だ奥の間には入らざるが如し。正大の域には至りたれども、ただ精微の奥に入らざるのみと。小を以て大を没すべから

ざるをいふ。朱注に、程子曰、言其聲之不和、與己不同也。家語云、子路鼓瑟、有北鄙殺伐之聲。蓋其氣質剛勇而不和於中和。故其發於聲者如此。門人以夫子之言、遂不敬子路。故夫子釋之。升堂入室。喻入道之次第。言子路之學、已造乎正大高明之域。特未深入精微之奧耳。未可下以一事之失而遽忽之也。

【子路使子羔爲費宰一子曰賊夫人之子】子路、魯の季氏に仕へしとき、同門の子羔を推薦して、費の宰たらしめんとす。孔子曰く、「それは、あの人の子のためにならぬ」と。

子羔姓名は高柴。費は季氏の邑にして、今の山東省沂州府費縣なり。孔子、子羔の父を識れるゆゑ、子羔を指して、夫人之子といひしなり。朱注に、子路爲季氏宰而舉之也。賊害也。言子羔質美而未學、遽使治民、適以害之。

【有民人然後爲學】實地に當りて、人民を治め、社稷の祭祀に從ふも學問なり。讀書のみが學問にあらず、となり。朱注に、言治民、事神、皆所以爲學。

【是故惡夫佞者】神に事へ、民を治むるは重事なれば、一通りの學問成りたる後に、從事すべきものなり。之を學問

の稽古臺となすが如きは、神を汚し、民を苦しむるものなり。子路其の非を悟りながら、猶強辯して、非を飾らんとす。故に孔子は、「そのやうなことをいふから、我は佞者は嫌ひぢや」といひしなり。佞者とは口先の達者なるものをいふ。朱注に、治民事神、固學者之事。然、必學之已成、然後、可仕以行其學。若、初未嘗學、而使之即仕以爲學、其不至於慢神而虐民者幾希矣。子路之言非其本意。但、理屈、詞窮而取辨於口、以禦人耳。故、夫子不斥其非、而特惡其佞也。

【子路問聞斯行諸一退之】聞斯行は、義に適ひたることを聞けば、直に行ふをいふ。有父兄在は、父兄のある間は一存にて行はず、相談したる上にすべしとなり。求は冉有の名、赤は公西華の名。この章は、子路は勝氣の人なるゆゑ、之を抑へて、大事をとらせ、冉有は控目の人なるゆゑ、之を進めて、勵まししなり。朱注に、兼人謂勝人也。張敬夫曰、聞義固當勇義。然有父兄在、則有不可得而專者。若不稟命而行、則反傷於義矣。子路有聞、未之能行、惟恐有聞。則於所當爲、不患其不能爲矣。

特患爲之之意或過、而於所當稟命者有闕耳。若再求之資稟、失之弱。不患其不稟命也。患其於所當爲者、遂巡畏縮而爲之不勇耳。聖人一進之、一退之。所以約之於義理之中、而使無過不及之患也。

三 顏淵篇

【顏淵問仁一由人乎哉】 顏淵、仁とは如何なるものぞと問ふ。孔子曰く、己の私欲に克ち、禮に復歸するを仁といふ。一旦己に克ち、禮に反れば、天下の人、皆其の仁に服して、我が意の如くならざるものなし。仁を爲すは、己の心一つにありて、他人の力に頼るにあらず。他人に相談は入らぬゆゑ、爲さんと欲すれば、甚だ易きなり。朱注に、仁者本心之全徳。克勝也。己謂身之私欲也。復反也。禮者天理之節文也。爲仁者、所以全其心之徳也。蓋心之全徳、莫非天理。而亦不能不壞於人欲。故爲仁者、必有以勝私欲而復於禮、則事皆天理、而本心之徳復全於我矣。歸猶與也。又言、一日克己復禮、則天下之人皆與其仁、極言其效之甚速而至大也。又言、爲仁由己、

而非他人所能預。又見其機之在我而無難也。日日克之、不以爲難、則私欲淨盡、天理流行、而仁不可勝用矣。程子曰、非禮處、便是私意。既是私意、如何得仁。須是克盡己私、皆歸於禮。方始是仁。又曰、克己復禮、則事事皆仁。故曰、天下歸仁。謝氏曰、克己須從性、偏難克處、克將去。

【顏淵曰請問其目一請事斯語矣】 目は條目なり。請事斯語矣は斯の語を己が任とせん、となり。朱注に、目條件也。顏淵問夫子之言、則於天理人欲之際、已判然矣。故不復有疑問。而直請其條目也。非禮者、己之私也。勿者禁止之辭。是人心之所以爲主而勝私復禮之機也。私勝、則動容周旋無不中禮。而日用之間、莫非天理之流行矣。事如事之事。請事斯語、顏淵識其理、又自知其力有以勝之。故直以爲己任而不疑也。

【仲弓問仁一請事斯語矣】 門人仲弓(冉雍)仁を問ふ。孔子曰く、我が門を出でて、外に行き、他人に接するには、高貴の賓客を見るが如く敬し、官に在りて、民を使ふには、大祭に従事するが如く注意して、失なきを期し、己の欲せ

ざる所は、人に施すことなく、諸侯の國に仕へて官に在りても、民に怨まるることなく、卿大夫の家に仕へても人に怨まるることなきを仁といふ。仲弓曰く、某不肖と雖も、願はくは斯の語を己が責任として、之に従事せん、となり。朱注に、敬以持己、恕以及物、則私意無所容、而心徳全矣。内外無怨、亦以其效言之、使以自考也。

【司馬牛問仁一得無詘】 門人司馬牛(名は)仁を問ふ。孔子

曰く、仁者は物言ふに、口より出で難きを辛うじて出だすが如くす。牛曰く、それだけにて仁者といふべきか。孔子曰く、凡そ事、言ふは易く、行ふは難し、もし言ふのみにて實行せずんば、則ち不仁なり。故に之を言ふには慎重にして、詘せざるを得ず、となり。朱注に、詘忍也。難也。仁者心存而不放。故其言若有所忍、而不易發。蓋其徳之一端也。夫子以牛多言而躁、故告之以此、使其於此而謹之。則所以爲仁之方、不外是矣。牛意、仁道至大、不但如夫子之所言。故夫子又告之以此。蓋心常存。故事不苟。事不苟。故其言自有不得而易者。非強閉之而不出也。楊氏曰、觀此及下章再問之語、牛之易

其言可知。

【司馬牛問君子一何憂何懼】 司馬牛は向魋、即ち宋の大夫桓魋の弟なり。朱注に、向魋作亂。牛常懼。故夫子告之以此。牛之再問、猶前章之意。故復告之以此。疾病也。言由其平日所爲、無愧於心。故能自省不疚、而自無憂懼。未可遽以爲易而忽之也。晁氏曰、不憂不懼、由乎徳全而無疵。故無入而不自得。非實有憂懼、而強排遣之也。

【司馬牛憂曰一富貴在天】 司馬牛は宋の司馬桓魋といふ兄あり。而るに我獨亡といへるは、桓魋亂を作ししかば、誅殺せられんことを憂へしなり。商は子夏の名。聞之矣は、蓋し孔子より聞けるならん。死生有命は、兄弟の善惡生死は皆天命にして、如何ともすべからざるをいふ。朱注に、牛有兄弟、而云爲者、憂其爲亂而將死也。聞之矣、蓋聞之夫子。命稟於有生之初。非今所能移。天莫之爲、而爲。非我所能必。但當順受而已。

【君子敬而一無兄弟也】 敬而無失は、己の身を持するに謹慎にして、常に之を失はざるなり。與人恭は、人に接する

に恭謙なるなり。朱注に既安命。又當修其在己者。故又言、苟能持己以敬而不間斷、接人以恭而有節文、則天下之人皆愛敬之如兄弟矣。蓋子夏欲以寬牛之憂、故爲是不得已之辭。讀者不以辭害意可也。

【子張問明可謂遠也已矣】 浸潤之譖とは、人をそしるに、水が次第に物にしみ込むが如く、何時ともなく聽者に信ぜしむるをいふ。膚受之愬とは、己の冤を訴ふるに、身に迫りたる火急の難儀の如くに述べて、聽者をして曲直を詳にするの暇なく、之を救はんとする念を起さしむるをいふ。遠は近きに蔽はれざるの意。朱注に、浸潤如水之浸灌滋潤漸漬而不驟也。譖毀人之行也。膚受謂肌膚所受理害切也。如易所謂剝牀以膚、切近災者也。愬愬己之冤也。毀人者、漸漬而不驟、則聽者不覺其入、而信之深矣。愬冤者急迫而切身、則聽者不及致詳、而發之暴矣。二者難察。而能察之、則可見其心之明而不蔽於近矣。此亦必因子張之失而告之。故其辭繁而不殺、以致丁寧之意云。○楊氏曰。驟而語之、與利害不切於身者不行焉、有不待明者能之也。故浸潤之

譖、膚受之愬不行、然後謂之明、而又謂之遠。遠則明之至也。書曰視遠惟明。

【子貢問政一民信之】 子貢政治の要を問ふ。孔子曰く、上の食料を充實し、兵備を整頓し、人民の信用を得ることが大切なり。朱注に、言倉廩實而武備修、然後、教化行、而民信於我不離叛也。

【子貢曰去兵】 子貢曰く、この三者の中、是非とも一つを去てざるべからず、とせば、何を先に廢すべきか。孔子曰く、兵を去てんと。これは食足りて、民に信あれば、兵なくとも、守ること固ければなり。朱注に、言食足而信孚、則無兵而守固矣。

【子貢曰一民無信不立】 子貢曰く、残りの二者の中、止むを得ざる場合は何を先に去つべきか。孔子曰く、食を去てん。古より人は死を免れず。一度は必ず死すべきものなり。民に信用なくんば、政治家は立つ能はず。立つ能はずして苦しむよりは、早く死するの安きに如かず。故に食を去つべしとなり。朱注に、民無食必死。然死者人之所必不免。無信、則雖生而無以自立。不若死之爲安。故寧

死而不失信於民。使民亦寧死而不失信於我也。○程子曰、孔門弟子善問、直窮到底。如此章者、非子貢不能問。非聖人不能答也。愚謂以人情而言、則兵食足而後、吾之信可以孚於民。以民德而言、則信本、人之所固有、非兵食所得而先也。是以爲政者、當身率其民、而以死守之。不以危急而可棄也。

【棘子成曰一何以文爲】 質は實質なり、孝弟忠信等をいふ。文は文飾なり、詩書禮樂等をいふ。朱注に、棘子成衛大夫疾時人文勝。故爲此言。

【子貢曰惜乎一駟不及舌】 夫子とは子成を指す。駟不及舌は、失言は四頭立の馬車を以て追ふも、及ぶ能はず、となり。朱注に、言子成之言乃君子之意。然言出於舌、則駟馬不能追之。又惜其失言也。

【文猶質也一猶犬羊之鞮】 文と質とは兩々相待て全きものなり。もし質のみにして、文なくんば、虎豹の鞮と犬羊の鞮と見別け難きが如く、君子と小人とを辨する能はざらんとなり。朱注に、鞮皮去毛者也。言文質等耳。不可相無。若必盡去其文、而獨存其質、則君子小人無以辨矣。

夫棘子成矯當時之弊、固失之過。而子貢矯子成之弊、又無二本末輕重之差。胥失之矣。

【齊景公問政於孔子】 朱注に、齊景公名杅。魯昭公末年孔子適齊。

【孔子對曰一子子】 朱注に、此人道之大經、政事之根本也。是時、景公失政、而大夫陳氏厚施於國。景公又多內嬖、而不立太子。其君臣父子之間、皆失其道。故夫子告之以此。

【公曰善哉一食諸】 雖有粟云云は、國を亡し、身を滅すに至るゆゑ、穀を積むとも、食ふ能はざるをいふ。朱注に、景公善孔子之言、而不能信用。其後果以繼嗣不定啓陳氏弑君篡國之禍。○楊氏曰、君之所以君、臣之所以臣、父之所以父、子之所以子、是必有道矣。景公知善、而夫子之言、而不不知反求其所、以然。蓋悅而不釋者、齊之所以卒於亂也。

【子曰君子一小人反是】 成は成就せしむる意。朱注に、成者誘掖獎勵以成其事也。君子小人所存、既有厚薄之殊。而其所好、又有善惡之異。故其用心不同如此。

【季康子問政一必偃】 季康子は魯の卿なり。就_レ有道_一は、有道者に親しむなり。君子之徳云云は、上位者の徳は風の如く、人民の徳は草の如し。草は風來れば必ず伏す。人民も上のなす所に靡き従ふものなり、との意。朱注に、爲_レ政者、民所_レ視效_一。何以_レ殺爲_一。欲_レ善則民善矣。上一作_レ尙。加也。偃、仆也。○尹氏曰。殺之爲_レ言、豈爲_レ人上_一之語哉。以_レ身教者從、以_レ言教者訟。而況於_レ殺乎。

【子張問一可_レ謂_レ之達_一矣】 達とは行き詰ることなく、通ぜざる所なきをいふ。朱注に、達者、徳乎_一於人_一而行無_レ不得_一之謂。

【子曰何哉爾所_レ謂_レ達者】 朱注に、子張務_レ外。夫子蓋_レ已知_レ其發_レ問_レ之意。故反詰_レ之。將_レ以_レ發_レ其病_一而藥_レ之也。

【子張對曰一非_レ達也】 聞は名聲の高きなり、皇侃云く、在_レ邦は、諸侯に仕ふるをいひ、在家は、卿大夫に仕ふるをいふと。朱注に、聞與_レ達、相似而不同。乃誠僞之所_レ以_レ分_レ學者不_レ可_レ不_レ審也。故夫子既_レ明辨_レ之、下文又詳言_レ之。

【夫達也者一在家必達】 察_レ言云云は、人の言語顔色を觀察して、其の人の欲する所の善惡を知り、思慮周到にして、

常に人に下りて高ぶらざるなり。朱注に、内主_レ忠信_一、而所_レ行合_レ宜_一。審_レ於接_レ物_一、而卑_レ以_レ自牧_一。皆自修_レ於内_一、不求_レ人知_レ之事_一。然徳修_レ於己_一、而人信_レ之_一、則所_レ行自無_レ窒礙_一矣。

【夫聞也者一在家必聞】 色取_レ仁云云は、外面は仁らしくして、實行は仁に違ふ。即ち僞なり。其の僞を是とし、之に居て憚らざるなり。朱注に、善_レ其顔色_一、以_レ取_レ於仁_一、而行實_レ背_レ之_一、又自以_レ爲_レ是_一、而無_レ所_レ忌憚_一。此不_レ務_レ實而專務_レ求_レ名者_一。故虚譽雖_レ隆、而實徳則病_レ矣。○程子曰、學者須_レ是務_レ實_一。不_レ要_レ近_レ名_一。有_レ意_レ近_レ名_一、大本已_レ失。更學_レ何事_一。爲_レ名_一而學_一、則是僞也。今之學者、大抵爲_レ名_一。爲_レ名_一與_レ爲_レ利_一、雖_レ清濁不同、然其利心則一也。尹氏曰、子張之學、病_レ在_レ乎_レ不_レ務_レ實_一。故孔子告_レ之_一、皆篤實之事、充_レ乎_レ内而發_レ乎_レ外者也。當時門人親_レ受_レ聖人之教_一。而差失有_レ如此_一者。況後世乎。

【樊遲問仁一未_レ達】 樊遲は孔子の門人なり。未_レ達は、其の譯が呑込めぬなり。人を愛するは公平ならざるべからず、人を知るは選擇せざるべからず。故に樊遲は愛と知とは兩

立し難かるべしと疑ひしなり。朱注に、愛_レ人仁之施_一、知_レ人知之務_一。曾氏曰、遲之意、蓋_レ以_レ愛欲_レ其周_一、而知有_レ所_レ擇、故疑_レ二者之相悖_一爾。

【子曰舉_レ直_一使_レ枉者直_一】 直き人を引擧げて、之を曲れるものの上に置けば、曲れる者も直き者に壓されて、自ら直くなる。されば仁と知とは、相戻ることなきなり。朱注に、擧_レ直錯_レ枉者知也。使_レ枉者直_一則仁矣。如此則二者不_レ惟不_レ相悖_一、而反相_レ爲_レ用_一矣。

【樊遲退一何謂也】 樊遲直きを擧ぐるの知たるを解したれども、未だそれが即ち仁となるの理に達せず。故に孔子の言を擧げて、子夏に問ひしなり。朱注に、遲以_レ夫子之言_一、專爲_レ知者之事_一。又未_レ達_レ所_レ以_レ能使_レ枉者直_一之理_一。

【子夏曰富哉言乎】 孔子の言の意味豊富なるを嘆美す。而して次の如く言ひて、樊遲をして其の意を悟らしむ。朱注に、歎_レ其所_レ包者廣_一。不_レ止_レ言_レ知_一。

【舜有_レ天下_一不_レ仁者遠矣】 不仁者遠矣は、枉れるものなきに至ること。其の遠く去るが如きをいふ。皇陶は舜の時、士となりて五刑を司る。朱注に、伊尹湯相也。不仁者遠、

言_レ人皆化而爲_レ仁_一、不_レ見_レ有_レ不_レ仁者_一、若_レ其遠去_レ爾_一、所謂使_レ枉者直_一也。子夏蓋_レ有_レ以_レ知_レ夫子之兼_レ仁知_一而言_レ矣。

【子貢問友一毋_レ自辱_一焉】 子貢友に交るの道を問ふ。孔子曰く、友に過失あれば、中心より説きて、之を善に導くべし。されど、朋友は骨肉の親とは異にして、義を以て合ふものなれば、かくしても聴かざる時は、乃ち止むべし。もし聴かざるに、數、忠告すれば、却つて疏遠せられて、己の身を辱かしむるに至る。故にかくならぬ中に、手を退くべしとなり。朱注に、友_レ所_レ以_レ輔_レ仁_一。故盡_レ其心_一以_レ告_レ之_一、善_レ其説_一以_レ道_レ之_一。然以_レ義合者也。故不可_レ則止_一。若數_レ而見_レ疏_一、則自辱_レ矣。

【曾子曰君子一輔_レ仁】 以_レ友輔_レ仁は、互に友の輔によりて、吾が仁の徳を長するなり。朱注に、講_レ學以_レ會_レ友_一、則道益明_一、取_レ善以_レ輔_レ仁_一、則徳日進_一。

三 子路篇

【子曰其身正一雖_レ令不_レ從】 これは、人の上位に立つものに就きていふ。意明なり。

【子夏爲莒父宰一大事不成】朱注に、莒父魯邑名。欲事之速成、則急遽而無序、而反不達。見小者之爲利、則所就者小、而所失者大矣。

【子貢問曰一可謂士矣】士は人民の上に立つ資格ある人物の意。行己有恥は、身に省みて、恥づべきことは爲さざるなり。四方は四方の諸侯をいふ。不辱君命は、君より命ぜられたる使事を立派に果して、君國の恥辱とならぬやうにするをいふ。朱注に、此其志有所不爲、而其材足以有爲者也。子貢能言。故以使事告之。蓋爲使之難、不獨貴於能言而已。

【曰敢問其次一稱弟焉】子貢曰く、其次の士といふに足るものを承りたし。孔子曰く、一族の者が彼は孝なりと稱し、郷里のものが彼は弟なりと稱するものは、士といふべし。弟は長者に對して順遜なるをいふ。必ずしも兄にのみならず。朱注に、此本立而材不足者。故爲其次。

【曰敢問其次一可爲次】言ふことは必ず信實にして、行ふべきことは必ず敢行するは、堅くるしき小人物なり。然れども守る所あるものゆゑ、まづ其の次の士といふ

べしとなり。硲硲然は、堅くして融通利かざるなり。朱註に、果必行也。硲、小石之堅確者。小人言其識量之淺狹也。此其本末皆無足觀。然亦不害其爲自守也。故聖人猶有取焉。下此則市井之人、不復可爲士矣。

【曰今之從政者一焉足算也】從政者は、政事を執る人なり。斗筭之人は、枘や筭にて量るほど、世に澤山ある人といふ。既ち凡人なり。朱注に、今之從政者、蓋如魯三家之屬。噫、心不平聲。斗、量名、容三十升。筭、竹器、容二升。斗筭之人言鄙細也。算、數也。子貢之間、每下。故夫子以是警之。

【子曰君子易事一求備】道は正道なり。器之は、其の人の長所に隨つて、之を使ふをいふ。不レ道は、諂諛の如きをいふ。求備は、一人に何事をもなさしめんとして、材器を顧慮せざるをいふ。故に事へ難し。朱注に、器之謂隨其材器而使也。君子之心、公而恕、小人之心、私而刻。天理人欲之間、每相反而已矣。

【子曰剛毅木訥近仁】剛毅木訥は巧言令色の反對なり。斯る人は守ること固く、行ふこと實なり。故に仁に近し。朱

注に、程子曰、木者質朴、訥者遲鈍。四者質之近乎仁者也。楊氏曰、剛毅則不屈於物、木訥則不至於外馳。故近仁。

【子路問曰一兄弟怡怡】切切は情意懇切周到なるなり。惇惇は告ぐるこゝと詳にして相督勵するなり。怡怡は溫和愉悅の狀なり。朱注に、胡氏曰、切切懇到也。惇惇詳勉也。怡怡和悅也。皆子路所不足。故告之。又恐其混於所施、則兄弟有賊恩之禍、朋友有善柔之損。故亦別而言之。

四 憲問篇

【子路問成人一可爲成人矣】公綽姓は孟、魯の大夫なり。再求は孔子の門人なり。朱注に、成人猶言全人。武仲魯大夫、名紇。莊子魯下邑大夫。言兼此四子之長、則知足以窮理、廉足以養心、勇足以力行、藝足以泛應。而又節之以禮、和之以樂、使德成於内、而文見乎外、則材全德備、渾然不見一善成名之迹、中正和樂、粹然無復偏倚駁雜之蔽。而其爲人也亦成矣。然亦之爲言、非其至者。蓋就子路之所可及而語之也。若論其至、則

非聖人之盡人道、不足以語此。

【曰今之成人一可爲成人矣】曰今之成人何必然は、孔子曰く、今の成人といふべきものは、必ずしも、前の如く十分ならずとも、次の如くならば、可なりとなり。久要不忘平生之言は、舊約を始終忘れずして、履行するをいふ。朱注に、復加曰字者、既答而復言也。授命、言不愛其生、持以與人也。久要舊約也。平生平日也。有是忠信之實、則雖其才知禮樂有所未備、亦可以爲成人之次也。○程子曰、知之明、信之篤、行之果、天下之達德也。若孔子所謂成人、亦不出此三者。武仲知也、公綽仁也、下莊子勇也、再求藝也、須是合此四人之能、文之以禮樂。亦可以爲成人矣。然而論其大成、則不止於此。若今之成人、有忠信而不及於禮樂、則又其次者也。又曰、臧武仲之知、非正也。若文之以禮樂、則無不正矣。又曰、語成人之名、非聖人孰能之。孟子曰、惟聖人、然後可以踐形。如此方可稱成人之名。胡氏曰、今之成人以下乃子路之言。蓋不復聞斯行之之勇、而有終身誦之之固矣。未詳是否。

【子問公叔文子不取乎】夫子とは公叔文子を指す。朱注に、公叔文子衛大夫公孫枝也。公明姓、賈名。亦衛人。文子爲人、其詳不可知、然必廉靜之士。故當時以三者稱之。

【公明賈對曰豈其然乎】時然後言云云は、言ふべき時には言へども、人決して其の言を厭はず、となり。其然豈其然乎は、口語の「さうかなあ」の意にして、疑を含めるなり。公明賈の言の如きは、禮義、内に充溢し、時に處する、宜しきを得たるものにあらざれば、能はず。文子賢と雖も、かくまでには至らじ。故に疑を挾める應答をなししなり。朱注に、厭者苦其多而惡之之辭。事適其可、則人不厭而不覺其有是矣。是以稱之。或過而以爲不言不笑不取也。然此言也、非禮義充溢於中、得時措之宜者不能。文子雖賢、疑未及此。但君子與人爲善、不欲正言其非也。故曰其然豈其然乎。蓋疑之也。

【子曰古之學者爲己今之學者爲人】古代の學問するものは己の智徳を益さんがためにし、今の學ぶものは、己の才學を人に知られんが爲にす、となり。朱注に、程子曰、爲己、

欲得之於己也。爲人、欲見知於人也。○程子曰、古之學者爲己。其終至於成物。今之學者爲人。其終至於喪己。愚按聖賢論學者用心得失之際、其說多矣。然未有如此言之切而要者。於此明辨而日省之、則庶乎其不昧於所從矣。

【子曰莫我知一莫知子也】孔子、子貢に對し、世に我を知りて、用ふるものなし、と歎ぜり。子貢因りて、何故に子を知るものなきかと、疑の聲を漏せり。朱注に、夫子自歎、以發子貢之問也。

【子曰不怨天一其天乎】世に知られずとて、天をも怨むことなく、人をも尤むることなく、ただ卑近なる所より學び初めて、次第に高尚の理に達するを勉むるのみ。即ち人事を盡して、運を天に任するなり。孔安國は下學を人事、上達を知天命と解せり。朱注に、不得於天而不怨天、不合於人而不尤人。但知下學而自然上達。此但自言其反己自脩、循序漸進耳。無以甚異於人而致其知也。然深味其語意、則見其中自有及人不及知、而天獨知之之妙。蓋在孔門、惟子貢之智、幾足以及此。故特語以發

之。惜乎其猶有所未達也。○程子曰、不怨天、不尤人、在理當如此。又曰、下學上達。意在言表。又曰、學者須守下學上達之語。乃學之要。蓋凡下學人事、便是上達天理。然習而不察、則亦不能以上達矣。

一五 衛靈公篇

【在陳莫能興】在陳絶糧は、陳の國に往きたるとき、食料に窮せしなり。病は疲勞なり。朱注に、孔子去衛適陳。興起也。

【子路慍見一斯濫矣】朱注に、何氏曰、濫溢也。言君子固有窮時。不若小人窮、則放溢爲非。程子曰、固窮者、固守其窮、亦通。○愚謂、聖人當行而行、無所顧慮。處困而亨、無所怨悔、於此可見。學者宜深味之。

【子張問行一雖州里行乎哉】行は己が人に用ひられ、世に行はるる意。鬻は南蠻、貉は北狄にして、野蠻國の意。二千五百家を州とし、二十五家を里とす。夷狄は州里等の組織なし。故に州里は開けたる中國の意なり。朱注に、猶問達之意也。子張意、在行於外。故夫子反於身而言之、

猶答于子路問達之意也。篤厚也。

【立則見其參於前也云々】衛は「クビキ」と訓ず。輿馬の頸を壓する木なり。立てる時は、忠信篤敬が我が前に並びつらなるが如くに見え、輿に駕れる時は、其が衛に倚りか、れるが如くに見えて、寸時も、忠信篤敬を離れざるなり。朱注に、其者指忠信篤敬而言。參讀如母往參焉之參。言與我相參也。衛也輓也。言其於忠信篤敬、念々不忘。隨其所至、常若有見、雖欲頃刻離之而不可得。然後、一言一行、自然不離於忠信篤敬、而鬻貉可行也。

【書諸紳】朱注に、紳、大帶之垂者。書之欲其不忘也。【子曰可與言一不使言】共に語るに足るものに遭ひて、言はざるは、よき人を取逃がしたるものにして、益を受くること能はず。共に言ふべからざる人と言ふは、吾が言を取逃がしたるものにして、其の言のために、禍を招くことあり。故に知者には斯の如きことなし。

【子貢問爲仁一友其士之仁者】士大夫に交りて徳を養ふは、工匠の器を銳利にするが如きに喩ふ。居是邦は、諸

侯の國に仕へて、官に居るをいふ。朱注に、賢以事言。仁以徳言。夫子嘗謂、子貢悦、不若己者。故以是告之。欲其有所嚴憚切磋、以成其徳也。○程子曰、子貢問、爲仁、非問仁也。故孔子告之以爲仁之資而已。

【子曰人無遠慮必有近憂】 朱注に、何氏曰、人之所履者、容足之外、皆爲無用之地。而不可廢也。故慮不在千里之外、則患在几席之下矣。

【子曰君子不以言舉人、不以人廢言】 君子は其の人の言のみを聞いて、直に信じて、之を擧用するが如きことをなさず。又小人の言なりとて、それがよき以上は廢棄せず。

【子曰巧言亂徳、亂大謀】 巧言亂徳は、巧言は是非善惡を顛倒して、巧に言ひくろむるゆゑ、人をして節操を失はしむることあるなり。朱注に、巧言變亂是非、聽之、使三人喪其所守。小不忍、如婦人之仁、匹夫之勇、皆是。

【子曰吾嘗不學也】 朱注に、此爲思不學者、言言之。蓋勞心以必求、不遜心而自得也。李氏曰、夫子非思而不學者。特垂語以教人爾。

【子曰民之於仁、未見蹈仁死者也】 甚於水火は、水火

よりも必要にして、且無害なるをいふ。朱注に、民之於水火、所頼以生、不可一日無。其於仁也、亦然。但水火外物而仁在己。無水火、不過害人之身。而不仁則失其心。是仁有甚於水火、而尤不可一日無者也。況水火或有時而殺人。仁則未嘗殺人。亦何憚而不爲哉。李氏曰、此夫子勉人爲仁之語。

二六季氏篇

【孔子曰益者三樂、損者三樂】 樂は音ガウの時は、好む、又は希ふの意なり。朱注に、樂五教反。禮樂之樂、音岳。驕樂淫樂之樂、音洛。節謂辨其制度聲容之節。驕樂則多肆而不知節。佚遊則惰慢惡聞善。宴樂則淫溺而狎小人。三者損益亦相反也。○尹氏曰、君子之於好樂、可不可不謹哉。

【孔子曰侍於君子、一謂之瞽】 愆は過ちなり。言未及之而言は、尊者より未だ談話を向けられざるに、卑者より進みて話しかくるなり。顔色は尊者の顔色、瞽は盲者なり。朱注に、君子有徳位之通稱。愆過也。瞽無目不能察言觀色。○尹氏曰、時然後言、則無三者之過矣。

【孔子曰見善、吾聞其語矣】 善を見ては、追ひかけても及ばざるを恐るるが如く勉め、不善を見ては熱湯を探るが如く、厭ひ避くるなり。これは蓋し古語ならん。故に聞其語といふ。其人とは顔子・曾子・閔子騫・冉伯牛の徒を指す。朱注に、眞知善惡、而誠好惡之。顔曾閔冉之徒、蓋能之矣。語蓋古語也。

【隱居未見其人】 世を遁れて家居しては、其の志す所の聖人の道を求め、世に出でて仕へては、其の道を天下に實行するなり。未見其人は、古代にはありたれども、今日に於ては、其の人なしとの意。この語に當るものは、伊尹・太公の流なり。行義は、出でて仕ふるをいふ。朱注に、求其志、守其所達之道也。達其道、行其所求之志也。蓋惟伊尹太公之流、可當之。當時若顔子、亦庶乎此。然隱而未見、又不幸而蚤死。故夫子云然。

【陳亢問於伯魚、曰子亦有異聞乎】 門人陳亢、孔子の子伯魚に問うて曰く、足下は定めし父君より、他人に傳へざるよきことを聞きしならんと。朱注に、亢以私意窺聖人。疑必陰厚其子。

【對曰未也、一學詩】 伯魚對へて曰く、未だ聞きたることなし。ただ嘗て父が獨り立ち居る時に、僕が早足に其の前を通り過ぎんとす。父が呼び止めて曰く、汝は詩を學びたりやと。僕對へて曰く、未だ學ばずと。父曰く、詩を學ばざれば、相當の事を言ふ能はずと。よりて僕は父の前をさがりて後、詩を學びたり、となり。父の前をのろくせず、早足に過ぐるは子の禮なり。詩は今日存する詩經の類なり。朱注に、事理通達、而心氣和平。故能言。

【他日又獨立、聞斯二者】 禮は今日存する所の禮記・周禮・儀禮等に載するが如きものなり。立は世に立つなり。聞斯二者は、聞きたることは、此の二事のみ、となり。朱注に、品節詳明、而徳性堅定。故能立。當獨立之時、所聞不過如此。其無異聞、可知。

【陳亢退、遠其子也】 聞詩云は、詩の大切なることを聞き、禮の大切なることを聞き、又君子は其の子を他の門人等と特別に扱はぬことを聞きたり、となり。朱注に、尹氏曰、孔子之教其子、無異於門人。故陳亢以爲遠其子。(注意) 庭訓の語、これより出づ。

七 陽貨篇

【子曰性相近也習相遠也】朱注に、此所謂性兼氣質而言者也。氣質之性固有善惡之不同矣。然以其初而言、則皆不甚相遠也。但習於善則善、習於惡則惡、於是始相遠耳。○程子曰、此言氣質之性、非言性之本也。若言其本、則性即是理。理無不善。孟子之言性善是也。何相近之有哉。

(注意) 氣質之性とは本然之性に對する語にして、宋儒の學說に、人に二様の性あり。一を本然の性とし、一を氣質の性とす。本然の性は人が齊しく天より受けたる所、至善にして聖人も凡人も一なれども、氣質の性は、形質ありて後生するものにして、清あり、濁あり。其の清なるものは聖賢たり、濁なるものは昏愚なり。同一ならずといふ。

【子曰唯上智與下愚不移】上智に生れ付きたるものは、惡習にも染まず、下愚に生れ付きたるものは、善教にも化し難しとなり。朱注に、此承上章而言。人之氣質相

近之中、又有美惡一定而非習之所能移者。○程子曰、人性本善、有不可移者何也。語其性則皆善也。語其才則有下愚之不可移。所謂下愚有二焉。自暴自棄也。人苟以善自治、則無不可移。雖昏愚之至、皆可漸磨而進也。惟自暴者拒之以不信、自棄者絕之以不爲。雖聖人與居、不能化而入也。仲尼之所謂下愚也。然其實非必昏且愚也。往往強戾而才力有過人者。商辛是也。聖人以其自絶於善、謂之下愚。然考其歸則誠愚也。或曰、此與上章當合爲一。子曰二字、蓋衍文耳。

【子曰鄙夫無所不至矣】之は富貴權勢を指す。無所不至は、其の位地を維持せんためには、如何なる惡をも忍びて爲すをいふ。朱注に、鄙夫庸惡陋劣之稱。何氏曰、患得之、謂患不能得之。無所不至、小則吮癩舐痔、大則弑父與君。皆生於患失而已。○胡氏曰、許昌斬截之有言、曰、士之品大槩有三。志於道德者、功名不足累其心。志於功名者、富貴不足累其心。志於富貴而已者、則亦無所不至矣。志於富貴、即孔子所謂鄙夫也。

【子貢曰君子有惡乎一室者】稱は揚言、即ち風聽なり。室は無理やりに押通すをいふ。朱注に、訕、謗毀也。室、不通也。稱人之惡、則無仁厚之意。訕上、則無忠敬之心。勇無禮、則爲亂。果而窒、則妄作。故夫子惡之。

【曰賜也爲直者】微以爲智は、人の意中を伺察して、我は智ありと自満顔するをいふ。是より以下は子貢の語なり。不孫以爲勇は、人に傲慢無禮にして、勇なりと心得るなり。許以爲直は、人の陰事をほり出して、正直と心得るなり。朱注に、惡微以下子貢之言也。微伺察也。許謂攻發人之陰私。○楊氏曰、仁者無不愛。則君子疑若無惡矣。子貢之有是心也。故問焉以質其是非。侯氏曰、聖賢之所惡如此。所謂唯仁者能惡人也。

八 微子篇

【長沮桀溺一是知津矣】長沮桀溺の二人は、蓋し世の道なきに斷念して、民間に隱るるものなり。津は渡場なり、執輿は車上にて、馬の手綱を持つなり。知津は、孔子は周流して、屢往來すれば、津を知る筈なりとて、告げざるなり。

朱注に、二人隱者、耦並耕也。時孔子自楚反於蔡。津、渡處、執輿、執轡在車也。蓋、本子路御而執轡。今下問津。故夫子代之也。知津、言數周流、自知津處。

【問於桀溺一耦而不輟】徒は門人の意、滔滔者云云は、道は天下一般に廢れて、挽回の見込なし。之を變易改良せんとするも、誰も共に力を合するものなければ、無益なり、との意。

【且而一避世之士哉】且汝は己と合はざる人を避けて、己と合はんものを求むる人(孔子を)に従つて、さまよふよりは余等の如き、世を避くる士に従ふ方が、面倒ならずして可ならん、と子路に言ひしなり。耦而不輟は、蒔きたる種に土をかけ居て、渡津を告げざるなり。朱注に、滔滔流而不反之意、以猶與也。言天下皆亂、將誰與變易之。而汝也。辟人、謂孔子。辟世、桀溺自謂、耦覆種也。亦不告以津處。

【子路行以告一不與易也】子路車に還りて、問答の次第を告ぐ。孔子遺憾らしき態にていへるやう、吾は人なれば、鳥獸とは群居すべからず。天下の人人と共に居らば、誰

と共に居らんや。苟も人人と共に居る以上は、人人をして道を知らしめ、且治平の化に浴せしめたし。若し天下治平ならば、人を求めて共に之を易ふるの要なし。亂れたればこそ、之を正さんと欲するなれ。世を避くるは易けれども、かくては人としての義理が立たず、との意。朱注に、憮然猶悵然。惜其不喻已意也。言所當與同羣者、斯人而已。豈可絶人逃世爲潔哉。天下若已平治則我無用變易之。正爲天下無道、故欲以道易之耳。○程子曰、聖人不敢有忘天下之心。故其言如此也。張子曰、聖人之仁、不以無道必天下而棄之也。

一 子張篇

【子夏之門人何其拒人也】 我之大賢與云云は、吾にして大賢ならば、固より衆を容れん。もし不賢ならば、人が我を拒絶せん、何ぞ我より拒絶する要あらんや、となり。朱注に、子夏之言迫狭。子張譏之是也。但其所言亦有過高之弊。蓋大賢雖無所不容、然大故亦所當絶。不賢固不可拒人。然損友亦所當遠、學者不可不察。

二 堯曰篇

【子貢曰君子之過也】 君子の過は、日蝕月蝕の誰にも見え、又、其の元に還りたるを誰も仰ぎ觀るが如く、少しもかくすことなく、又よく改むるを憚らず。故に人に尊敬せらる、となり。
【叔孫武叔毀孔子不知量也】 叔孫武叔は魯の大夫なり。無以爲也は、斯ることは爲すべからずの意。人雖欲自絶云云は、人自ら日月と絶交せんと欲すとも、日月には痛くも痒くもなく、光明を放つこと依然たり。かゝることは身の程を知らぬものといふべし。孔子を毀るも、猶此のごとしとなり。朱注に、無以爲猶言無用爲此。土高曰丘、大阜曰陵。日月喻其至高。自絶謂以謗毀自絶於孔子多與祇同。適也、不知量謂不自知其分量。朱注に、程子曰、知命者、知有命而信之也、人不

命、則見害必避、見利必趨、何以爲君子。

【不知禮無以立也】 立は世に立つなり。不知禮、則耳目無所加、手足無所措。

【不知言無以知人也】 知言は、人の言の善惡を知るなり。知人は人の邪正を知るなり。朱注に、言之得失可以知人之邪正。○尹氏曰、知斯三者、則君子之事備矣。弟子記此以終篇、得無意乎。學者少而讀之、老而不知一言爲可用、不幾於悔聖言者乎。夫子罪人也。可不念哉。

二孟子子選

解題

【孟子】 周の孟軻撰。孟は姓にして、子は美稱なり。孟軻は孔子に後ること百餘年、鄒國に生れて、業を子思の門人に受く。戰國の世に出でたれば、其の論ずる所、切當なれども、之を用ふる君なく、施す所なし。乃ち門人萬章の徒と孟子七篇を作れりといふ。其の説、性善の二字を本とし仁義王道を行ふを主張せり。

一 梁惠王篇

【齊宣王】 姓は田、名は辟疆。諸侯なれども、借して王と稱す。

【齊桓晉文】 齊の桓公・晉の文公、並に諸侯に覇たり、宣王霸業を立てんと欲す。故に桓文の事を問ふ。

【仲尼之徒】 孔子の門人等をいふ。

【臣未之聞也】 知り居れども、言ふを屑しとせず。故に聞かずといふ。

【無以則王乎】 もし是非とも言はねばならぬならば、王道を申さんか、となり。朱注に、董子曰、仲尼之門、五尺童子羞稱五霸。爲其先詐力而後仁義也。亦此意也。以已通用。無已、必欲言之而不止也。王謂王天下之道。

【保民】 保は愛護なり。

【胡斮】 齊の臣なり。

【斮鐘】 新に鐘を鑄て成れば、牲(畜)を殺し、血を取りて以て、其の斮(ツキ)に塗るなり。

【殺棘】 恐懼の狀。

【不忍若無罪而就死地】 罪なくして死地に就くものを見る心地して、忍び難し、となり。

【是心足以王矣】 朱注に、王見牛之殺棘而不忍殺。即

所謂惻隱之心仁之端也。擴而充之、則可以保四海矣。故孟子指而言之、欲王察識於此、擴充之也。

【百姓皆一不怨也】 臣民は皆王が羊を以て牛に代へしを吝嗇なりと思へども、某は固より王が牛を見て、忍びざるためなることを知れり。

【誠有百姓者】 實に百姓といふものは、道理の分らぬものなり、との意。

【編小】 編は狭なり。

【以小易大謂我愛也】 羊を以て牛に易へたる理由を百姓は知らざれば、王を吝嗇家なりといふは、不思議にあらず。さりながら、牛の死を痛まば、羊も同様にあらずや。

王笑つて曰く、余は何の積りにて、かかることを命じたりしか。しかし、全く牛が惜しきたために羊と易へしにはあらざりしが、結果はかく見ゆ。百姓が我を吝嗇といふも無理ならず。朱注に、孟子故設此難、欲王反求而得其本心。王不能然。故卒無以自解於百姓之言也。

【遠庖廚】 料理場を遠く離れたる處に置くなり。禮記、玉藻篇に出づ。

【詩云一夫子之謂也】 詩に他人有レ心予付レ度之とあり、これは先生が、今予の心理を推知したる場合に適合せり、となり。詩は小雅巧言篇にあり。其の意は、他人の心に思ふ所を、予これを推測す、といふことなり。

【夫我行之一何也】 さて、我は牛と羊とを易ふことをしなから、心に其の理由を尋ねて、正當の解釋を得ず、却つて先生が説明してくれたり、これにより前日のことが、眼前に再現して、傷はしき念復萌せり。この、羊を牛に易ふる心が王道に合すといふは、抑何故ぞや、となり。朱注に、戚戚心動貌。王因孟子之言而前日之心復萌。乃知此心不從外得。然猶未知所以反其本而推之。

【曰有復於王者一王許之乎】 朱注に、復白也。鈞三十斤。百鈞至重難舉也。羽鳥羽。一羽至輕易舉也。秋毫之末、毛至秋而未銳、小而難見也。輿薪以車載薪、大而易見也。許猶可也。

【今恩足以禽獸一獨何與】 孟子の話なり。今王の恩は牛の如き動物に及びながら、其の事が百姓に行き渡らざるは如何なる故か、となり。朱注に、今恩以下、又孟子之言也。

蓋天地之性、人爲貴。故人與之、又爲同類、而相親。是以惻隱之發、則於民切、而於物緩。推廣仁術、則仁民易、而愛物難。今王此心能及物、則其保民而王、非不能也。但自不肯爲耳。

【挾泰山以超北海】 挾はワキバサムとよむ。泰山は山東省泰安府にあり。支那四嶽の一なり。北海は渤海なり。朱注に挾以腋持物也。超躍而過也。

【爲長者折枝】 朱注に、以長者之命折草木之枝。言不難也。是心固有。不待外求。擴而充之、在我而已。何難之有。

【老吾老一善推其所爲而已矣】 吾が父兄に孝悌の道を盡して、それより其の心を他人の父兄にも及ぼし、吾が子弟を愛養して、其の心を人の子弟に及ぼさば、天下はこれを掌上に弄ぶが如く、吾が自由になるべし。詩に刑于寡妻云々の句あり。これは、王の牛に對して忍びざるが如き心を相手に加ふるをいふなり。故に恩愛の念を近きより次第に遠く推し及ぼせば、天下全體を保つを得べく、恩を推さざれば、一家の妻子をも安全に保つたこと能はず。古の二

帝三王の如き聖人が大に一般の人に過ぐる所以は、要するに、善く己が爲す所の恩を遠く推し及ぼすにあるのみ、となり。詩は大雅、思齊篇にありて、周の文王の事蹟なり。其の意は、我が妻に手本を示して、夫婦和合し、施きて兄弟に及ぼし、それより國家に及ぼして、四民を治む、となり。朱注に、運於掌言易也。刑法也。寡妻寡德之妻、謙辭也。御治也。不能推恩、則衆叛親離。故無以保妻子。蓋骨肉之親、本同一氣。又非但若人之同類而已。故古人必由親親推之、然後及於仁民。又推其餘、然後及於愛物。皆由近以及遠、自易以及難。今王反之、則必有故矣。故復推本而再問之。

【權然後知輕重一王請度之】 物の輕重は權にかけずば、知るべからず。長短は度にてはからねば知るべからず。事の本末輕重を心にてはかることは更に大切なり。王願はくはよく考量したまへ。朱注に、權稱錘(リキ)也。度丈尺也。度之謂稱量之也。言物之輕重長短、人所難齊。必以權度之、而後可見。若心之應物、則其輕重長短之難齊、而不可不以本然之權度。又有甚於物者。今恩

及禽獸、而功不至於百姓。是其愛物之心重且長、而仁民之心輕且短。失其當然之序、而不自知也。故上文既發其端、而於此請王度之也。

【抑王快於心與】 危士臣は、戰士に危地を踏ましむるなり。朱注に、抑發語辭。士戰士也。構結也。孟子以、王愛民之心、所以輕且短者、必其以是三者爲快也。然三事實非人心之所快、有甚於殺穀棘之牛者。故指以問王。欲其以此而度之也。

【王曰否一所大欲也】 前の三事を快しとはせざれども、大に欲する所あるゆゑ、之を遂げんがために、忍びて爲すなり、との意。

【肥甘】 肥えたる肉、甘美なる食なり。

【輕煖】 軽く暖なる服なり。

【采色】 美女なり。

【聲音】 歌舞音曲なり。

【便嬖不足使令於前與】 王の前にありて、御用をつとむるお氣に入りの近侍が、尙王の心に不足なるか。

【而王豈爲是哉】 それとも、若しや、王は之が爲なるか。

【欲辟土地一求魚也】 領土を廣め、秦楚の如き大國をして下風に立ちて來朝せしめ、天下に君臨して、四方の夷狄を服從せしめんと欲するならん。かくの如きやり方、即ち武力を以て、かくの如き志望を達せんとするは、木に上りて魚を求むるが如し、となり。

【有災】 下文に見ゆるが如く、勝つこと能はずして、或は滅亡を招くをいふ。

【可得聞與】 志望を達し難き所以を聞きたし、となり。

【鄰人與楚人戰】 鄰の軍と楚の軍と戦ふなり。鄰は今この山東省の中にありし小國、楚は今この湖南湖北兩省を跨有せし大國なり。

【方千里者九齊集有其一】 千里四方のもの九國ある中に、齊は其の一を有すとすなり。千里四方は凡そ我が百里四方なり。新安、陳氏曰く、千里なるもの九とは、齊・楚・燕・秦・趙・魏・韓・宋・中山なりと。

【反其本矣】 下文に見ゆるが如く、兵を用ひずして、仁政を行ふをいふ。

【藏於王之市】 王の市場に貨物を藏め置くなり。

【天下之欲疾其君者皆欲赴愬於王】 天下の其領主の暴政を疾む者は、皆來り訴へて、之を征伐せんことを請ふなり。

【無恒産一惟士爲能】 恒産は恒久的なる生計の道をいひ、恒心は不變的なる善心をいふ。恒産あるものは恒心あれども、恒産なくとも恒心あるものは、唯士のみなり、となり。其の故は、士は嘗て學問して義理を知るゆゑ、窮すとも濫せざるなり。

【若民無恒産因無恒心】 民の如きは學問なきゆゑ、もし恒産なければ、それがために恒心を失ひて、惡しきことをなす、となり。

【放僻邪侈】 放は氣儘勝手なり。僻はヒガムと訓す。非理をなすをいふ。邪は正道に悖るをいふ。侈は非義非道を憚らざるをいふ。

【罔民】 民に恒産を與へずして、罪を犯せば刑するは、人民を刑罰の網にかくるものにて、無知の禽獸を網にて捕らに異ならず、となり。

【制民之産】 民の生業の法を立つるなり。

【驅而之善】 督勵して、善に赴かしむるなり。

【從之也輕】 輕は易きをいふ。

【救死而恐不贍】 人民は父母妻子の死を救ふに勞苦するのみにても、時間の足らざるを恐るとなり。

【王欲行仁之】 行は王道を行ふなり。

【五畝之宅一不王者未之有也】 參考卷四、第四十課に解釋せり。朱註に、此章、言人君當黜覇功、行王道。而王道之要、不過推其不忍之心、以行不忍之政而已。齊王非無此心。而奪於功利之私、不能擴充以行仁政。雖以孟子反覆曉告、精切如此、而蔽固已深、終不能悟。是可歎也。

【囿】 王の御料地なり。朱註に、囿者蕃育鳥獸之所。古者四時之田(狩獵也)、皆於農隙、以講武事。然不欲馳騫於稼穡場囿之中。故度間曠之地、以爲囿。然文王七十里之囿、其亦三分天下有其二之後也與。

【於傳有之】 古書に載せ有り、となり。

【文王之囿一與民同之】 文王の囿は解放的にして、草薊も行き、薪取も行き、雉兔を獵するものも行き、人民と共に同的に之を使用せり、となり。朱註に、藋草也。藋薪也。

【境】 齊の國境なり。

【大禁】 國家の禁令なり。

【郊關】 國都の外百里(我り十里) 離れたる所を郊とし、郊外に關あり、人の出入を監す。

【粟鹿】 粟はナレシカと訓す。鹿の一種なり。

【齊人伐燕勝之】 燕王噲、國を其の相子之に讓る。而て國大に亂る。齊因て之を伐つ。燕の士卒戰はず、城門閉ぢず。齊遂に大に燕に勝つ。この事、卷三第五十二課に出づ。

【七十里而爲政於天下】 僅か七里四方の小諸侯にてありながら、他の諸侯の歸依を得て、天下に號令するなり。

【以三千里畏人】 齊の宣王を指す。

【湯一征一奚爲後我】 葛伯無道なりしかば、殷の湯王は始めて之を征す。天下皆湯の志、民を救ふにあるを信じ、これを悦ぶ。故に東方を征すれば、西夷怨み、南方を征すれば北狄怨みて曰く、何故に我等の國を後にするか。早く來りて民の疾苦を救はれたしと。葛は今の河南省歸德府寧陵縣にありし國なり。朱註に、兩引書。皆商書、仲虺之誥文也。與今書文亦小異。一征初征也。天下信之、信其志

在救民、不爲暴也。奚爲後我、言湯何爲不先來征我之國也。

【民望之民大悅】 孟子の語なり。民の湯を待つことは、大早に降雨を待つが如し。既に至れば、安堵して、市に往きて貿易するものは、商賣を中止せず、野に耕すものは平日に變らず。かく國民の平穩なる中に、其の國の君を討し、人民を弔恤すること、時雨の大旱に降るが如きゆゑ、民大に悦びたり、となり。雲霓は雲と虹なり。雲合すれば雨ふり、虹見えて則ち止む。時雨は時に適する雨なり。

【後我后後來其蘇】 我后は湯を指す。我等は湯の來征を待ち居れり、湯來らば我等は蘇生せんと、虐政に苦しみ居る意を言ひしなり。

【今燕虐其民一可及止也】 今燕の子之、其民を虐使したれば、王は往きて之を征せり。燕の民は己を水火の中より拯はんとするものなりと思ひ、遠方のもので、辨當持にて齊軍を歓迎したれば、苦もなく燕を取れり。然るに、燕民の父兄を殺し、其の子弟を捕縛し、燕王の宗廟を毀ち、燕の寶物を取りて齊に遷すが如きは、甚だ不可なり。天下

の諸侯は固より齊の強きを畏れ居れり。今燕を併せて、其の地、舊に倍せり。而るに燕に對して仁政を行はずんば、天下の諸侯は必ず聯合して齊を攻めん。故に王は速に令を下して、其の捕縛せる老少を放還し、其の重器を遷すを止め燕の臣民と謀りて、彼等の欲する所の君を立てなば、天下の兵を動かさざる内に、無事に治まらんと成り。

〔備考〕

齊王孟子の言を用ひず。幾もなく燕の昭王自立し、樂毅を將とし諸侯の軍、亦これを助け、六月の間に齊の七十餘城を下せり。齊は一時危急に瀕せしが、田單の力によりて、之を回復せり。

二 公孫丑篇

【孟子曰仁則榮不仁則辱】 これは、當時の諸侯に就きていふ。人君徳を修め、善を行うて、仁なれば、身尊く、國榮え、驕奢淫逸にして、不仁なれば、身危く、國傾くと成り。

【如惡之—必畏之矣】 もし辱を厭はば、仁徳を貴び、有爲の士を重く用ふるに如くはなし。賢者を重要な位地に置き能者に相當の職を授け、國家に戦争もなく、無事なるときに、政事刑罰を公明にして、紀綱を振はば、大國の諸侯と

雖も、之を畏れて侮らじ、となり、朱注に、此因其惡辱之情、而進之以強仁之事也。貴徳、猶尙徳也。士則指其人而言之。賢有徳者。使之在位、則足以正君而善俗。能有才者。使之在職、則足以修政而立事。國家間暇、可有爲之時也。詳味及字、則惟日不足之意可見矣。

〔注意〕 書經泰誓に、吉人爲善、惟日不足。

【迨天之未陰雨—或敢侮予】 天の未だ雨ふらざる内に、桑根の皮を取り來りて、窓戸を蔽ひたれば、漏濕の患なし、かく整理したる上は、この下に居る人も、敢て予を侮るものなからんと、鳥の語として歌へるなり。朱注に、詩、鷓鴣之篇、周公之所作也。迨、及也。徹取也。桑土、桑根之皮也。綱繆、纏綿補苴也。牖戶、巢之通氣、出入處也。予、鳥自謂也。言我之備患詳密如此。今此在下之人、或敢有侮予者乎。周公以鳥之爲巢如此、比君之爲國、亦當思患而預防之。

【孔子曰爲此詩者—誰敢侮之】 孔子曰く、この詩を作りし人は、有道者ならん。この鳥の巢を補苴するが如く、國を

治むるに用意周到ならば、誰も敢て侮るものなからん、と贊稱したるなり。

【今國家間暇—求禍也】 今の諸侯は國家の無事なるを待ちて、遊樂怠慢を事とす。これ、我より禍を求むるなり。般は樂なり。敖は傲に同じ。

【永言配命自求—多福】 人能く始終思念して、天命に配合するは、即ち多福を求むる道なり、との意。朱注に、詩、大雅文王之篇、永長也。言猶念也。配合也。命、天命也。此言福之自求者。

【天作孽猶可—違自作孽不可活】 天災は或は避け得べきも、自ら招きたる災は逃るべからざるをいふ。朱注に、太甲、商書篇名。孽、禍也。違、避也。活、生也。書作道。道猶緩也。此言禍之自求者。尙書疏に、天作災者、謂若太戊、桑穀生朝、高宗雖雉升鼎耳。可修徳以禳之。是可避也。自作災者、謂若桀、放鳴條、紂死宣室。是不可逃也。云云。

【孟子曰矢人—不可不慎也】 矢人は弓矢を作る者、函人は甲冑を作る者、巫はミコ又はカミオロシなど稱するものに

て、神意を承けて人の疾病災厄等を禳ふ者、匠は棺槨を作る工人なり。孟子曰く矢人も始めは函人より無慈悲なるにはあらず、唯擇ぶ所の職業により、矢人は成るべく、能く人を傷けしめんとして、箭鏃を鋭利にし、函人は成るべく傷を受けざらしめんとして、甲冑を堅固にす。巫匠も同様にして、巫は人の無病息災を祈り、匠は死亡の多からんを欲す。かくて仁と不仁との差を生ず。されば術業を擇ぶにも注意せざるべからず、となり。

【孔子曰里仁爲—美擇不處仁焉得智】 孔子曰く、人は仁を爲すべき位地に居るを善しとす。仁の位地を擇んで居らざれば、智者といふことを得ず、となり。

【夫仁天之尊爵也—是不智也】 孟子の話なり。それ仁は天よりの、與る所の最高の爵位なり、人の安全なる居宅なり。この爵位を受け、この安宅に居ることを、誰も遮り止むるものなきに、これに處らずして不仁なるは、これ不智者なりとの意。これは前の孔子の語を釋演せしなり。

【不仁不智—莫如爲仁】 役は使役せらるるものなり。人役は猶人欲の奴隸といふが如し。不仁不智無禮無義は人欲に

使役せらるる奴隸なり。人欲の奴隸にして、不仁無義を爲すを恥づるは、猶弓人が弓を作るを恥ぢ、矢人が矢を作るを恥づるが如し。もし之を恥と思はば、其の役を止めて、仁をなすに如かず。

【仁者如射—反求諸己而已矣】 これ、仁を爲すは、己の心と力とに由り、人の心力を假りて得らるべきものにあらざるをいふ。正己は、己の身心を正しくするをいふ。求諸己は、己の精神態度の正しかりしや否やを反省するなり。

【孟子曰子路—則喜】 朱注に、喜其得聞而改之、其勇於自修、如レ此。

【禹聞善言—則拜】 朱注に、書曰、禹拜昌言。蓋不待有レ過、而能屈己以受天下之善也。

【大舜有レ大焉—以爲善】 朱注に、言舜之所爲、又有大於禹與子路者。善與人同、公天下之善、而不爲私也。己未善、則無所係吝、而舍以從人。人有善、則不待勉强而取之於己。此善與人同之目也。

【自耕稼陶漁—取於人者】 朱注に、舜之側微、耕於歷山、陶於河濱、漁於雷澤。

【與人爲善】 朱熹は與の字を解して、猶許也、助也、といへり。之に従へば、「人ニ善ヲ爲スヲユルヌ」といふべし。

【天時地利人和】 天時は時日・干支・方位等、陰陽五行のこをいふ。朱注に、天時謂時日・支干・孤虛主相之屬也。地理、險阻・城池之固也。人和、得民心之和也。

【三里之城—不如地利也】 狭小なる城郭を包圍攻撃しても、容易に攻落す能はざることあり。其の包圍攻撃して、久しきに亘る間には、天時上、所謂吉日と稱して、勝ち得る筈の日あらん。然るに勝つ能はざるは、何故ぞ。敵が險阻に據り、城壁堅固にして、地の利を占められたればなり。これ天時は地利に如かざるなり。三里は凡そ我が十町、七里は廿餘町なり。朱注に、三里七里城郭之小者、郭外城、環圍也。言四面圍攻、曠日持久、必有値天時之善者。

【城非不高也—不如人和也】 城も高く、池も深く、武器も堅利に、兵糧も多きに拘らず、城を棄てて、走ることあるは、敵の將卒士民相和せずして、力を戮せて防ぐ能はざればなり。是れ地利は人和に如かざるなり。

【故曰域民—攻親戚之所呼】 余、故に曰く、敵に勝たんとすや、一たび怒りて人の國に遊説すれば、大兵を動かすゆゑ、四隣の諸侯恐怖し、落付きて辯舌を用ひざれば、兵革息みて諸侯安堵す。即ち一人の喜怒を以て天下の安危を支配す。實に偉ならずや。人の國とは秦を指す。

【孟子曰是焉—妾婦之道也】 孟子曰く、彼等は何ぞ大丈夫といふに足らんや。子は未だ禮を學ばざるか。男子の元服する時は、父これに命じ、責むるに成人の道を以てす。女子の嫁する時は、母これに命じ、往いて女子を我が門まで送り、之を戒めて曰く、去つて汝の家に往け、必ず慎み戒めて、夫君の命に違ふことなかれと。かくの如く、順從を以て、正道となすは妾婦の道なり。今、公孫衍張儀は秦の如き大國に阿諛し、其の主の顔色を見て、或は兵を起さしめ、或は兵を止めしめ、以て他國を脅威し、詭計詐謀を以て、弱國の土地人民を奪ひ、以て強國を扶く。其の陋劣、男子の愧つる所、是れ即ち妾婦の道なり。安んぞ大丈夫となすを得んや。

【居天下之廣居—此之謂大丈夫】 仁に居り、禮に立ち、義を行ひ、おのれ志を得て、政を爲すを得ば、民と共にこ

欲せば、民が他國に移住せぬやう、國境に關門を設くるにも及ばず、山谷の險を以て國を固むるにも及ばず、武器甲冑の堅利を以て天下を脅威するにも及ばず、道に合ひたるものは助け多く、道に違ふものは助け少し。助け少き極點に達すれば、親戚までも之に背き、助け多き極點に達すれば、天下總て之に順ふ。天下全體の助けある有道の人が、親戚も背く所の無道の人を攻むれば、勝たざるの理なし。

【故君子有レ不戰戰必勝矣】 安井息軒曰く、君子は義にあらざれば戰はざるゆゑ、人戰ふべしと勸むるも、おのれ戰はざることはあり。されど戰ふときは、天下の從ふ所を率ゐて、親戚の畔く所を攻むるものゆゑ、必ず勝つと。朱注には、不戰則已。戰則必勝。とあり。

三 滕文公篇

【景春日—天下熄】 景春は姓名、傳詳ならず。公孫衍は犀首と號す。戰國の策士なり。秦の爲に齊・魏に説きて趙を攻めしめ、以て蘇秦の合従を覆せり。張儀は秦の爲に連衡を唱へたり。景春日く、公孫衍張儀の二人は眞の大丈夫なら

の三者に由て行動し、志を得ずして民間にあれば、獨り我が信ずる道を守り、富貴になりても、其の精神がとろけず、貧賤に居ても、其の心變らず、他の威武の爲にも、其の志を枉げず、正堂堂と、自信の上に立つ、これを眞の大丈夫といふ。朱注に、廣居仁也。正位禮也。大道義也。與民由之、推其所得於人也。獨行其道、守其所得於己也。淫蕩其心也。移變其節也。屈挫其志也。○何叔京曰、戰國之時、聖賢道否。天下不復見其德業之盛。但見姦巧之徒得志横行、氣焰可畏、遂以爲大丈夫。不知由吾子觀之、是乃妾婦之道耳。何足道哉。

【子之王】 宋の君なり。

【傳諸】 傳は教なり。諸は「之乎」の二字と音通するゆゑ、代用せる語なり。故に初めに「コレ」とよみ、次に「カ」と讀むべし。

【一齊人傳之衆楚人咻之】 一人の齊人を備ひ來りて齊語を教ふとも、周圍の楚人どもが、やかましく楚語を使ふゆゑ、それに亂されて、齊語を記得する能はざるなり。

【引而置之莊嶽之間】 子供を引連れ行きて、齊の莊嶽のあ

たりに置けば、周圍は皆齊人のゑ、否應なく、齊語に慣るるなり。

【王誰與爲不善】 王の左右に居るもの、皆薛居州の如き善士のみならば、王は不善をなさんとするも、相手なきゆゑ、自然に善に化す、となり。

【一薛居州獨如宋王何】 薛居州一人のみにては、宋王を善に化する能はず、故に小人を退け、多くの善士を進むべしとの意。

【戴盈之曰一然後已何如】 什一は人民の收穫の十分の一を官に納むる法にして、古の井田の遺制なり。關市は關所を通過する貨物、及び市場の商品に課するものにして、商賈の税なり。宋の大夫戴盈之曰く、先生の説の如き、租税を什が一にして、關市税を撤廢することは、今年は實行し難し。願はくは兩税とも輕減し、來年を待ちて、之を決行せんと。

四 離婁篇

【孟子曰愛人不親云云】 此の章は主として、人君に反省を勧め、己を盡すを第一とすることを説きたるなり。

【愛人不親反其仁】 人を愛しても、人親しまざれば、我が身を省みて、其の缺點不足を尋ね、仁道を行ふべしとなり。

【行有不仁者皆反求諸己】 我が施行命令することにして、思ひ通りにならぬ時は、己に反省して、其の理由を考求するなり。朱注に、不得、謂不得其所欲。如不親不治不答是也。反求諸己、謂反其仁、反其智、反其敬也。如此、則其自治益詳、而身無不正矣。天下歸之、極言其效也。

【不仁者可與言哉】 不仁者は、とても話し相手にならず。忠告しても效なし、となり。

【安其危樂其所以亡者】 所以亡は、亡ぶる道といふが如し。酒色に荒淫し、下民を暴虐するが如きをいふ。不仁者は私欲に迷ひ、本心を失ふが故に、己の危急災禍に瀕するを知らずして、却て之を安利とし、滅亡を招く道を樂しんで、悟らず、となり。朱注に、安其危利其菑者、不知其爲危菑、而反以爲安利也。所以亡者、謂下荒暴淫虐所以致亡之道也。

【不仁而可與言則何亡國敗家之有】 不仁者なりとも、仁者の話相手となりて、忠告を容れなば、何ぞ國を亡し、家を失ふことあらんや、救済の道あらん。されど本心既に亂るゆゑ、忠告を容るる能はず、となり。朱注に、不仁之人、私欲固蔽、失其本心。故其顛倒錯亂至於如此。所以不可告以忠言、而卒至於敗亡也。

【有孺子歌曰一可以濯我足】 孺子は子供なり。滄浪は水の名、漢水の支流なり。纓は冠の紐なり。

【孔子曰小子聽之自取之也】 小子は門人をいふ。自取之は、纓には清を取り、足には濁を取るは、これ自ら取るをいふ。これは次の如く、禍は自ら取るものなることを言はん前提として、孔子の「自取之也」の語を引きたるまでにし、深き意あるにあらず。

【人必自侮然後人侮之】 人は必ず自ら人に侮らるるが如きことをするゆゑ、人が之に乗じて侮るなり、との意。

【孟子曰自暴者一不可與有爲也】 自ら其の身を害ふものは、これと言ふも益なし。何となれば、人の言を輕んじて信ぜざればなり。自ら其の身を棄つるものは、これと

事を爲し難し。何となれば、怠惰に溺れて、勉むる能はざればなり。朱注に、暴猶害也。非猶毀也。自害其身者、不知禮義之爲美、而非毀之。雖與之言、必不見信也。自棄其身者、猶知仁義之爲美。但溺於怠惰、自謂必不能行。與之有爲、必不能勉也。程子曰、人苟以善自治、則無不可移者。雖昏愚之至、皆可漸磨而進也。惟自暴者拒之以不信、自棄者絕之以不爲、雖聖人與居、不能化而入也。此所謂下愚之不移也。

【仁人之安宅也義人之正路也】 仁は人の居るべき安全なる家宅なり。義は人の蹈むべき正當なる通路なり。朱注に、義者宜也。乃天理之當行、無入欲之邪曲。故曰正路。

【曠安宅一哀哉】 人は仁といふ安宅を空明にして居らず、却て危険の不仁に居り、義といふ正路を捨てて通らず、却て邪曲なる横道に入る。痛歎すべきことなりとの意。朱注に、曠空也。由行也。

【孟子曰道在爾一天下平】 道は手近にあるものなるに、人はこれを知らずして、遠きに求めんとす。行ふ事は易き所にあるものなるに、人は難きに求めんとす。人々其の親に孝

に、其の長に弟なれば、天下はよく治まるものなり。これ近くして、且易きものなり。ことさらに道德上深遠なる原理を深るの要なし、となり。朱注に、親長在人爲甚邇親之、長之、在人爲甚易。而道初不外是也。舍此而他求、則遠且難、而反失之。但人人各親其親、各長其長、則天下自平矣。

【居下位而不獲於上民不可得而治】 人臣となりて、君の信任を得ざれば、人民を治むことを得ず。何となれば、君より疑の目を以て見られ、所信を行ふ能はざればなり。

【不明乎善不誠其身】 善といふことを明に知りて、之を好むこと食を好むが如くならざれば、身に誠實は存在せざるなり。惟人に知られんがためにする善の如きは、虚偽的のものにして身に誠あるものにあらざるなり。

【誠者天之道也思誠者人之道也】 誠は自然の眞理にして、恒久不變なり。誠の反は偽なり。誠を離れず、偽なからんことを思ふは、人の務むべき道なり。朱注に、誠者理之在我者、皆實而無偽。天道之本然也。思誠者、欲此理之在我者皆實、無偽。人道之當然也。

【至誠而不動者未之有也】 我が至誠に對して、反應のなきものは決してあらず、となり。朱注に、至極也。揚氏曰、動便是驗處、若獲乎上、信乎友、悅乎親、是也。

【存乎人者莫良乎眸子】 人の身にあるもの、中、最もよく其人を表すは、瞳子よりよきものはなし、となり。朱注に、良善也。眸子目瞳子也。瞭明也。眊者、蒙蒙目不明之貌。蓋人與物接之時、其神在目。故胸中正、則神精而明。不正則神散而昏。

【聽其言也觀其眸子一人焉度哉】 其の人の言ふ所を聴き、且其の瞳子を見れば、人は其の邪正を匿す能はず、となり。朱注に、度、匿也。言亦心之所發、故并此以觀、則人之邪正不可匿矣。然、言猶可以僞爲。眸子則有不容僞者。

【子産聽鄭國之政一澹洵】 子産、鄭國の大夫たるとき、澹洵の二水に於て、人の徒涉せんとするものあるを見て、我が乗れる輿車に乗せて、之を渡したり、となり。

【孟子曰惠而不爲政】 孟子曰く、子産は小惠を知りて、政治家として爲すべき政治の大綱を知らず、となり。朱注

に、惠謂私恩小利。政則有公平正大之體、綱紀法度之施焉。

【歲十一月一民未病涉也】 歳の十一月は、農事畢れる時なれば、民力を以て徒杠を作り、十二月は沍寒の候なれば、輿梁を作るは古の制なり。斯くせば、人民は徒涉の苦痛なし。子産はこの法に依らずして、一時の小惠をなす、これ政治の要を知らざるなり、との意。朱注に、周十一月夏九月也。周十二月夏十月也。夏令曰、十月成梁。蓋農功已畢、可用民力。又時將寒沍、水有橋梁、則民不患於徒涉。亦王政之一事也。

【君子平其政一濟之】 政治家は其の政治を公平に國中に行互らしめば、我が行く時に當つて、往來の人を避け退かしむるも可なり。何ぞ我が乘輿を以て人を渡すに及ばんや。且國中渉るべき水多し。豈一乘輿を以て濟すべけんや。

【故爲政者一曰不足矣】 故に政治家は、人毎に一一悦ばせんとせば、人は多く、日は少きのを、とてもやり切れぬとなり。朱注に、言每人皆欲致私恩以悅其意、則人多日少、亦不足於用矣。諸葛武侯嘗言、治世以大德、不以

以三小惠得三孟子之意矣。

【孟子曰事孰爲大一事親爲大】 君に事へ、長に事ふる等、事ふること多き中に、孰れが大切なるかといへば、親に事ふることが大切なり、との意。

【守孰爲大守身爲大】 國を守り、官を守る等、守ることの多き中に、孰れが大切かといへば、身を守ることが、大切なりとの意。朱注に、守身、持三守其身、使レ不レ陷二於一不レ義也。一失三其身、則レ虧レ體辱レ親。雖三日用三牲之養、亦不レ足三以レ爲レ孝矣。

【孰不爲事親事之本也】 君に事ふるも、長に事ふるも、孰れも事ふなれども、親に事ふるは、事ふることの根本なり、との意。朱注に、事親孝、則忠可レ移三於二君。順可レ移三於二長。

【孰不爲守身守之本也】 國を守り、官を守る、孰れも守るなれども、身を守るは、守ることの根本なりとの意。朱注に、身正、則家齊、國治而天下平。

【將徹必請所與】 膳を下げんとするとき、必ず餘を誰に與ふべきかと尋ぬるなり。

【曰有】 父の欲する人に與へんためなり。

【曰亡】 父の好む所の酒肉ゆる、餘しおきて、再び進めんためなり。曾元は唯父の口體を養ふのみ。

【養志】 父に快感を起さしむるをいふ。

【徐子】 孟子の門人徐辟といふものなり。

【仲尼亟稱水】 孔子周遊し、まさに晋に往かんとして果さず、河に臨んで歎じて曰く、美なるかな水、洋洋乎たり、丘が濟らざるは是れ命なりと。又、川上の歎あり、前に出でたり。

【何取於水也】 水の何如なる點を歎美するや、となり。

【原泉混混一是之取爾】 原泉は水源なり。盈科而後進は、窪き穴の處をば充たして後、前に進むなり。有レ本者如レ是は、水の源あれば流れて盡きざるが如く、人も實力あれば、進みて已まざるをいふ。朱注に、原泉有レ原之水也。混混湧出之貌、不レ舍三晝夜、言三常出不レ竭也。盈滿也。科坎也。言三其進以レ漸也。放至也。言三水有レ原本不レ已、而漸進以レ至于海、如レ人有レ實行、則亦不レ已、而漸進以レ至于極也。

【苟爲無本一君子恥之】 苟爲無本は、もし本原なくん

ばの意。朱注に、集聚也。滄田間水道也。涸乾也。如下人無三實行、而暴得三虛譽、不能レ長久也。聲聞、名譽也。情實也

恥者、恥三其無レ實而將レ不レ繼也。林氏曰、徐子之爲人、必有三躐レ等三于レ譽之病。故孟子以レ是答レ之。

【好貨財一私妻子】 利殖を好み、妻子のみを偏愛するなり。

【從耳目之欲一以爲父母戮】 聲色に耽りて、父母にまで恥辱を及ぼすなり。

【鬪狠以危父母】 他人と鬪争して、父母にまで危難を及ぼすなり。

【章子有レ一二於是一乎】 章子には、この内、一つにてもあるか、有ることなし、となり。

【子父責善而不相遇】 子は父の非に對して、善を責め、父は子の非に對して、善を責め、かくて父子の間、和合せざるなり。

【責善朋友之道也】 互に忠告して、善に進むを責むるは、朋友の間になすべきことにして、父子の間に行ふべきにあらず、となり。

【賊恩】 恩愛の情を害ふなり。

【子母】 母は子よりすれば母にして、章子よりすれば妻なり。

【得罪於父不レ得近】 父に勘當せられて、近よるを得ざるなり。

【屏レ子】 子を他所に遣るなり。

【終身不レ養】 終身妻子の奉養を受けず、となり。

【其設心以爲不若是則罪之大者】 其の心がけに就きて想像するに、おのれ父を養はずして、妻子と安樂に暮すは罪の大なるものと思ひて、妻子と別れたるならん、となり。

【是則章子已矣】 これが章子の心底なりと、同情すべき所あるをいふ。朱注に、此章之旨、於衆所レ惡而必察焉。可三以見聖賢至公至仁之心矣。楊氏曰、章子之行、孟子非取レ之也。特哀三其志、而不レ與レ之絕レ耳。

【一妻一妾】 一人の妻と一人の女中なり。

【處レ室】 官職もなくて家に居るなり。

【顯者】 身分の貴きもの。

【施從】 見え隠れに跡をつけ行くなり。

【東郭】 東の方の城外。

【所三仰望而終レ身】 終身吾が所天として尊敬する所。

【由君子觀之幾希矣】君子の目より見れば、今の士人の富貴榮達を求むる方法は、この齊人に異ならず。其の昏夜權門に趨りて、哀を乞ふの状を見れば、妻妾すら羞とせざらんや、而して中庭に相泣かざるものは幾んど希ならん、となり。朱注に、趙氏曰、言今之求富貴者、皆以枉曲之道、昏夜乞哀、以求之、而驕人於白日。與斯人何以異哉。

五 萬章 篇

【仕非爲貧也而有時乎爲貧】官途に就くは、己が貧窮を凌ぐが爲にあらざして、我が道を政治に實現せんが爲なり。然れども時としては、家貧しく親老いて、孝養も思ふに任せぬなどの爲に、仕へて祿を食むことあり。この時の目的は己の道を行ふにあらざして、祿を得るにあり。

【娶妻非爲養也而有時乎爲養】妻を娶るは己が生活を助けためにあらざして、繼嗣を得るにあり。然れども、時としては、おのれ水を汲み、米を舂くことならぬため、生計を資けしめんため娶ることあり。

【爲貧者一辭富居貧】貧しきがために仕ふるは、生計を維

持するにありて、富が目的にもあらず、政治が目的にもあらざれば、高き地位を辭して、低き位地に就き、厚祿を辭して、薄祿に安んずべし、となり。朱注に、貧富謂祿之厚薄。蓋仕不爲道。已非進退之正。故其所居、但當如此。

【辭尊居卑一抱關擊柝】尊を辭して卑に居り、富を辭して貧に居るには、加何なる職がよろしきか。門番にても、夜廻りの拍子木叩きにても可なり。朱注に、柝夜行所擊木也。蓋爲貧者、雖不主於行道、而亦不可以苟祿。故惟抱關擊柝之吏、位卑祿薄、其職易稱、爲所宜居也。李氏曰、道不行矣。爲貧而仕者、此其律令也。若不能然、則是貪位慕祿而已矣。

【孔子嘗爲委吏一壯長而已矣】孔子嘗て魯に仕へ、倉廩の係りとなりしとき、曰く、吾が責任は米粟出納の計算を間違へざるにあるのみと。又、牧畜の係りとなりしとき、曰く、牛羊を肥大に壯長せしめば、吾が事足れりと。政治の大才を抱きながら、卑賤の俗務に甘んじて、不平も不満もなかりき。これ貧の爲に仕へたる故なり。朱注に、此孔子

之爲貧而仕者也。委吏主委積之吏也。乘田主苑囿芻牧之吏也。蕞肥貌。言以孔子大聖、而嘗爲賤官、不以爲辱者、所謂爲貧而仕。官卑祿薄、而職易稱也。

【位卑而言高罪也一恥也】本朝は政務を執る所にして、重臣の位地なり。位地の卑き俗吏にてありながら、高き政務に喙を容るるは、越權の所爲にして、これは罪惡なり。本朝に立つて大臣となり、吾が信ずる道の政治に實現せざるは、吾が無能を表白するものにして、これは恥辱なり。朱注に、以出位爲罪、則無行道之責。以廢道爲恥、則非竊祿之官。此爲貧者之所下以必辭尊富而寧處貧賤也。○尹氏曰、言爲貧者、不可以居尊、居尊者必欲以行道。

【孟子謂萬章曰一斯友天下之善士】友は類を以て集るの意なり。朱注に、言己之善蓋於一鄉。然後、能盡友一鄉之善士。推而至於一國天下皆然。隨其高下、以爲廣狹也。【以友天下之善士一是尙友也】尙は上と同じ。尙論は進み上りて講究する意。尙友は進みて友とする意。この章の意は、天下の善士を友とするだけにては満足出來ず、進みて古

の人を研究す。これを研究するに、其の人の詩を誦み、其の人の書を讀むのみにて、其の人の人物如何を知らざれば、效果なし。故に其の人の當時に於ける行事を研究す。是を尙友、即ち進みて古人を友とす、といふ。朱注に、尙上同。言進而上也。頌誦通。論其世、論其當世行事之迹也。言既觀其言、則不可不知其爲人之實。是以又考其行也。夫能友天下之善士、其所友衆矣。猶以爲未足、又進而取於古人。是能進其取友之道。而非止爲一世之士一矣。

六 告子 篇

【告子曰一無分於東西也】湍水は瀬の水なり。決は土をさくりて、水を通ずるなり。人性云云は、人の本性には、もと善惡なし。其の指導境遇の如何により、善にも惡にもなるとの意。

【孟子曰水信無分一水無有不下】無分於上下乎は、高きより低きに流るることは、定まれり、となり。孟子は、人の本性は善なり、といふなり。

【今夫水一亦猶是也】人之可使爲不善云云は、人の本性は善なれども、物欲に誘はれ、利害に迫られて、不善をなすものにて、水が勢に激すると、同じとなり。朱注に、搏撃也。躍跳也。類類也。水之過瀬、在山、皆不就下也。然其本性未嘗不就下。但爲搏激、所使而逆其性耳。○此章言性本善。故順之而無不善。本無惡。故反之而後爲惡。非本無定體、而可以無所不爲也。

【孟子曰仁人心也一求其放心而已矣】心は心棒といふが如し。人が身を立て、世に處するに、缺くべからざるものなり。路は履むべき路にして、人として當然行ふべきことなり。放心は仁を取逃す意にて、不仁なるなり。

【無名之指】手の第四指、即ちクスリユビなり。
【非疾痛而害事】痛みて仕事のさはりとなるにはあらず、となり。

【不遠秦楚之路】秦や楚の遠き國までも往きて、治療す、となり。孟子は都の人にして、ここにありて言へるなり。都は今の山東省にあれば、秦にも楚にも遠し。

【爲三指之不若人也】指が人並ならぬゆゑ、之を恥ぢて、遠

きを厭はず往くなり。

【不知類】輕重の分を知らざるをいふ。

【天爵人爵】趙註に、天爵以徳、人爵以祿。朱註に、天爵者徳義可尊、自然之貴也。

【人爵從之】天爵を修めたる結果、人爵自ら至るなり。

【修其天爵而以要人爵】人爵を得る手段として、天爵を修むるなり。

【得人爵而棄其天爵】祿位を得れば、徳義を棄て、顧みざるなり。

【終亦必亡而已】終には必ず、其の得し所の人爵をも、併せて之を失はん。となり。

【今之爲仁者云云】水は火に勝つの性あれども、一杯の水にては、一車に積む程の薪の火を消すこと能はず。何となれば、其の分量足らざればなり。今の仁をなすものは、之を爲すこと一杯の水の如く、而して不仁をなすことは一車薪の火の如し。かくて、仁は不仁に勝つ能はず、といふは誤れり。朱注に、與猶助也。仁之能勝不仁、必然之理也。但爲之不力、則無以勝不仁、而人遂以爲眞不能勝。是

我之所爲、有以深助於不仁者也。

【亦終必亡而已矣】不仁に與して、仁を爲すを怠れば、終には義になしたる一杯の水ほどの仁をも併せて失はん、となり。

【九尺四寸以長】九尺四寸にして、湯よりも四寸長しとなり。

【食粟而已】飯を食ふのみにて、他に能なし、となり。

【奚有於是】何ぞ身の長短等に關係あらんや。

【不能勝一匹雛】一匹の雛をも持上ぐる能はざるなり。

【烏獲之任】烏獲は戰國時代の有力の人なり。能く千鈞を擧げ移ししといふ。任は重荷なり。

【夫人豈以不勝爲患哉弗爲耳】人は何事も爲せば成るものなり。其の事に勝へられずと心配するに及ばず、唯自棄して爲さざるが始末に困る、となり。

【鄰君】孟子が居る所の鄰國の君なり。

【館】宿舎なり。

【人病不求耳】道は知り易きものなるに、知ることを求めざるには困るとなり。

【子歸而求之有餘師】堯舜の道は孝弟なれば、子は歸つて

道を親に事へ、長を敬する間に於て實際に求めば、孝弟の道より推して萬理を發見するゆゑ、多くの師に就くが如し。即ち師は餘るほどあり、何ぞ余一人の教を受くるに及ばんや、となり。

【孟子曰舜發於畎畝一百里奚舉於市】舜初め歷山に耕す。三十にして堯に登庸せらる。説、役夫となり、傅巖と稱する通道を、土石を壞さざる爲に、板を以て築く。殷の高宗(名は武丁)夢を感じ、圖を以て尋ね求めて擧げ用ふ。其の傅巖に得たるを以て傳説といふ。膠鬲は殷の紂王の亂世に遭ひ、魚鹽を販ぐの賤業をなす。周の文王に擧げらる。管仲は齊の桓公に讐し、魯にあり。魯の士師(獄官)に囚はれ、齊に送らる。桓公怨を捨て之を用ふ。孫叔敖は南海の濱に隠棲す。楚の莊王これを擧ぐ。百里奚は市井の中より、秦の穆公に擧げられたり。

【故天之將降大任一曾益其所不能】以上の人人は、其の志を得る前に於て、皆艱難辛苦を嘗めたり。故に天が天下の重任を其の人に降さんとする時は、先づ其の人の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の身體を飢餓せしめ、其の

身を貧窮にし、其の爲す所は其の志と背戻して遂げざらしむ。これは困苦缺乏の爲に、思慮を勞し、性情を忍び、其の不能なる所に熟達することを増益せんがためなり、との意。拂は戻なり。性は氣稟食色を指して言ふ。

【人恒過一後喻】 上は聖賢にも身心の鍛鍊を要するをいひ、ここは中人に刺激の必要あるをいふ。一般の人は、過あつて後改むるものなり。即ち事勢窮迫して、心に困しみ、思慮に餘るやうになりて、然る後奮發興起す。憤怒の情が人の色に形れ、譏謗の言が人の聲に發するに至つて、然る後、己の過を悟りて、之を改むとなり。朱注に、此又言中人之性、常必有過、然後能改。蓋不能謹於平日。故必事勢窮蹙、以至困於心、横於慮、然後能奮發而興起。不能燭於幾微。故必事理暴著、以至驗於人之色、發於人之聲、然後能警悟而通曉也。

【入則無法家拂士一國恒亡】 法家は法度を守る世臣。拂士は輔弼の賢士。拂は弼と同じ。内には法家拂士ありて人主を規諫し、外には敵國外患ありて、警懼する所なければ、紀綱弛緩し、人民腐敗して、かかる國は常に亡ぶるものなりとの意。

【然後知生於憂患而死於安樂也】 然る後、憂患は生存の要素にして、安樂は死亡の基因たることを知るとなり。

七 盡心篇

【孟子曰孔子登東山一難爲言】 孟子曰く、孔子は魯の城東の高山に登りて下瞰し、魯國を小なりと感じ、更に高き泰山に登りては、天下を小なりと感ず。處る所高ければ、下を見て小なりとすること此の如し。故に大海を見たるものは、他の衆水を物の數ともせず。聖人の門に遊びて、教を受けたるものは、衆人の言を言と思はずと。これ見る所大なれば、小なるものの見るに足らざるをいふ。

【觀水有術一容光必照焉】 水を觀るに方法あり。必ず其の急湍奔流の處を見よ。これを見れば、其の原泉の混混たるものあるを知るべし。日月が容光(小隙)をも必ず照すを見れば、明といふ根元あるを知るべし。聖人も亦かくの如し。其の言語態度の立派なるは、道といふ本あるに由る。

【流水之爲物也一不成章不達】 流水は坎を充たしたる後

にあらざれば、先に進まず。君子の道を學ぶものは、文章を成さざれば、道に上達したりといふべからず。文章とは威儀言辭等の齊整して光彩あるをいふ。

【孳孳】 孜孜と同じ、勤勉の意。

【楊子】 名は朱、蓋し孔子・墨子より後に出づ。傳詳かならず。【取爲我】 我が爲にすることを主とす。即ち自愛主義なり。

【拔一毛一云々】 列子、楊朱篇に、楊朱曰、伯成子高、不以一毫利物。舍國而隱耕。大禹不以一身自利。一體偏枯。古之人損一毫利天下不與也。悉天下奉一身不取也。人々不損一毫、人々不利天下、天下治矣。禽子問、楊子曰、去子體之一毛、以濟一世、汝爲之乎。楊子曰、世固非一毛之所濟。禽子曰、假濟爲之乎。楊子曰、應云々。

【墨子】 名は翟、周末の人。宋の大夫なり。嘗て宋の城をよく守りて、楚の軍を却けたり。墨守の語、これより出づ。

【墨子兼愛】 墨子、兼愛篇に詳なり。凡そ、天下の禍褻怨恨の止まざる所以のものは、人々相愛せず、交、相利せざるに基因するものなれば、人々兼て相愛し、交、相利するの道を立つべし。となり。兼愛とは、人の國を視ること我が國を

視るが如く、人の家を視ることが我が家を見るが如く、人の身を視ること我が身を視るが如くするなり。

【摩頂放踵】 勞苦のため、頭頂より次第に摩消して、下踵に至るも、天下のためならば、楽しんで、之を爲すなり。

【子莫執中一猶執一】 子莫は魯の賢者なり、楊墨の説の極端なるを知りて、其の中を執る。即ち楊と墨との中間を執る。中を執るの語は、聖人の所謂時中の中に近きが如くにして、其實然らず。聖人の中は、權を用ひて、物を輕重するが如く、宜しきを得ることなれども、子莫の中は楊墨の中程と一定して、融通利かず、權を要せざるが如きものなれば、楊子が自愛といふ一を固執すると、さしたる相違なし。

【所惡執一者一廢百也】 一を執ることを排斥する所以は、聖人の道に害へばなり。ただ一事を高調して、これと利害得失相反する他の百事を沮廢すればなり。朱注に、賊害也。爲我害仁。兼愛、害義。執中者、害於時中。皆舉一而廢百者也。此の章は一方に偏する説を攻撃したるものにて、楊・墨・子莫、皆一を執るの病あり。唯聖人の道にはこの弊

なし、されば、これ等の人の説の長所は、皆聖人の道の中に含蓄せり。故に百事に應用し得、壅塞することなきを述べたるなり。

【未得飲食之正】 口腹が飢渴の爲に害せられて、眞の味を解せざるなり。

【人心亦皆有害】 口腹は飢渴の爲に害せらる。故に飲食に於て、擇ぶに暇あらずして、其の正味を失ふ。人心は貧賤のために害せらる。故に富貴に於て、擇ぶに暇あらずして、其正理を失ふ。

【無以飢渴之害爲心害】 飢渴が口腹を害する如くに、貧賤が心を害せぬやうにするをいふ。朱注に、人能不以貧賤之故而動其心、則過人遠矣。

【王子執問曰士何事】 ここにいふ士は處士の意にて、官途にあらざるをいふ。朱注に、塾齊王之子也。上則公卿大夫、下則農工商賈、皆有所事。而士居其間、獨無所事。故王子問之也。

【孟子曰尙志】 朱注に、尙高尚也。志者心之所之也。士既不得行公卿大夫之道、又不當爲農工商賈之業、則高

尙其志而已。

【曰何謂尙志——大人之事備矣】 朱注に、非仁非義之事、雖小不爲。而所居所由無不在於仁義。此士所以尙其志也。大人謂公卿大夫。言士雖未得大人之位、其志如此、則大人之事、體用已全。若小人之事、則固非所當爲也。

【孟子曰君子之所教者五】 君子が人の性質、人品の高下により、教ふる方法五つあり、となり。今日の所謂個性教育なり。朱注に、下文五者、蓋因人品高下或相去、遠近先後不同。

【有如時雨化之者】 其の人の天資高く、學力到り、今一層深きを致さんと欲する處に、時雨の澤が草木を霑して、發育を促進するが如く、時に適する教を施すをいふ。朱注に、時雨及時之雨也。草木之生、種種封植、人力已至、而未能力自化。所少者雨露之滋耳。及此時而雨之、則其化速矣。教人之妙、亦猶是也。若孔子之於顏、曾、是已。

【有成德者有達財者】 其の人によりて、徳を成就せしむるあり。材能を發達せしむるあり。朱注に、財與材同。

此各因其所長而教之者也。成德如孔子於冉・閔。達財如孔子於子由・賜。

【有答問者】 問に答へて、悟らしむる者もあり。朱注に、就所問而答之。若孔孟之於樊遲・萬章也。

【有私淑艾者】 門に至り業を受くる能はざるが爲めに、其の君子の道の人聞きにして、善く其の身を治むるものもあり。朱注に、私竊也。淑善也。艾治也。人或不能及門受業、但聞君子之道於人、而竊以善治其身。是亦君子教誨之所及。若孔孟之於陳亢・夷之是也。孟子亦曰、予未得爲孔子之徒也。予私淑諸人也。

【此五者君子之所教也】 この五つは、君子の人を教ふる方法なり。朱注に、聖賢施教、各因其材。小以成小、大以成大。無棄人也。

【孟子曰言近——道存焉】 孟子曰く、言ふ所は誰にも分り易く近易にして、其の意味の廣く深く、内容の豊富なるは、善言なり。行ひ守る所はちんまりと狭くして、其の影響の博く普及して、衆人の模範となるは善道なり。君子の言は至近にして、道その内に具備す。朱注に、古人視不下於帶。

則帶之上、乃目前常見、至近之處也。舉目前之近事、而至理存焉。所以爲言近而指遠也。

【君子之守修其身而天下平】 君子の守る所は、ただ其の身を修むるのみ。約なりといふべし。それより次第に波及して天下太平となる。所謂施すこと博きなり。

【人病——所以自任者輕】 一般の人が自己の爲すべきことを棚に上げて、ただ人の世話をやくは、よからぬことなり。即ち人に要求する行を重くして、自己の責任を軽くす。これは、守り約ならずして、唯博く施さんとするものにして、人これに従はず。

【孟子曰說大人——巍巍然】 尊貴の人に自説を陳べんとするときは、相手を軽く見てかかるべし。即ち呑みかかるべし。其の儼然たる所に、目をくるべからず。朱注に、趙氏曰、大人當時尊貴者也。藐輕之也。巍巍富貴高顯之貌。藐焉而不畏之、則志意舒展、言語得盡也。

【堂高數仞——吾何畏彼哉】 得志は高貴の身となるなり。驅騁田獵後車千乘は、多くの供人を従へ、車馬を驅りて、畋獵に出づるなり。古之制は、古の聖賢之法なり。朱注に、棖

梅也。題頭也。食前方丈、饌食列於前者方一丈也。此皆其所謂巍巍然者。我雖得志有所不爲、而所守者皆古聖賢之法。則彼之巍巍者何足道哉。○楊氏曰、孟子此章、以己之長方人之短。猶有此等氣象。在三孔子則無此矣。

新選漢文卷五餘錄教授參考終

新選漢文教授參考 卷五

昭和二年八月十二日印刷
昭和二年八月十五日發行

非賣品

編者 光風館編輯所

東京市神田區通神保町六番地

印刷者兼 上原才一郎

東京市神田區通神保町六番地

發行所 光風館書店

〔電話〕神田三〇八七番
〔振替口座〕東京三二七番



東京高等師範學校教授 文學博士 中村久四郎編

文部省檢定済 新選漢文 洋裝全五冊

光風館編輯所編 新選漢文教授參考 上製全五冊 (非賣品)





